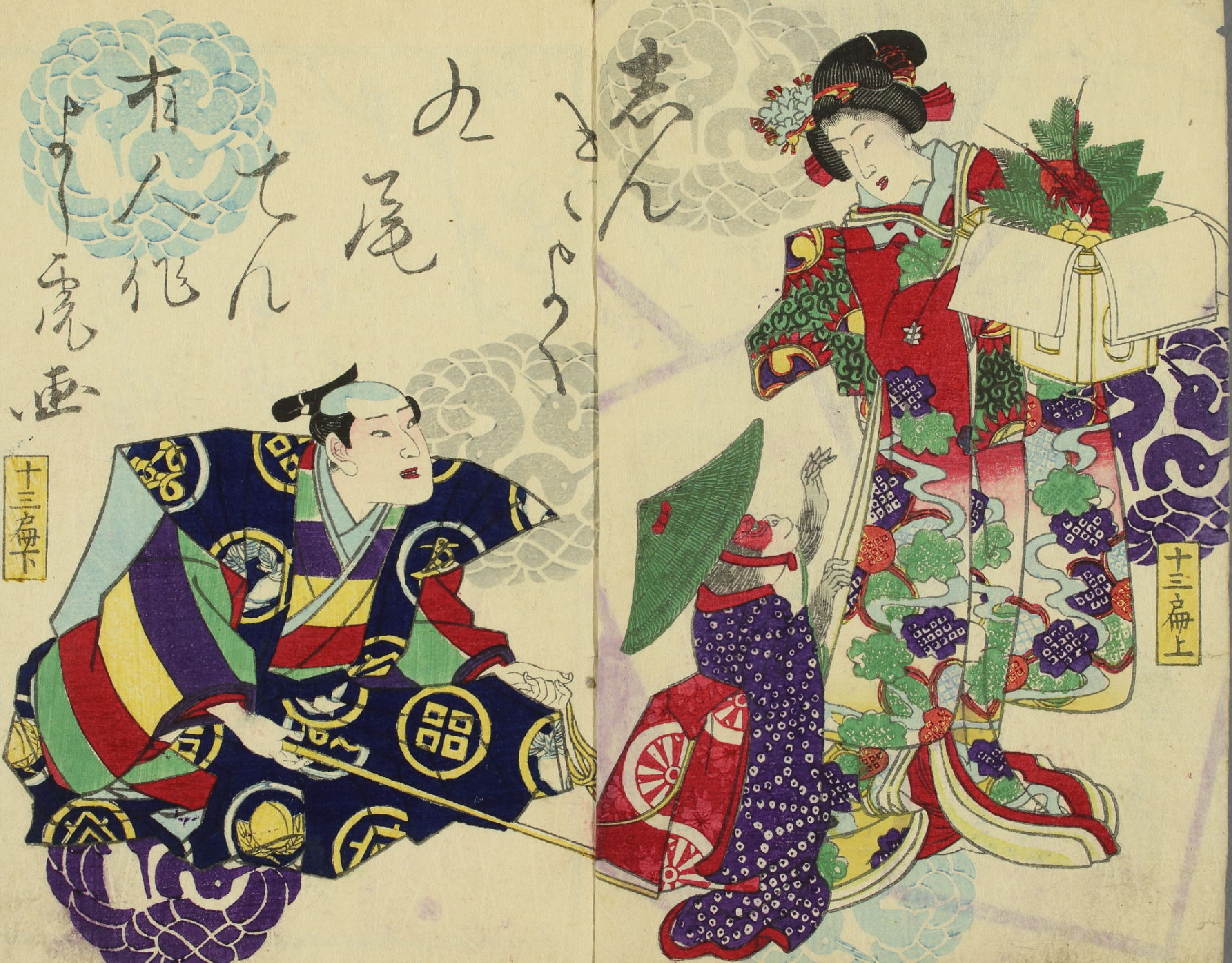
十二ヶ月の花
志んきやう
九尾傳
芳幾筆

へ 13
3683
7



志んきよく
め尾てん

有人作
よし虎画

十三扁上

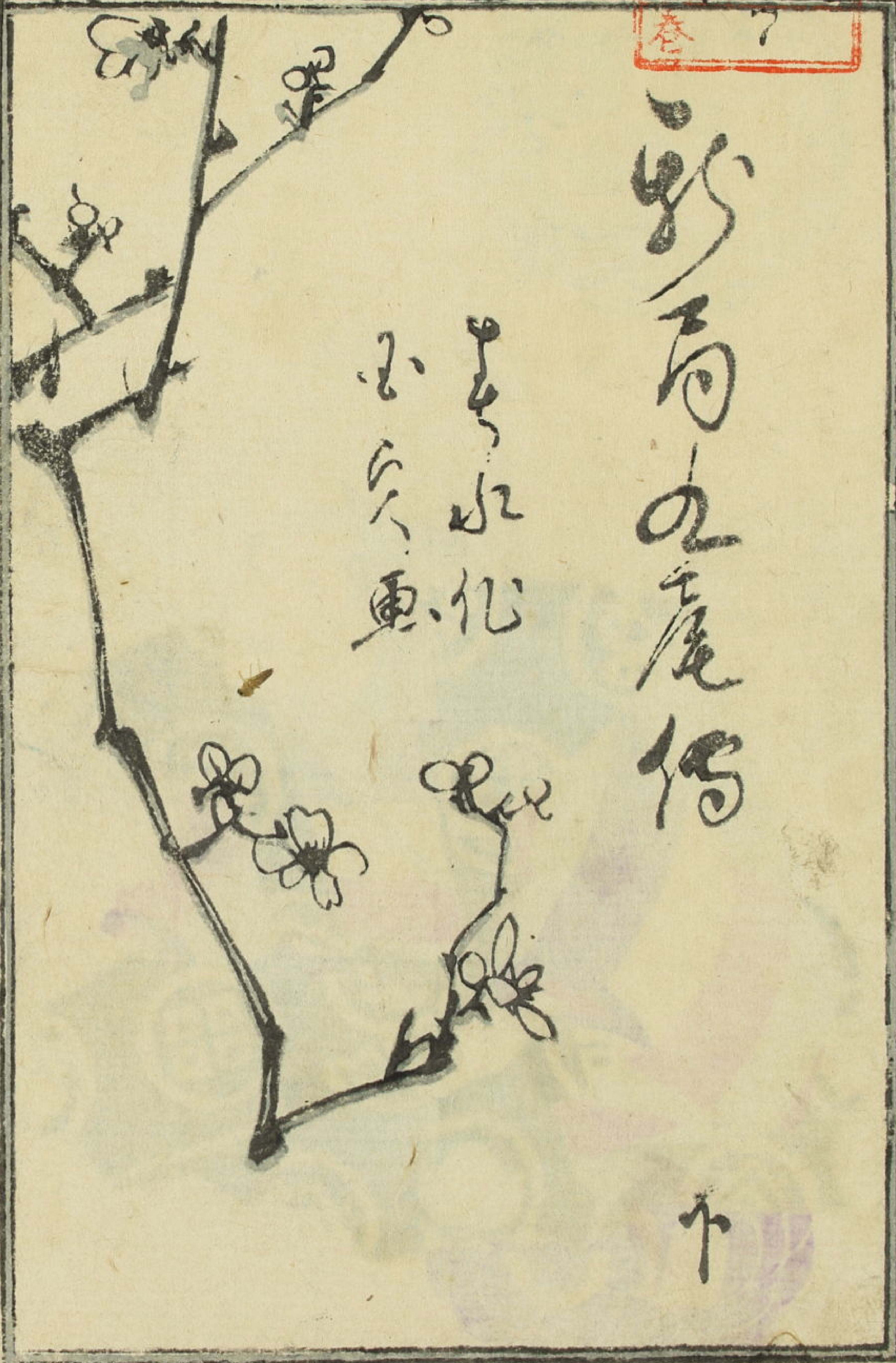
十三扁下

門 へ 13
號 3683
卷 7

新局九尾傳

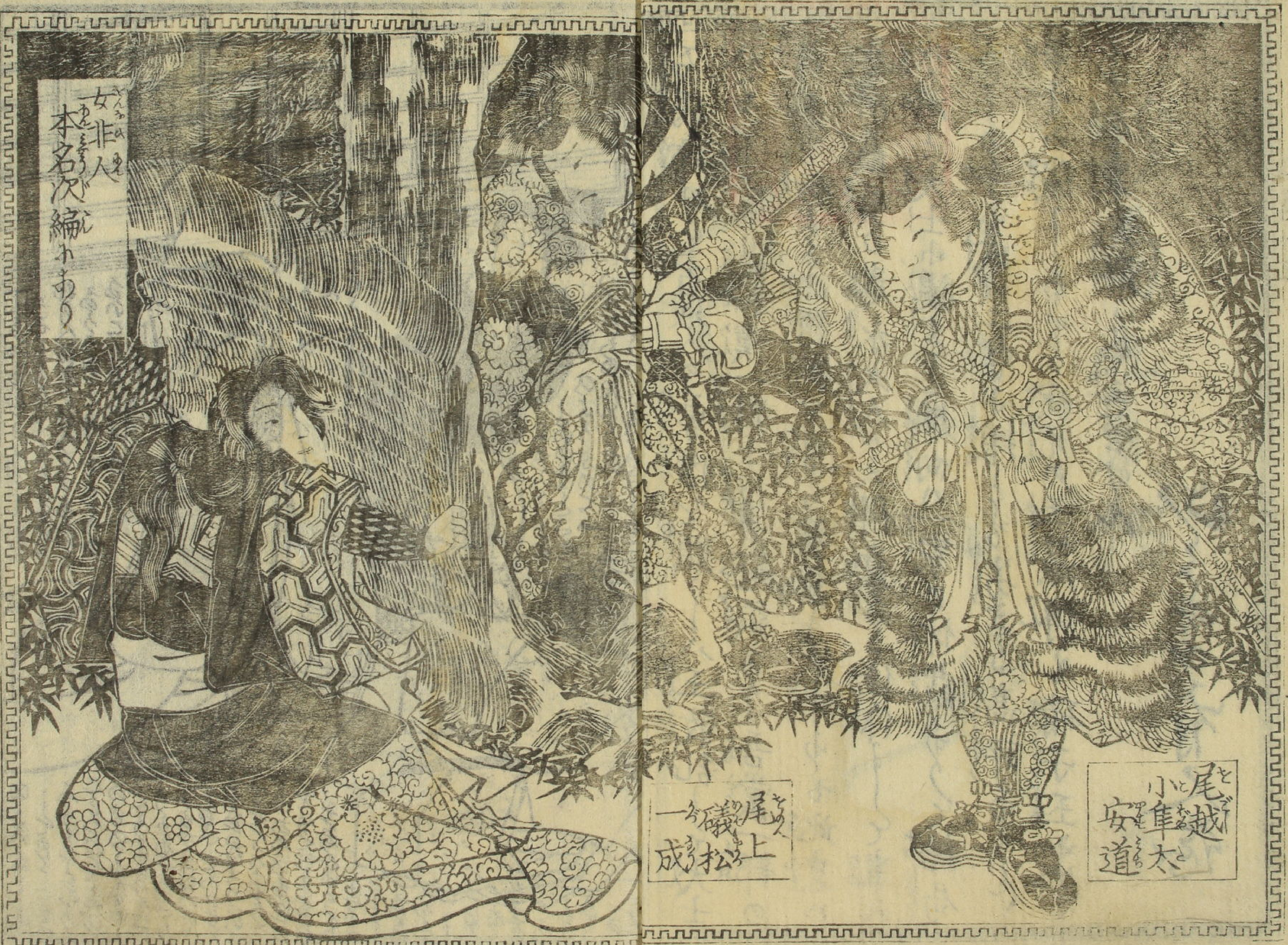
春水作
玉貞画

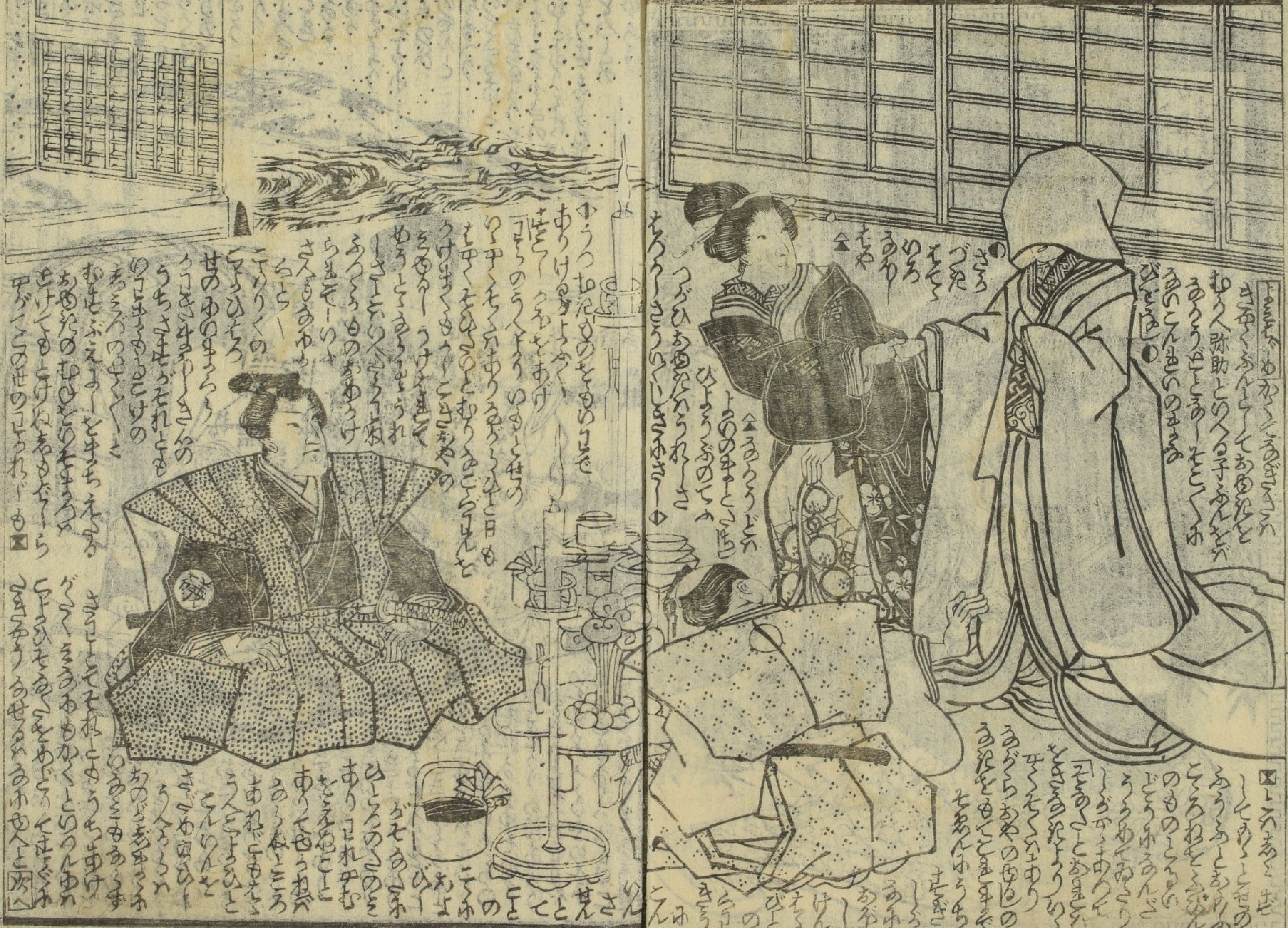
下



石碣碎けて百八人の豪傑を顕し八玉散乱して八犬士八名と生まる是和漢一對小説の冠頭なり吾黨一部の戯著を做すに此糟粕を嘗らぬハ無きが中なる此史ハ水滸贔屓の為永大人が大得意なる佳作にして事ハ水滸と犬士に據れども趣向ハ一家の体裁ありて結局らうしの手に成が二書に増とも劣ざる高評あらんと吾手に穢しあたら夜光の玉藻傳を礫子玉に等しくて事尾鮮とや云爲けん

山々亭有人誌


女非人
本名次編かあり
尾上義松
一名成
尾越小隼太
安道



ト▲きかくめかくしをば[illegible]れきゆくぶんしてお由紀をむかく弥助とのくる子ぶんをがまかうがとあーそとくゆあいこんまいのまゝびとはし◐

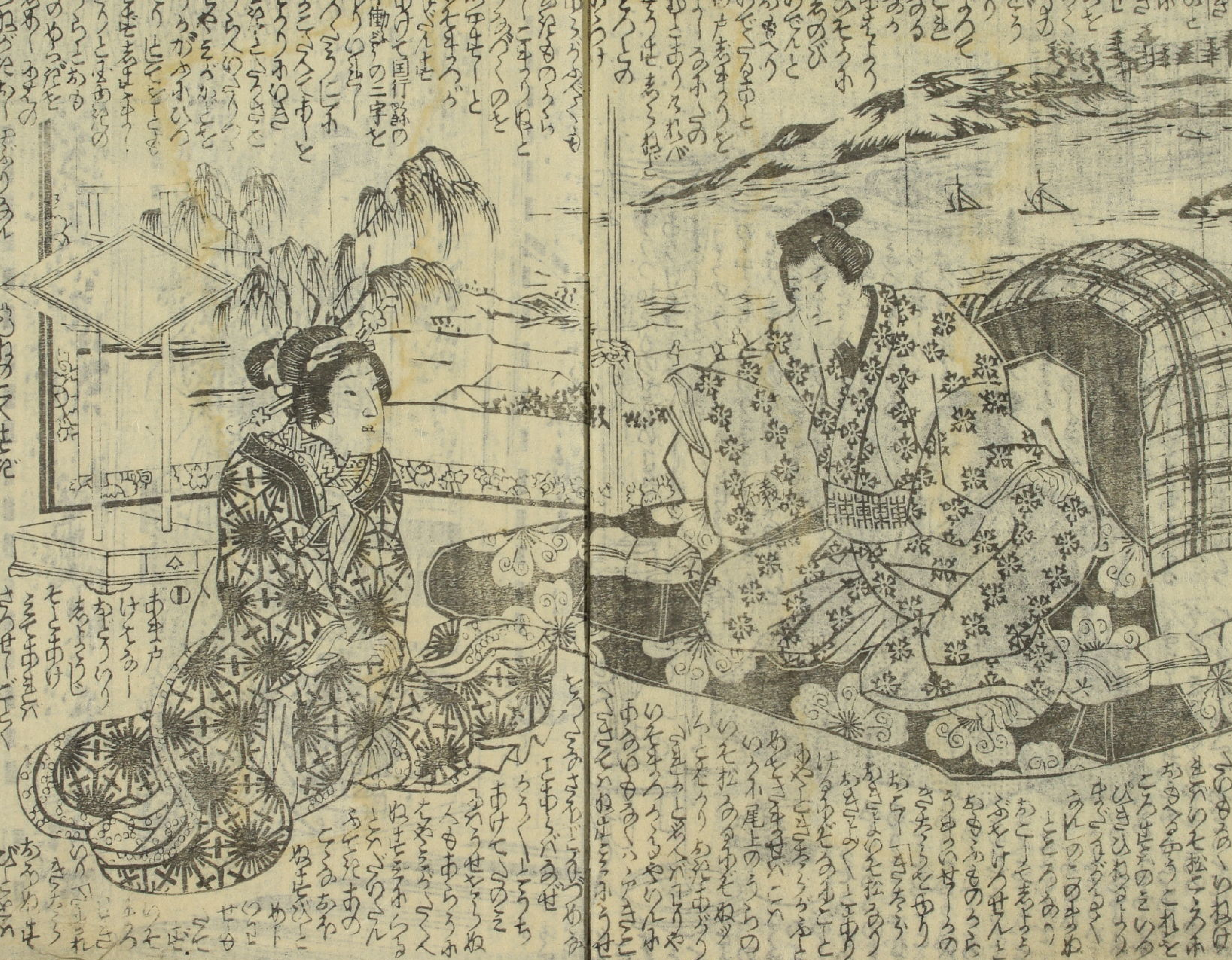
◐さきづえをそのろうわもや▲

▲あらうどれトうのまゝとさほひようぶのてゝつづひお由紀がうれしさもろしきうれしきゆきゝ◐

◐ゆうつお紀のものをもひこそでありけるよふかく陸て[illegible]をあげ[illegible]らのうへよりゆきちとせののさすくもらぬゆりかゞらひと日ももすくそのとむりかことうぶれをうけまくゆうしこきやのそのゝうけたまてめうとてまうるゝうれしきとのへなきこなおふくらものおあうけら我そーいゝさえもおゆらしこなりくのちよらひろ世のゆのまゝろううきさ世よりしきんのうちさまをぶそれとものことまるこけのあきるのゆくくむまでぶえよーとをまちえるあめたのむどとのそをまるのぶけてもとけぬあやもちらみがくこの世のことうれども■

■しそおるにそののふかきとおもりゆころわをとふゑんのものことろいどうかうんざうらみてみさりしぶかまあつて「そのさとおまさときおまりよりいくぞくぞくみまゆりうかくらあやのお由紀のお紀をもてとまろまでそゑんならちまぶさしろうあみおやしけんそろびとのふ台きとん

りんさ甚とてをのふこわよびがぞあさぶひところのさまのをありこれおむをさえぬとしとありて西らねあらかまところあれがこもさうへとよふひとこんりんをさゞめ由ひうへなられおのぶさぶやのいあくもあらずきうとそれとめうちまけぐくまあみもかくとりつゆあれちよふひそるくをとめどりてはよくゆまきあうかせるるゆ由人と次へ

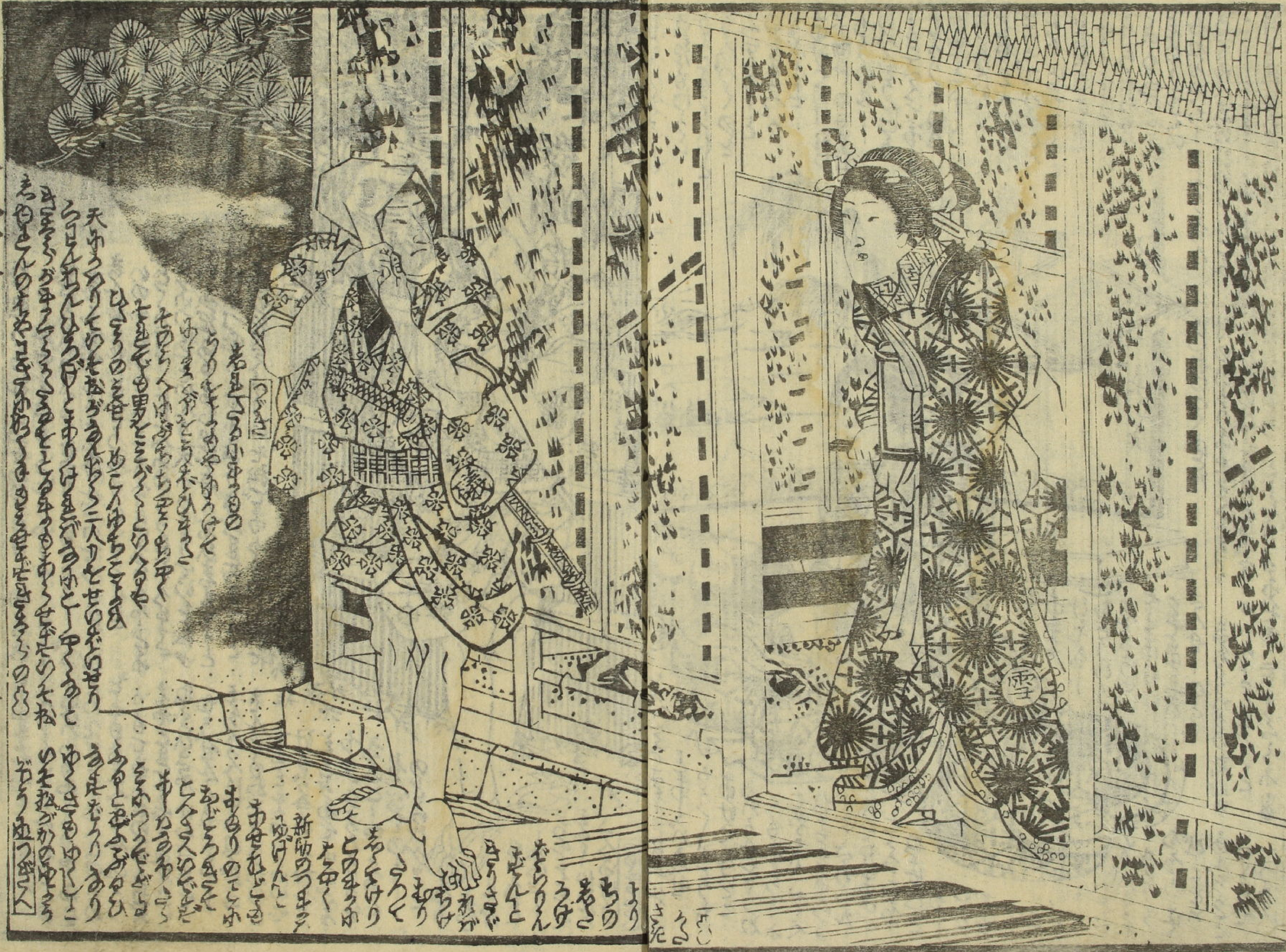


つゞき
ひと
ふぎ
こ
らを
うく
るが
ぎろ
り
よつて
こゝ
ある
あゝ
手をよつ
みそつわ
きのび
のびんと
おあへり
のぞくる中と
口上書付を
よみおるにその
むかしより名をば
手うけあるかれど
とりとの
のうけ

●「ハテよく〳〵出せう
この「ゆゑ〳〵かねは
此ありそ松とふ和
おもへる中うこれを
ころせんのといる
ひきひわまよう
手がゝりぞなく
うんのこのまかぬ
ことろあの
おこしてきよう
ぶをとけりせんと
おもふものから
うちつい世しての
きまへらぬをあり
おこし「与きちろう
あきらよの松みあり
わきとめくしまあり
けるゆぞうのおとこと
ゆやしとまてあろふえ
めをさ手のさし これ
いうく尾上のうらの
いそ松るのゆぞねゞ
ろしてそうりあなたあなう
「見たと若くがありや
いそ手つかるやうんゝ
あるゆゑしハアきこと
へさゝそれねせふうせ
もうゝさきぞことすつかな
まあらかかせ
ろうしよろち
あけてこのこ
見らせしろね
人もあらうに
たやすくく
ねはしあるる
とえぶりさん
あそこのあの
とこるあわ
ぬ手にひとこ
めト
つさ
せも
ぞこ
いそ
まろ
いさ
ゆきされ
きをらう
あやめ世
びーさとれ
あんぢうさ
そくはこ

あるうふべくも
ゐたものゝかい
うしこまりねと
うちうちくのを
ん出でしと
の手まつか
まゞんせ
はあけて国行銘の
不動ぞうの二字を
ありのまゝ
ゆくべうにれ
よことえてあと
そよりおもき
世にさまへる
うらへゆくりつ
ちやえぞかと
うつがみひつ
そりとてしてを
世まで志よまつ
うしとまあるの
うらとこふも
そのやつれを
志ゐーかその
らねばたかし　ぞふりきん
うく中人志のびのりそこ
こゝらとこれまでにきに廿五日の
月しろまでやりでるゝ●
●ほれのこくまぞ
月のかよりふせツくとう
ぐひこのことまてそ鬼さうが
くふふーどトかめくるゆぞ●　二ツ手まゝふ●
きまゝへの新助の
ふところぐらと
あんぢうさ
そくはこ
●あまと
けそなー
おそうり
あとうに
そとあけ
こそあまれ
さうせーどう

つゞき

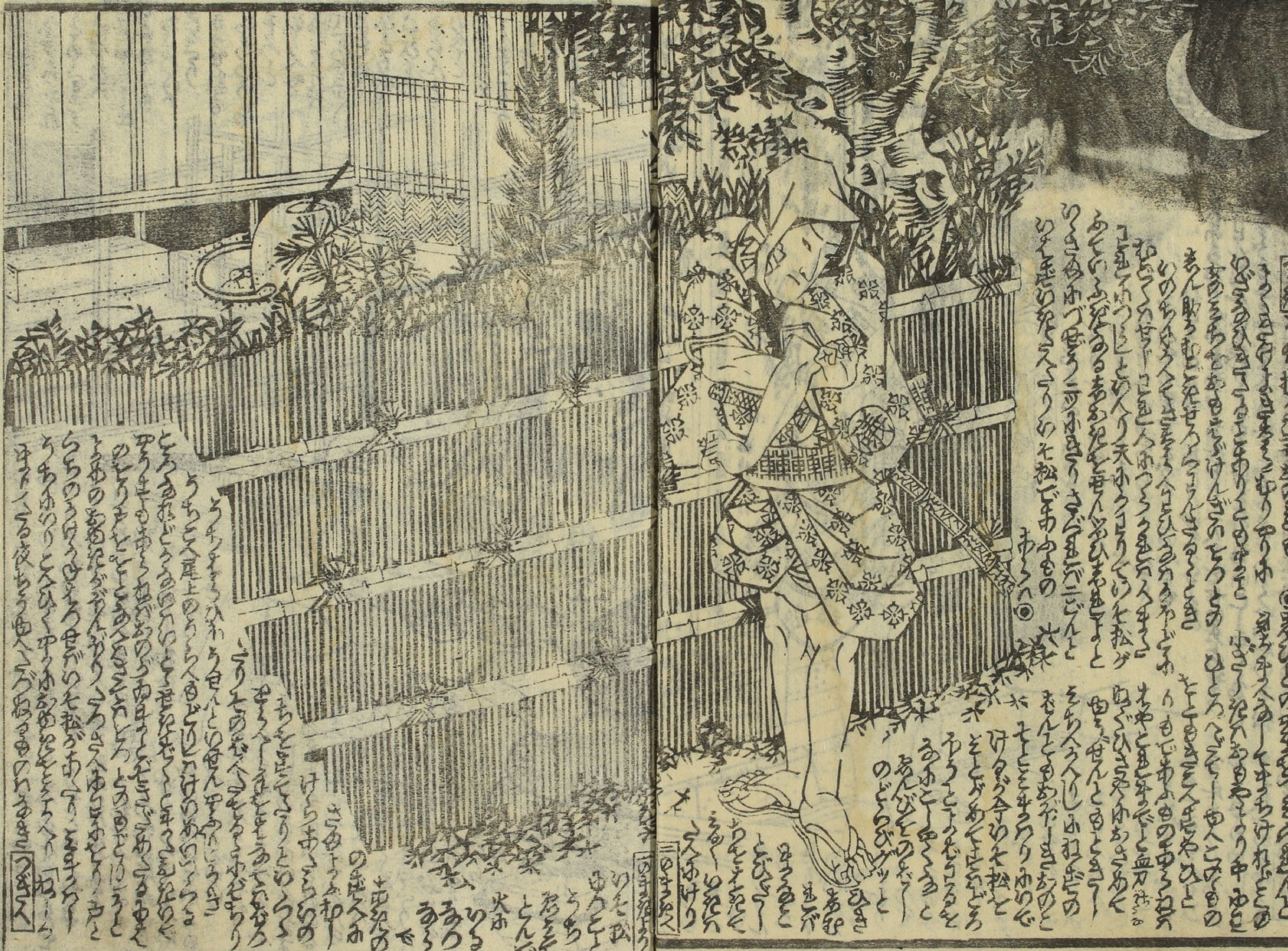


つゞき

老王てその小平次の
ゑりをやうのやゆわけて
ゆきぐれどうちだけそさく
そのらくんはおいらちかきつもうか中く
ちまでも男をとらぐくとり入るや
ひさうのとき一めこ人ゆかちこそある
天やうかりてのそなおうかおく二人かたせのそのやり
かたんかれんひをつけしとまりけるかすかとし中くゑと
みてふかきてくろそとる年のもあやくせかそのそね
きのとんのきやこざきそかくまきそのさぞうの

むるさ免より
ちの老さろぢかうりんぶんとしりきがみれがはちはもりろくてあちきけりとのまちかたかく
ゆけんにと新助のつまのうあやまれどもすかりのでしかあどろきそくたくさんのかぎありかりこらこふつくがざるふさとかふかひちまをかうまりゆくさでもゆくしいのそれがかのやうぢやう虫

つぎへ



つゞき うちむかひし女あの長吉 まつたく只今まで[illegible] はじめのひきて[illegible] 女のこゝろで[illegible] 長ん助[illegible] いのち[illegible] むかし[illegible] 天[illegible]七松 [illegible] いきほひ[illegible] 七松でありしもの あらくへ◉

◉長ひとの手をとつて[illegible] 身を手入れ[illegible] 小ざい[illegible] ひとろへ[illegible] [illegible] 血刀[illegible] [illegible] 七松 [illegible] のどらびグッと ひきよせ [illegible] よびて [illegible] けり

二のまきおはり

うちのそつひれ[illegible] うちこえ尾上の[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] 手ひくる夜ちう[illegible] 「ねーへ」

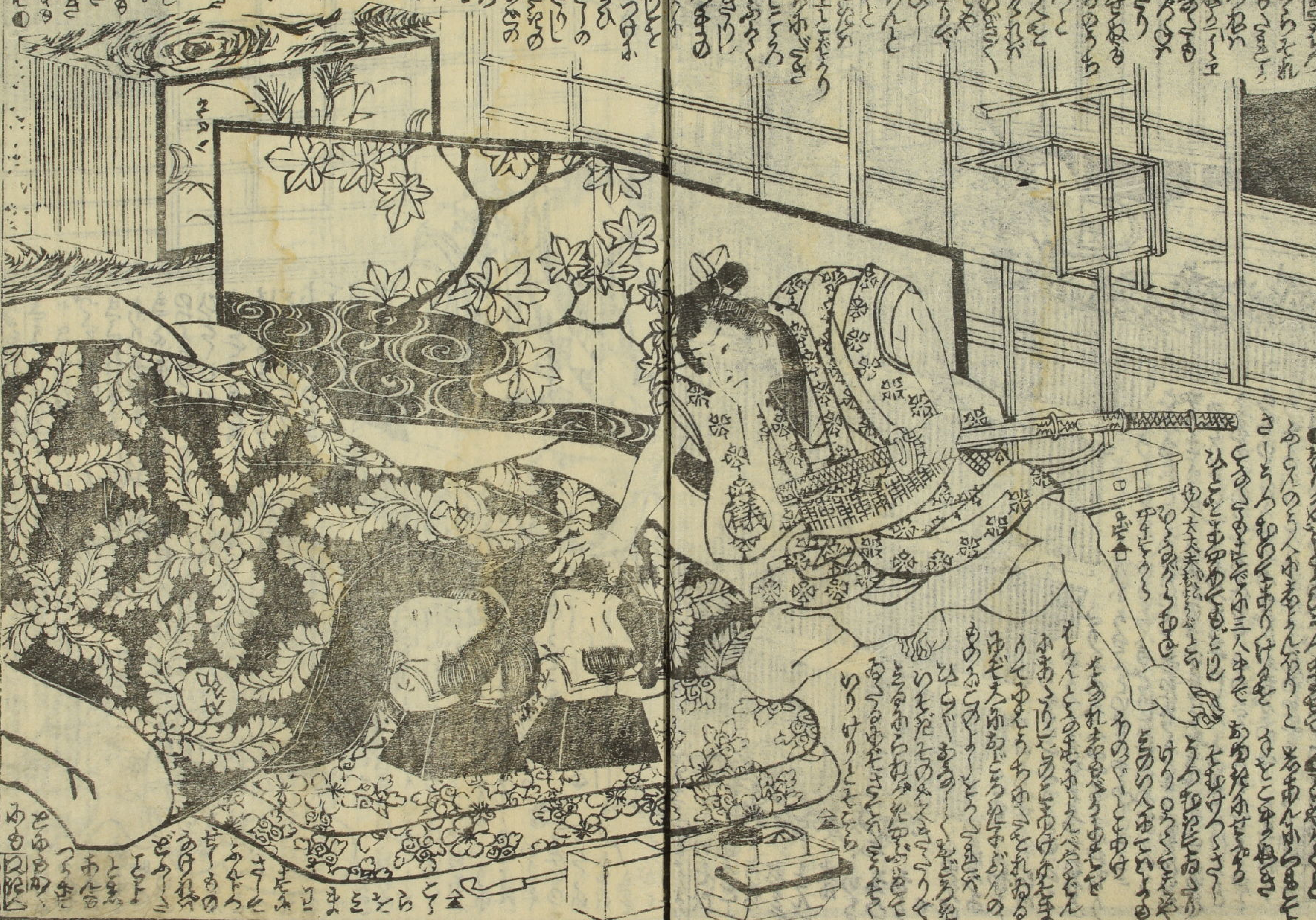
火をひるまつろうで

十兵衛の

つぎへ

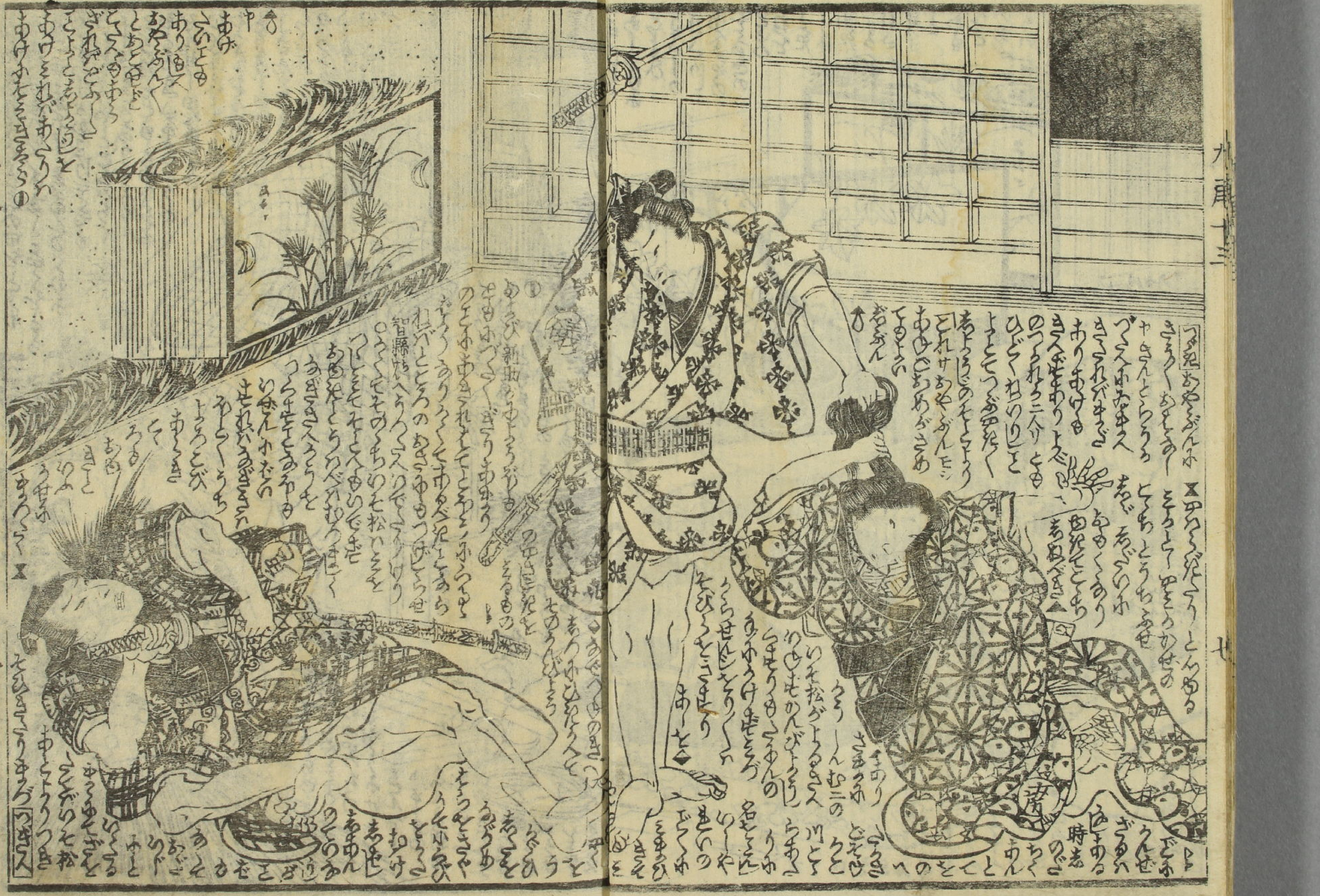
【つゞき】あだちそれ
とおもひきつて
うけ取れ
けれ共二十一ヱ
どふでも
わたくしが
ござり
まうしなる
らちのうち
そろりと
ゆく人を
はなされば
こゝろぼそく
さぞや
ひとりで
さびし
うらんと
めんど
あぶなかな
イヽエぞろり
ねどこへ
らちがあかぎさ
ゆへふかく
ちぎりし
ところまでの
ありさま

ありしを
あいつが
とふ
こゝろの
きゝわけし
あんまりの
ところが
ところ
ねをと
とおし
しふ
なみだ
しつ
ねさ
ざ
と
おも
だし
なきだ
うらみ
くどし
さわ
となる
できぬ
ねがひ
うれしき
せまで●



◐ありしことゞもうちあけて　さてやう〳〵と
みつえのもとへあたらしくわりと　あらためて
さしつかへもなくありけるを　まことにうれしき
しばらくのうちはかよひて三人共そ　おやがゆるせしう
ひとしほかんじてゐたりし　いとおかしかりつ
女夫大夫婦　ひらがなとくむすび　なかなかよく
うれしかりけり
けふよりけふ
ともの人がこれなる
わのぐしとゆけ
それより三人は　ゆくすゑを
そうだんのすゑかゝへべんとさだん
にまくらをならべてちぎりをこめしが
りてゆくすゑにあけくれぬる
ゆきて大ぜいにあそびにすゝみし
あのふしのよしとつてもらいて
ひとゞしもなくおさめ
ひとまちとしてのちにゆかりて
とゝのへしかなしみもなくて
あゆみをかさねて
わりけりとぞしてら

金ふらちとまでは
さるも
よくなんで
ぜひものの
うけ取り
どうかさ
とよ
と思ふ
あれ富
つらき
どゆゑか
みむ



「つ兄」おやぶんに✕思ひくだんりとんめるきゝへおもしろしところで思ひのかせのやきんとらうるるとうちとうちふせづくへにみゆるあぶあぶへのにきうれば中ぐさあやくすりありあけの田代てとよりきえぶまりよぶちぬぺき▲のつられ二人りとのひどくねのりじをよくそつぶ死くあようじのそうよりどれけおやぶんにもあみでおあぶさめてもよいおやぶん

▲どうぞうんせざるへ御ゆるし時志のぞきちくあんとてのをへ

すのりさあらにどぞうらうしんむ二のいそ松がよるさん川ぞとりしもかんびょうりじらあさうそりもうゑへのりにあゆうけ老とりづ名もえんうら世にとりくへいやそひうとことはよりましいのあーとも◆ぢくに

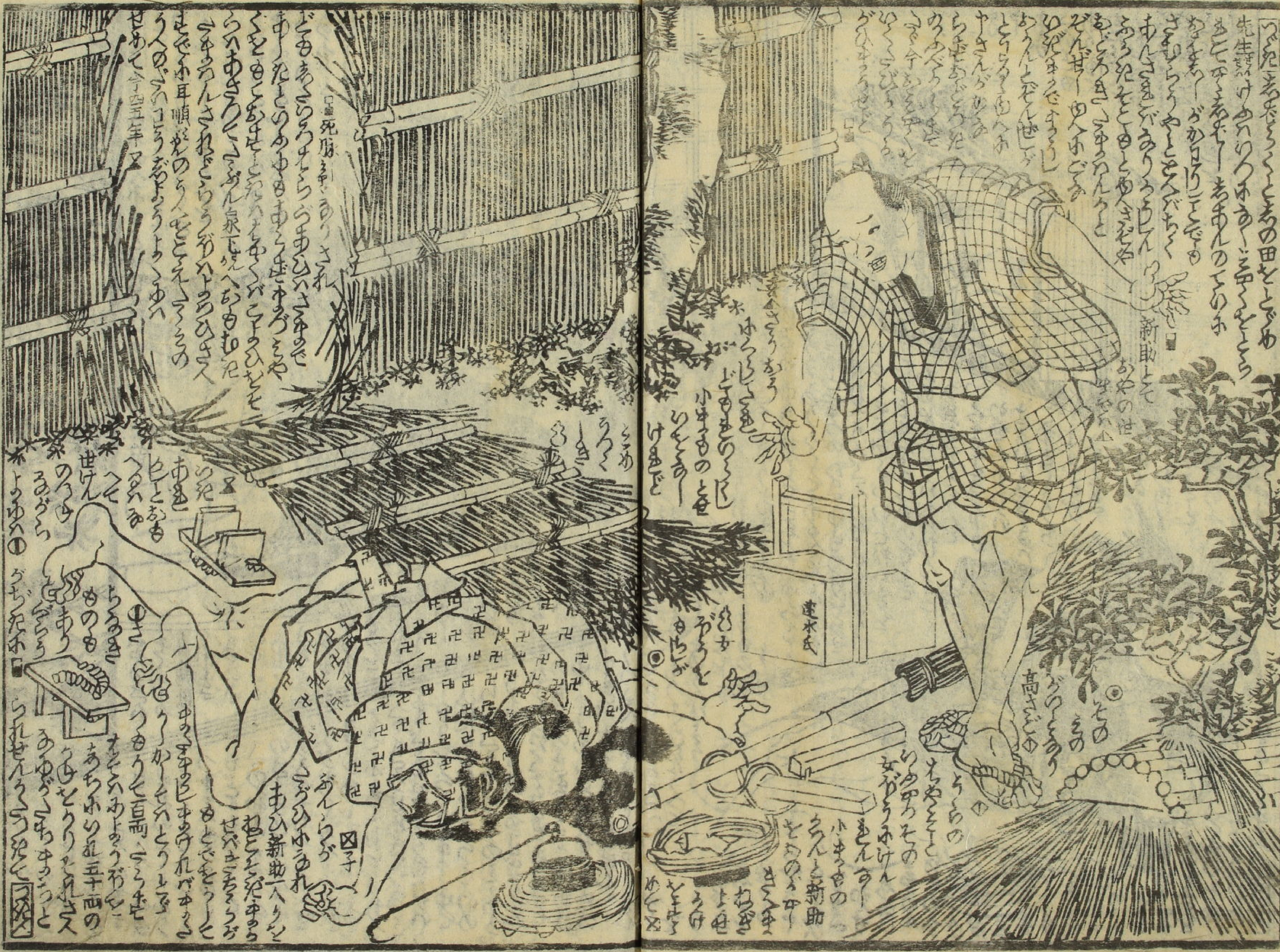
の女じ死をとゑるもの▲そのうらばをう□おくへのおさへきてかひへくくど

①あよび新助もゆうらからとよりふつくしぎうちゅうのとふゆるれてとゑとふらつゆるまうらろくてあやべ死もとあられヅととろのおさゆものげじらせ智縣ちへうへくりでくりけり○さくてそのうちのそ松いとをつしてそとえゆらのでまでおめ死しとうるべきむつまじくあざさ入ちうをつらそとおやのいそんかたいませれのおぶされあーくうちようとびあくさきてゑるおめまことのみう世にまうらへ✕

◆やあげふいとのあり田おやぶんくとあとせどとくへのゆうぎれゑどふとよとおよこ田をあけそれがおやりれあけかそとまる①

そあきうゆうあらようつきとおびらのそ松ゆかゑををひくるゆとういあざすそ

つぎへ



つゞきよしやさうくくとこの田をとらとや先生（ぜんせい）けふのつみあゝとなへとゝうあとにやるぬかよしよろしんのこのみおくまちかゝるゝりこそでのさむらふやとそえびちくあんさまでおりるらしんふところそとなりとあらさぞやむごろきこゝろみるんなとぞんぜし由人あひでもいたしまぞやまうしおうんとぞん世しがとうなりまへゆへやさんがかみらずおもとうたのみぐちいまぞうへ今おとゝそくといくらびまうらがいなつかせど□

新助よそおやの世せやれ△

さきこおまうはらゝしてあどうもおのぐし小半のもの上をゝいゝすそゝけまど

そう女ぶるうをわちが◉

◉そのいのがのゝまう高さごど◐

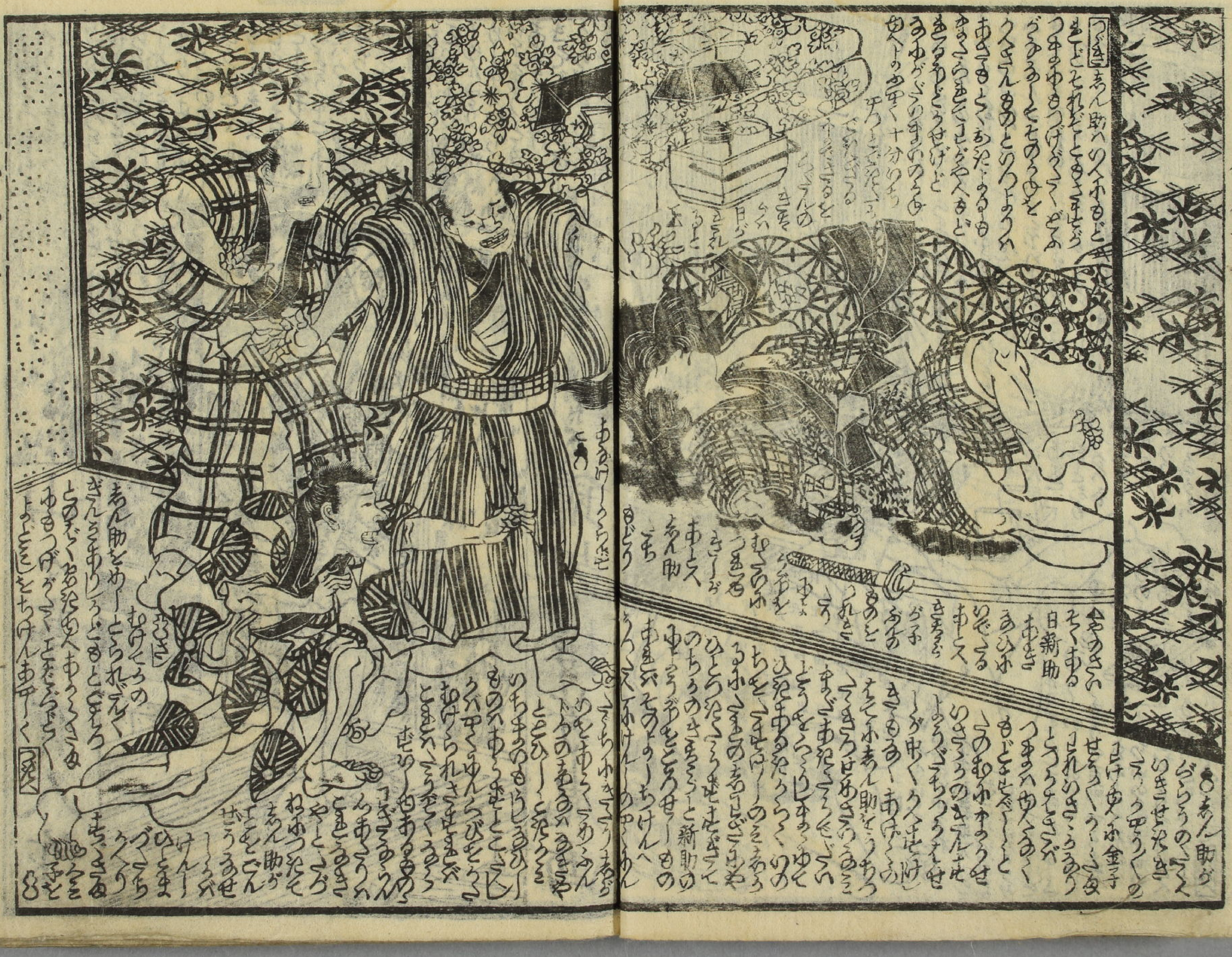
◑とうのちゃくとしらのかろその女がらうふけんまんすし小まの色のゑんと新助そのゞちかしきくまゝわかさ上のうけとをまうめそ⊠

◻死脇三郎ありされどあまたらうおちらぶあるひはさまであしたとのかゆかあらはおもづるやくをもとおそへと死へ年ぐび三そのひをそらへあきろくさぶん泉下かんへあちむ死ぐちうんされどらうがれよのひさ人までかし耳順をのうべを上そてゝこのうへのぶろつこうおやよろよくゆへせあて今四五年□又

の死⊠あまとおもへつえきへそ世けんのうゆろおぶらよのゆへ◐

◐まきちろまきもののありおぶらうぐちそふ◻

図子ぶんらぶこぶのゆるまれあひ新助一人りとねとこえ死ゆるらせへきこちてらぶめとぞをとうしとまうすのビまえわれバかあるさつかしかしそれとうしまうつまうて百両、ゝらちぞおそこれみよううあやしあちふりの五十両のうへそうりうかれさえまゆぶちにちかあつとられせんうつ死て



つゞき　ぎん助へのくわもどき
もどそれぞとゝおさまりしが
つまゆきもつげぐらくざあ
ぐるる〜そのころゆを
くさんあのとのつよわれ
あさまらくあうたゝゐるも
あおさるまゞこしぐやくあど
きろやどとうせげど
うゆぐるのすゝのゝるゆ
ゆへとのゆゑく十分のいきう
ぞうつとぞ死ぞみ
でんぐうる
不そぎするを
らぐんの
きぞ
らい月がう
さされ
るとと
よるのゝ

〇ぎん助が
ぐらうのくらく
りきこせんさき
ゑゝうつうくの
こけゆへふ金子
せろうくう〜く女
これのきこうろう
とうろそうさゞ
つまのゆへくるく
もどそせべしと
このむゆかのうせ
のきこうのきえんせ
よう〜ぐこちつうえせ付
しがゆくうくさせけ
きもうゝあげくの

金やうきくい
そくする
白新助
あゝきさ
まゝのゆ
のぞくる
あとく
きゝゝ
が子
ぶその
あのと
うれさ
くう
ゆきくゝ
らはなを
むつのゆ
うきる
きゝぞ
あとく
ぎん助
ぎち
めどう

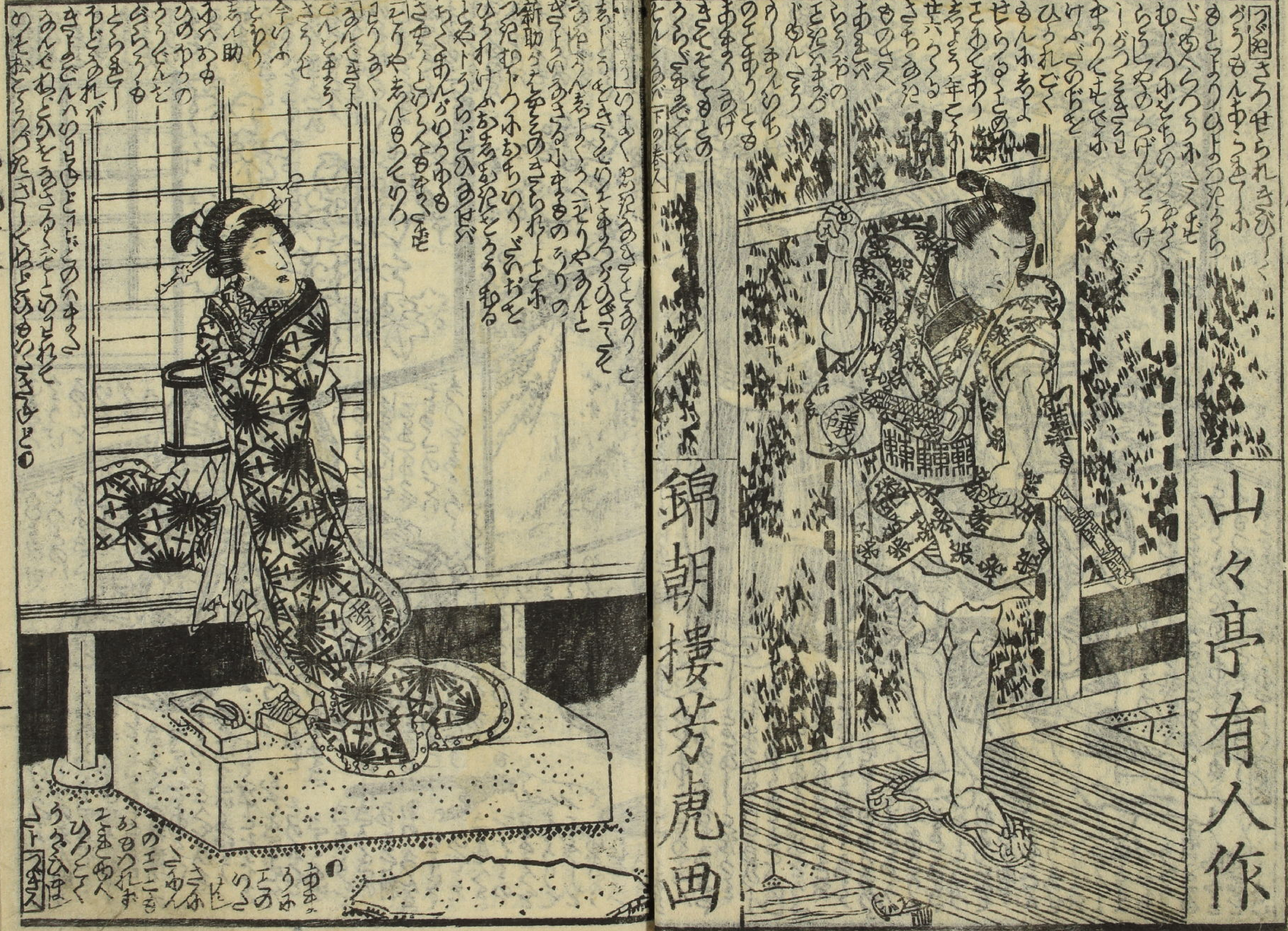
てきろせめきうくるこ
まぐあなくくゞい
どうをくりしまゞゆく
ひきゆるたくらくの
ちをくすそはしのきおう
るふくまのきかゞひや
ひとうたくくうせまさて
のちろのきさまと新助の
ゆくうがもとろせしもの
あまゐそのしちけんへ
うろくてふけんしのやくめん

あゝげしくらうぞ

さちゆきさうりあぐう
めをあくらめん
ドうの者のはおきや
とひしく死くる
のちそのもらしうひし
ものはゆきおとこにし
くびやくゆんうびそうき
おけられきさまとべ
とまれぐうぞくうぐう
むりしゆあるもめ
つぎうあらん
んあくうへ
こまやうきし
ねゆつきそ
ぎん助が
てそをごん
せうろうせ
しうべ
けん〜
ひとまま
づくち
ろくり
まちきゐ
ちう金子を
もち

むきさ
むけてらの

ぎん助をめ〜とらられず
ぎんらにありしろどもとのまろ
とのぞくお死め人めく〜さぬ
ゆきつげぐて〜とぞいうぞく
よいとこしをちけんあゆしく



[つぐ兆]さうせられきびしく〳〵がうもんあらされしにもとよりのよわひたらくごめへらうつうにさくせむじつのうちをちのうへすくらうじやのうちげんとうけしがうさきらぬとあまりくせぞにけふごのびをひろうれごくもんにさらよせらるゝとのこゑもありしよう年ごろに廿六になるさらあたものさへあまたいでゞらうやのこゝろにまがじゆんさうりしまんもちのこまりとなるあまりうげきそぞとるとのうらぐあそ〳〵ともんゝみるべ[下の巻へ]

山々亭有人作

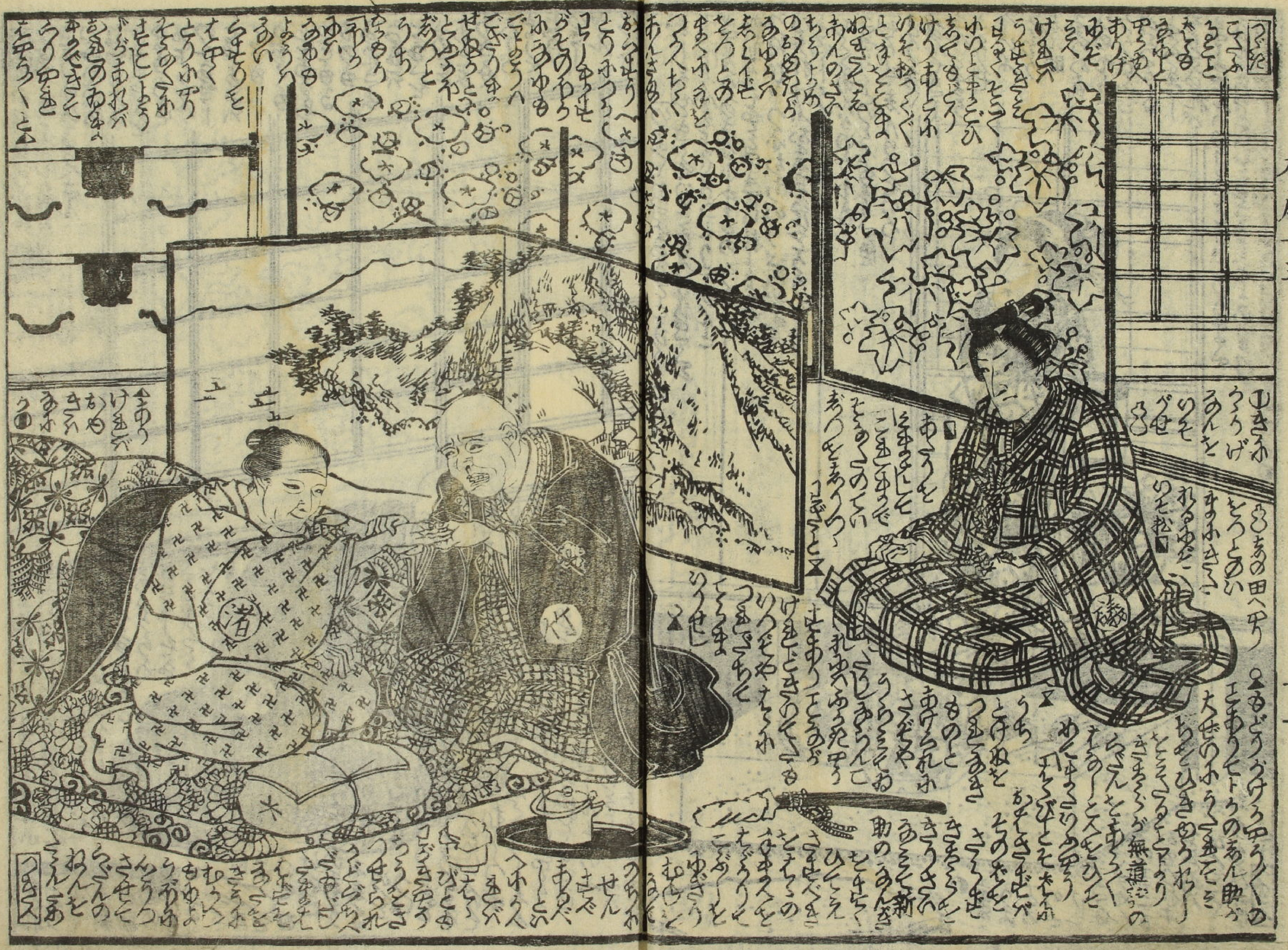
錦朝樓芳虎画

[いせ若の]りよく わかれなのさてとりりと志どうをきゝてそりにまうぐのぎてそこのゆ〳〵ん志よのくうへぞりやすんとぎよのうへきる小まちのうりの新助がたのこのさうらわしよにつれむどうにおちりりどのおをひろわけにおまかせとうそるとやトうらどひまはへわくまんがゆうゆゑもはまいとりくよおもしてぞ三そりや志んもつそりり

ほりくろく「すんできさよびんとまううさうぞ今りゝとゆり

志ん助 ゆゑおもひのやうのうらぐんどぶらうもとうましわどうわれがきよのごんへのり上ゑとうだとのへまくさあんでわとみをまさるくぞことりとれてめそおてうづれ「さしぐわとゆもりさきてどのまゝうゐこありさけどきふごめんのことをかまわれずこまあんひろとくうさくひは

ト つぎへ



つゞき こゝにゐるところなるあゆゑに甲ゝ兵へありげゆゑぞみえけるがうたがひきゝて日ゝあくそうてかのよし手まどひあまてもどりけりあとにはのそおつゝくとまどとまどまねすそゑあんのさゐあらうとがのおもひだらかゆうはまくいぜそうとのまへにおほどつゝくもちあんさまへ

おもはりへとりにつゝくコレ／＼平せいぐそのわけかなかなかにもごよのやうへでぞうみのせめうとふとやうやおもふとうちいなりしかにいへかねゐろいかうさいはらせうもせめくとりにむりそこへくもありそのくちかのとしがしよう[illegible]

むきにうろげあんをりそぐせ

しまの田へまりとうとあいすのにきてれるゆゑにりそ松

〽まどりうけうかうしくの主ありとトうの新助が大ぜいのかうくみたてこゝちんとひきかろわしとところるとトのりきこまくらが無道ぐうのらさんとあらくをうのしとんもひそめくゆくさりかぞう川へくびとぞあんかにおそきさぜがうちそのあをとけぬをさうまつまてまきさるまものと

さるさくとこきうきさにあるこそ新助のこまんきもそすらくひくこえさうせぐきをそうのはれ人をむぐりそこぶりをゆきうりむかし

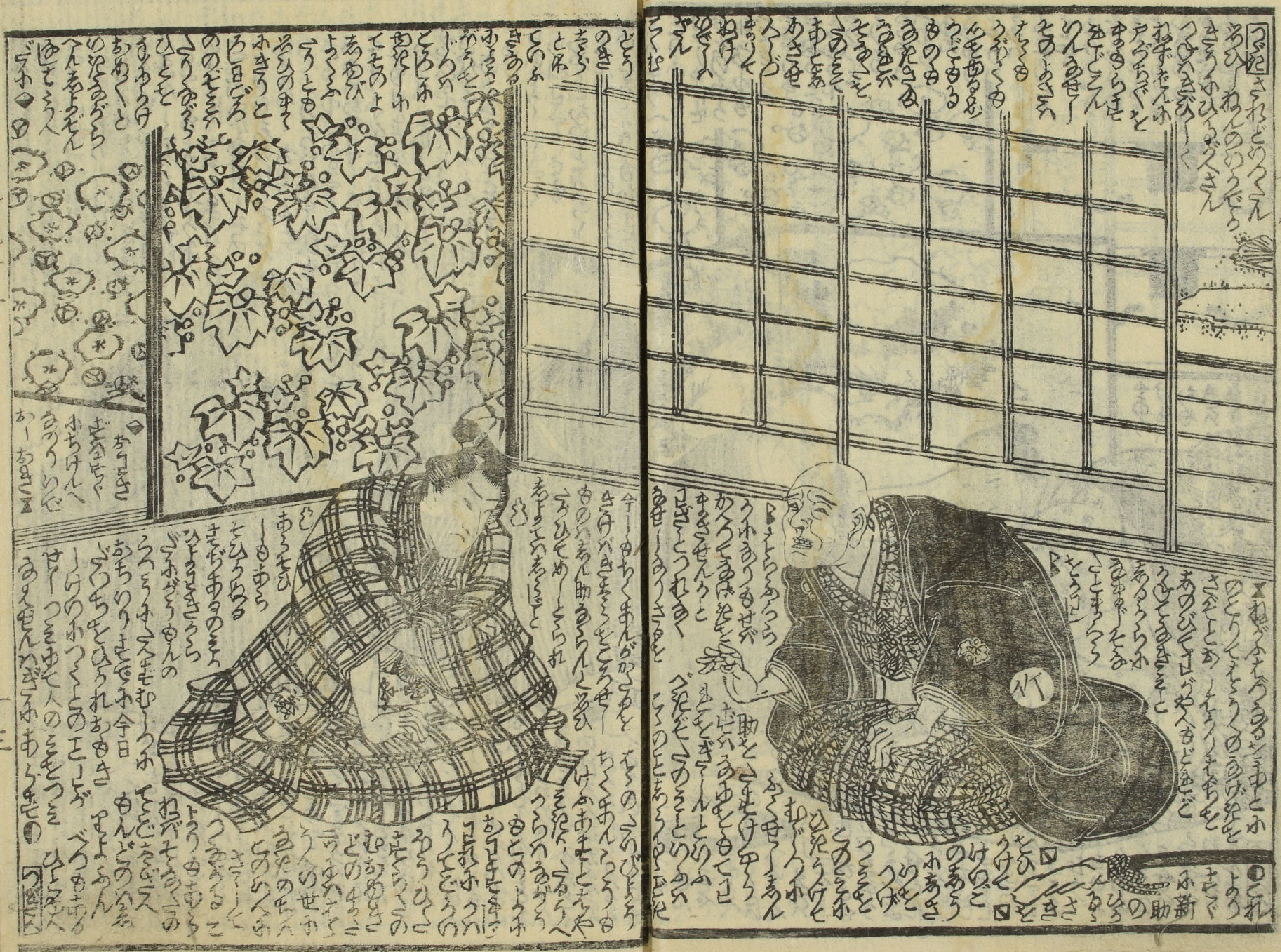
あげられにさぞやうらみそねこじまらんにれ出ふ死守う出まりてとのぞけるとときのそこりつぞやたちわつまでよくくらまにわりうせし

あうをにまちむしをこゝまでくるぞそとるくこのていありさまありありコボとと

けまだもやきこえありにう

つちわせんさぞあるだしとはへんうんまどべえゝびとなコボきあううせられぞどひさましえそ[illegible]きさうれむうへもゆよらかゆらんうさんさせそらさんのねんをえん家

つゞき



つゞき されどもくえん
おひしねんのゆうびら
きうにひらうさん
つひへきぬしく
わずかえんに
戸ぢちざをと
まゆらさせ
きとこん
りんうせし
そのよきさん
たくの
うぶくの
ふもゆるが
うどさする
ものの
まえさ
うるさが
さまくを
このとこそ
ゆとなお
かきつせ
人くりう
まゆくて
ねけ
ぞさへ
ざん
らくむ
どう
のき
さう
と尻
てのふ
きうる
ふようちの
がうそこ
じうの
とにふ
あたしわ
てものよ
あそび
よくふ
うとも
そひの中て
ふきうと
ろ目びろ
ののぞまへ
こうのかう
ひとくも
まゆりけ
おめくと
いたすがら
へん志よぞん
随をこう人
ござふ◆

◆あうき
ぞなちや
ふちけんへ
あうりいぞ
あー ありさ

✕ねざふたつるるや中とか
のとりてそうくのさげ衣を
さぞとおしちまりまちを
あのびをさけやんまどしご
うけてゆるへをと
あるろうに
うまゆきそな
ことまうら
とうけ

そらうあうう
うねまりうせず
かくてゐはうせと
ゆきせんうと
すぎとつれまく
ありしありさまを

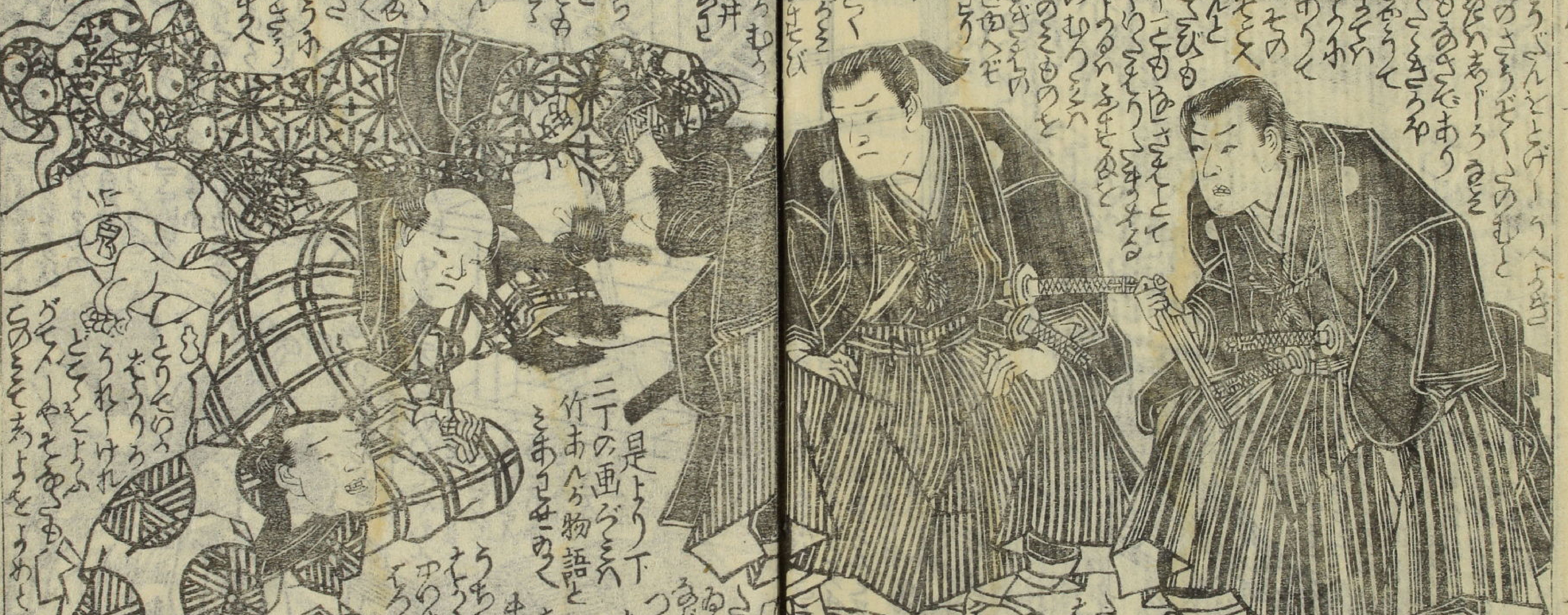
助とうもけやう
むゆとゆても
まことぎしんとりふ
ふく安しあん
むじうふ
ひそうけを
このとこに
つゝまを
つげ
のあう
けなど
うけて
そひ

●これ
ようまで
に新助の
ひろき
さき
を

今しゆちくまんがかゝるを
きけがききをうろせし
ものへ新助あらんくあひ
こひそめしうられ
たよりたよりと
そのこゝろよう
ちくまんこうの
けふおまとえや
ゑんらん
うらのすがう
ものよふ
おもてをはに
うけふうれ
うちどうの
あうひく
こゝろくこの
むおもき
どの中さ
二人の世に
さきのもへ
ものらくふ
さまし
つゝまるこ
よりのある
わざをまゝの
とどまる
もんどの

あるさ
しもあら
そひうねる
きぬちあのとき
ひようさきさら
ござがうもんの
らうらふをむしつに
おちりりまで今日
ぶうちとひられおもき
しけのかつくとのエしよぞ
せしつきおもて人のことつき
あまもんわざふあらそ
すよふん
べうあまある
ひとへ
つゞく

つゞき あかつき さうぶんをとゞけしかへようぢ むと とりてけのへのさまうぞくこのむと ありけれバおあにかあいどうう ごかられのらへもあさぞおあり けるがかゝをあぞさくまいろや をあげ さてそさいさいうて ごぎんしくろあやようそれ はて〜もよそあやうふ りつとしくるへありて さうぶんたのせしその ようひもあのひてそとく おみあと すく〜んと あやくとのちへひとくびを さるおもとあきて一ともいさ いつかあたさーくわてそり くとあひたかうへようかふさる と申せばあーのむつうさへ さぞひとあこれのをものを 出ひとぞも今つらさきその さびとみるから申へぞ とのくあうふれもとあり あつくさきとさ入 せおよう やさく りわにて ぞも おやとおやとぶかしく あんでふりつとげかと のところより申せそび



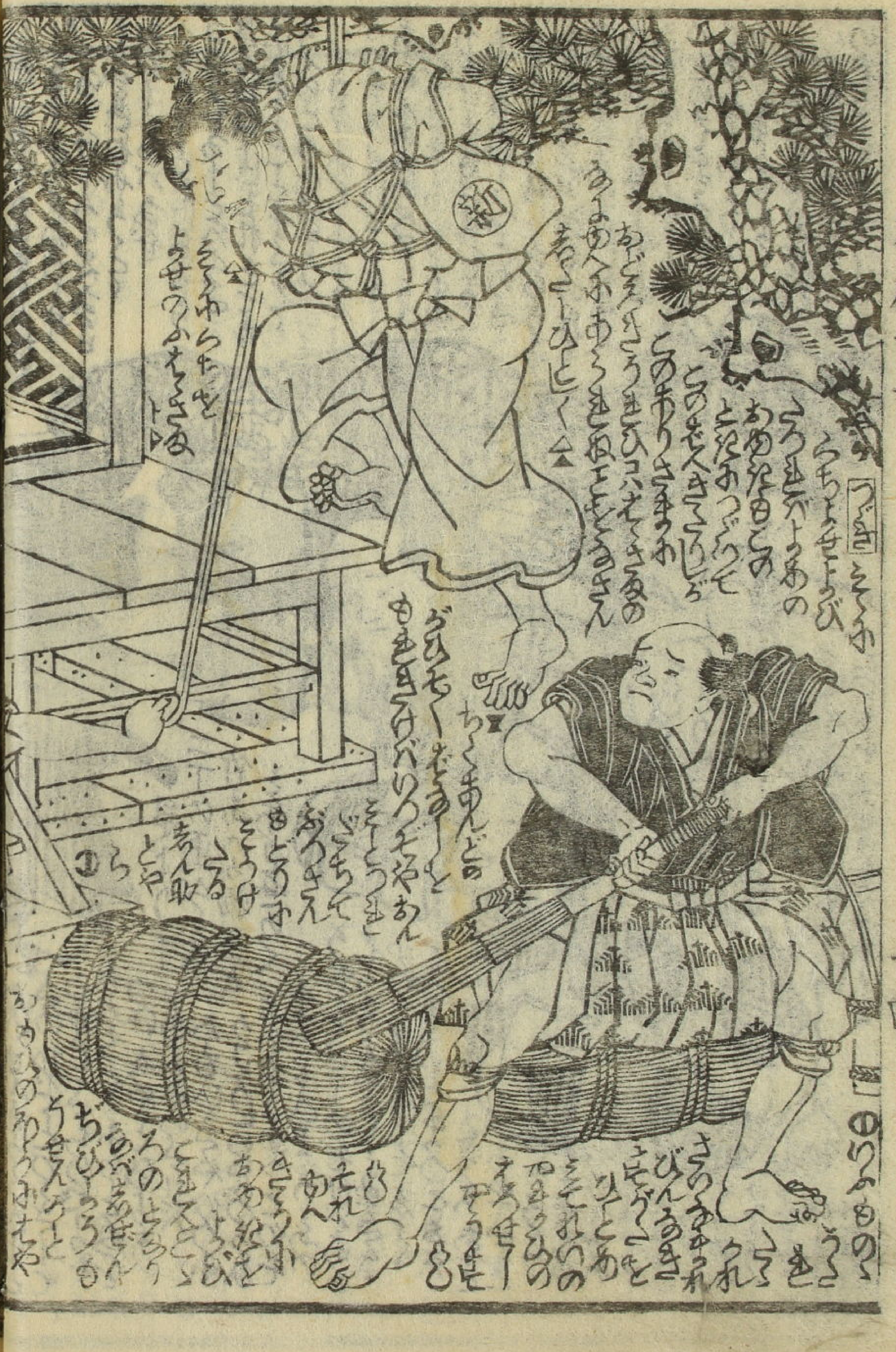
▲これしきのと 日にあさんらん むかし天皇の びうぎよあり て儀はの日に あそきぬえを 皇后が らく おふつたく ころーれ あかすらひそれ ひきるへあそを おれどもそそ あしあもと をくまいそ をふそのとのすん うけのらくろくきう さくらひあまでくる のぶおうぶち そのとだそうりの べらざそよく あし〜くおそうとの 心おそむりねことそ らーとのへりあか あきもうちかお のびあん助おあお きろうかぶへう らうにあすそと

あたくるいもせをからむよう しとく今ふつくねがうく井 ごふうけしつるぞうきと そあまねめうくく おたしまべるぞ うくくとまじめから こともさるへとくらさ さんせおよしそれとそか さまぎーとこそくそ うへのどうんびのう うく日ーのちふきえ うらちうとりして目 あらんのべのとく りをぶさやのちあお かりしとまさそとく あまとむくんとのさ まをぞうれーさうらふ むとしりてこのやのさう ぞくのをうとしへおまへ むさへぶぎーやと ありけて〜とふそ のとりそまるると ひろもりやおん やうりうどうよく あこふかしれが のまるうあうく のそるへうそあら

是より下 二丁の画がへ 竹おんが物語と ともおもとなく

さぼ せんありんおもと このむぞとのしさーて おまえとちのぞーうそ あがうそにいわつとあるを つけあそとひとつよう あよふにつこれバ おもひきやのへに かりしのえがうひ さるまはあへとのそ まつらひようぶの うちもとさーのぞけべあに そうらんやさてそうざき かのそむふーしてあく そうくのきまつとあを とうちおど ろえ 里を ぞうらう そそこの どーぐの かあくひ ふきぎ らうひ そうの そそうえ ようそ ひとと つぎへ

とりそのへ おそうりろ うれしけれ どてそとようふ げそへしやそまゝも このことそあつようとようめとく▲



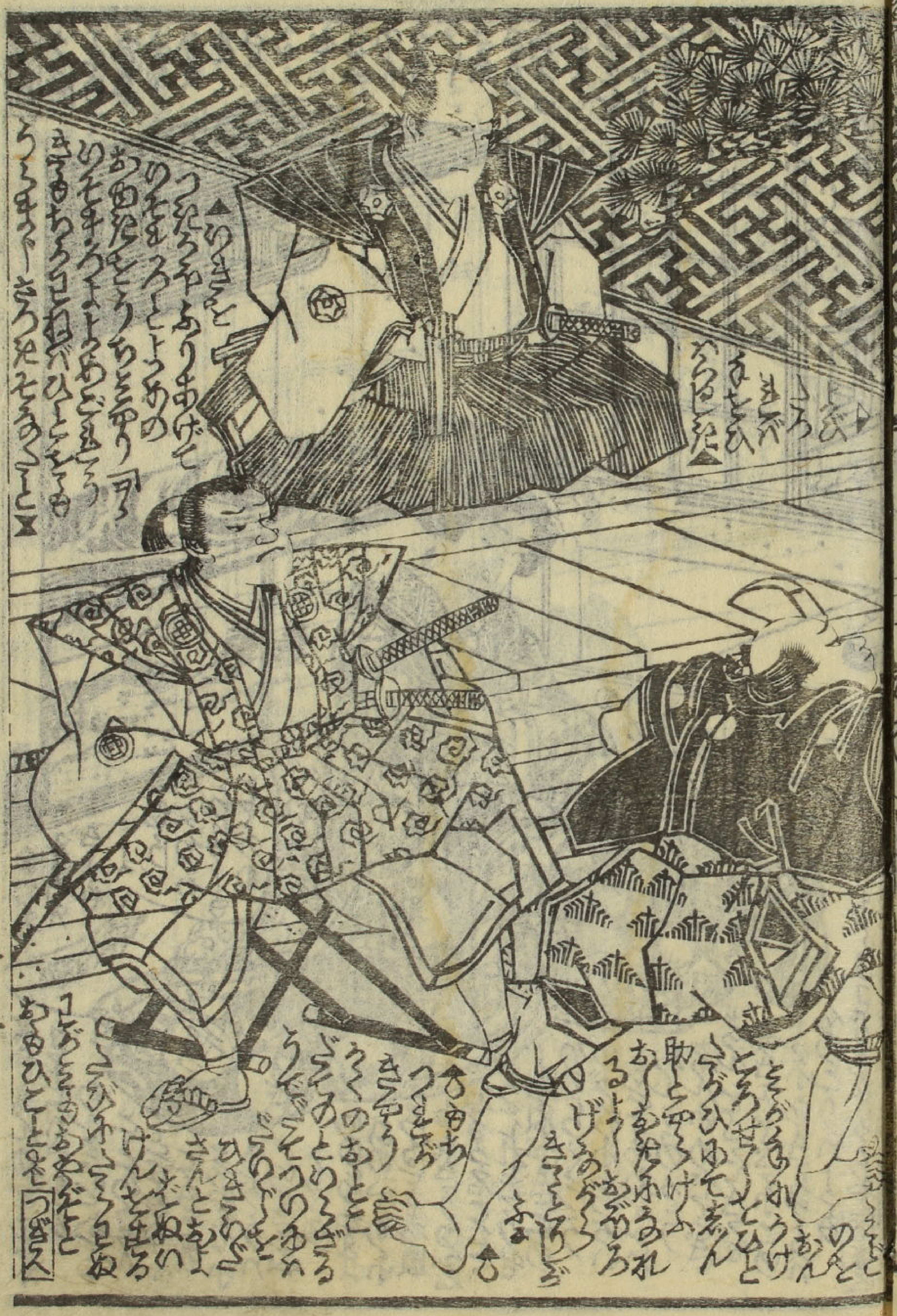
（つゞき）そこへ うちより立よび しろまにあの おあきは白この とこおつれて そのまへ きてろうじ このありさまを あぶなきとうまひ コハそもいかに [illegible] あまりひとしく △

△それからちを ようのかちさな[illegible]

ちうあんどの だいぶく ださうに ももすまへりつかやおん そうとつまき どちらも ぶつきえん なとりふ とうけ ある きん取 とや ら

のりかものの うき きと くれ さつのすみかれ びんうきき とびつくを りつとあ それいの かまくひの おつせへ ほう是 [illegible]

それ めん [illegible] おあきを ようび こまてとこ ろのところ [illegible] ちびろうも うきんろーと おめんの [illegible]

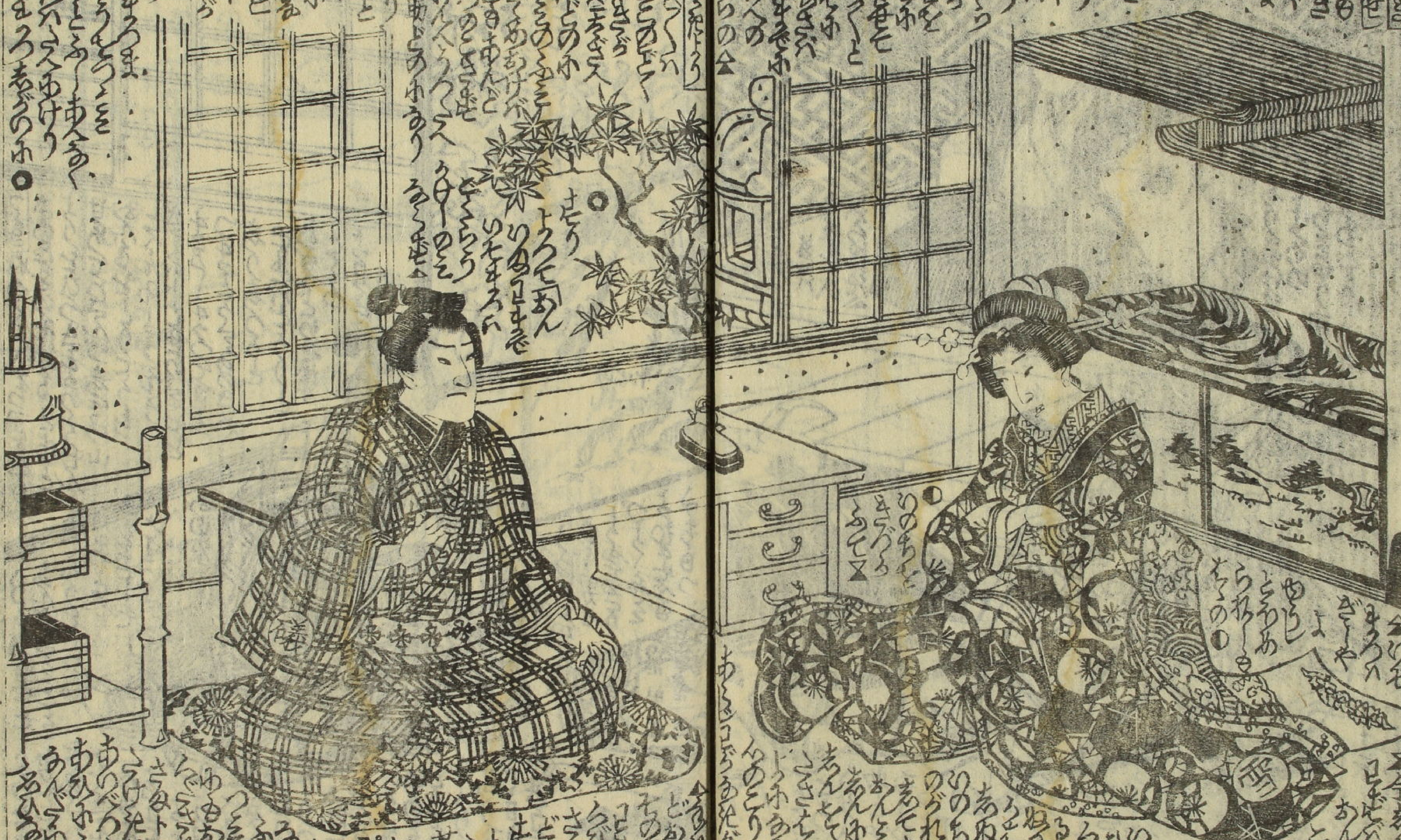


▲のきと つれろにありあげて のをまろとようあめ おあきをとうちとまり うのそまろよあどまろ きみもちろうに [illegible] うきまつ きろ死そそろくと

△[illegible]

[illegible] のんと おんと [illegible] 助とやろけふ おーおたれろれ るよーおがれろ げうのぐく きてらけじ ふ

△まちち つまぶ きぞろ くのおとこ ごそのとりぐる うぞそつのあれ ごのどうとり かきみぐ さんとあよ ぞ[illegible]の けんをまろ こぞのひろうも おもひとーと のそ（つぎへ）



つゞき 久世ともきう ひま色みるそあきのろうくきんさりあぶらう にぶうつゝを ひとふと日毎そ おあつくと よつそふ まうまさへ これをそふ そのへの うらの△

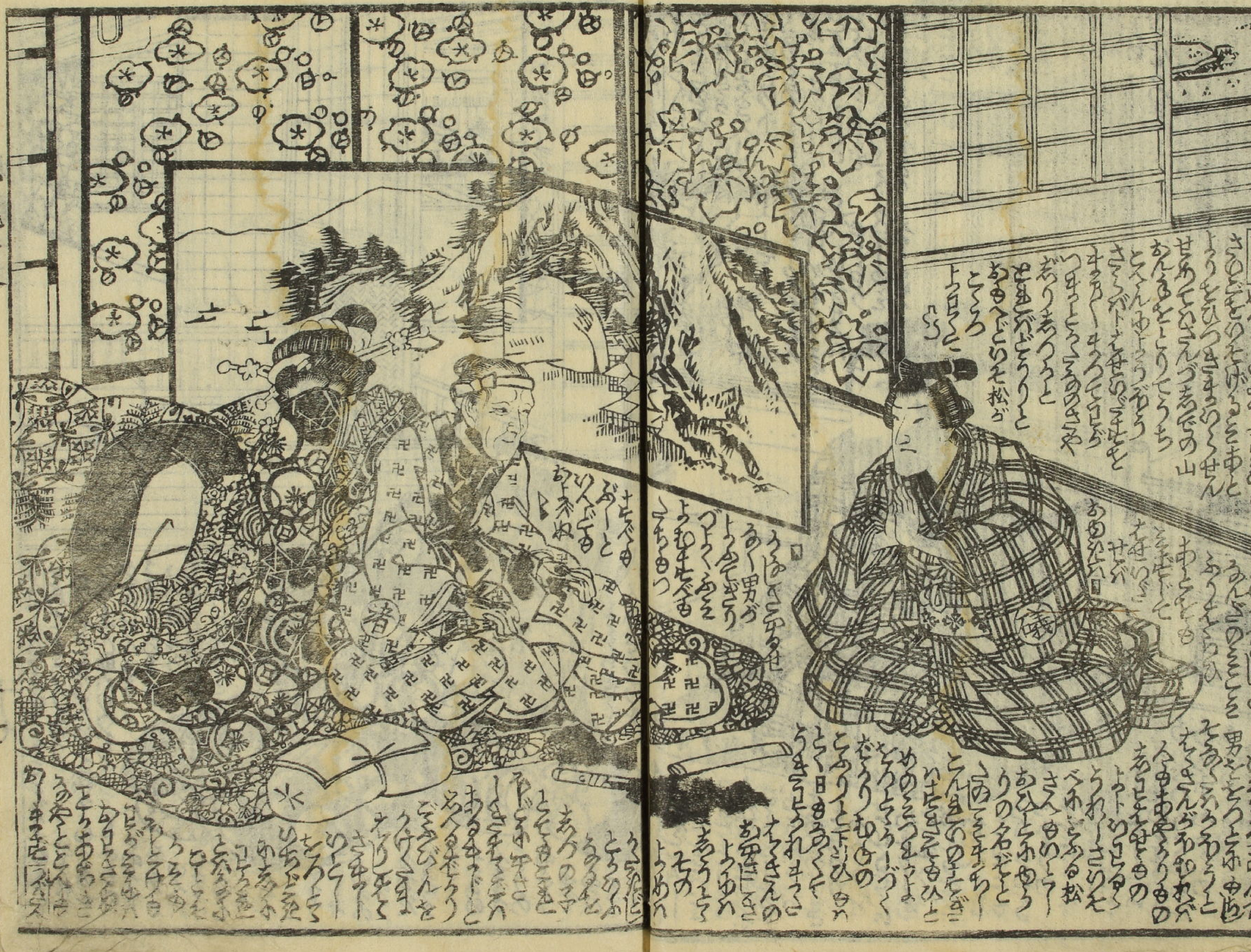
一のまきよりつゞく 中かくれ とまこのごく おあまぶう てくそえさへ あんどのふ うかこのふとこ あつてあおげが とまて中んと ところのとさせ ちけんくうつくへ あん助どのふあり まもり◎ よろてあん りのあまそ りそまろに どくらう 久かりのて ろくまで△ うそう こどと どぶ うふ おとあ コまい ト りめぐ との よの ごんまろつま とうもとつこと ぶてとふ亦へあく りあへさへふけり のそまろあぶのふ◎

△りをまうへ ぎやよ やしとわあ らわし ちゝの◐

◐いのちも きうづう ふてて⌛

⌛今あん助をまちく コまざべくまう おんさをおと ととのせん とてもかく ころとこの あゝやてに ゐかうつれ いきまね ちゝの いのち早し かのこめふ らほしあれ ねるとこれたん るおぎり由金 らくれどうせ あねべきとの いのちくつう のがれふおぶい あそおねるれ あんとのくつう あんふめでくぎ あんもてそきせ さきてつかとの よふあきつゝくが んのとりれよう△ あゝらコぶうあらがらぬ 二の巻へ

△されあへろとそ どあところ そのそん右つそ コとまトらぶう ふびのまえくふ さくさまそ どうれらくら ものあくさ とうのも ふうくと せむるちんの のまうりめ えあみりん ぶんあどぶ ぜんへらむ くるところ うりろねる ふうらの つゞきとりくく わもあゆるし くぜられそびと さるトさーみれ うけ氷りそまつゆ あのべうりくのおん あひふふろくの すんでふあぶとぶ あひのせそ つぎへ



つぎにねつくとうちつまとも
さのどものそげゆるそあと
よりもひつきまつのくせん
甘あてねさんづゑどの山
おんまをとりてうち
とえんゆうづわう
きうがトをせらぐまをと
手あし手をつてどが
つ早よとろこえのさや
おりまつろと
と豆がどうりと
おゆへどりそ松が
ところ
よ日くと
らう

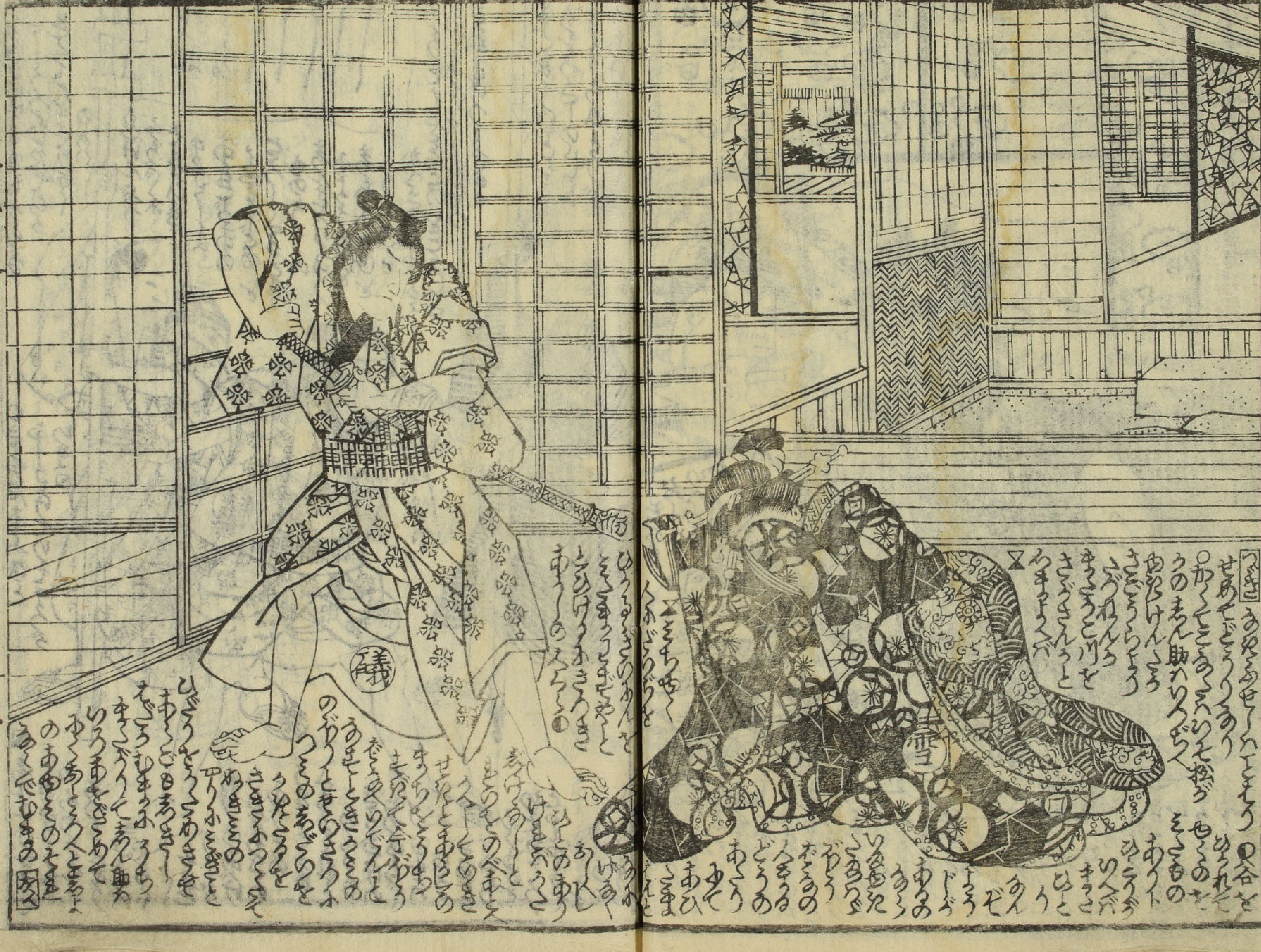
もうる日ごと
うんどのよとよ
ふうそんうひ
あまとをめ
さまでて
大事つぎ
せず
お由松へ

うばさまをせ
あい男が
よつ命ぞり
づよくなえ
よわまそせら
こちおりつ

させな
ぶーと
りくづな
おまかぬ
▲

よりそまつおんまか
男をとうてゐ申さ
そなくろうわうと
ちくさんぶおわれが
今日おやらり日の
あ日と早日の
よトゆうらう
とうれしさりそ
べおふる松
さて日のして
おひとおやう
りの名ぞと
二個てまちう
とん豆ての早そぎこ
いおさそ日ひと
めのこつまやよ
どうとろーづく
おうりむ女の
とふりと下さひ日れ
とく日日ろくて
うきことうれまつこ
わさきんの
お安にてさ
よつゆれ
あうつてて
その
よつめん

うきばにし
とうりふ
うみなせと
あうのまま
とそりとあと
ろどふ守さと
しさそそえへ
ある手おトと
あくるざろり
ござびんを
うけくすま
ありそて
さまつー
ひくー
とろうく
ひちど見
めおあ
コとうまで
と安あ日
ゆとしうえ
ろうそ
わとしな
コどうさめへ
とうあめいさ
うのやとどんさ
おーまでうべくス



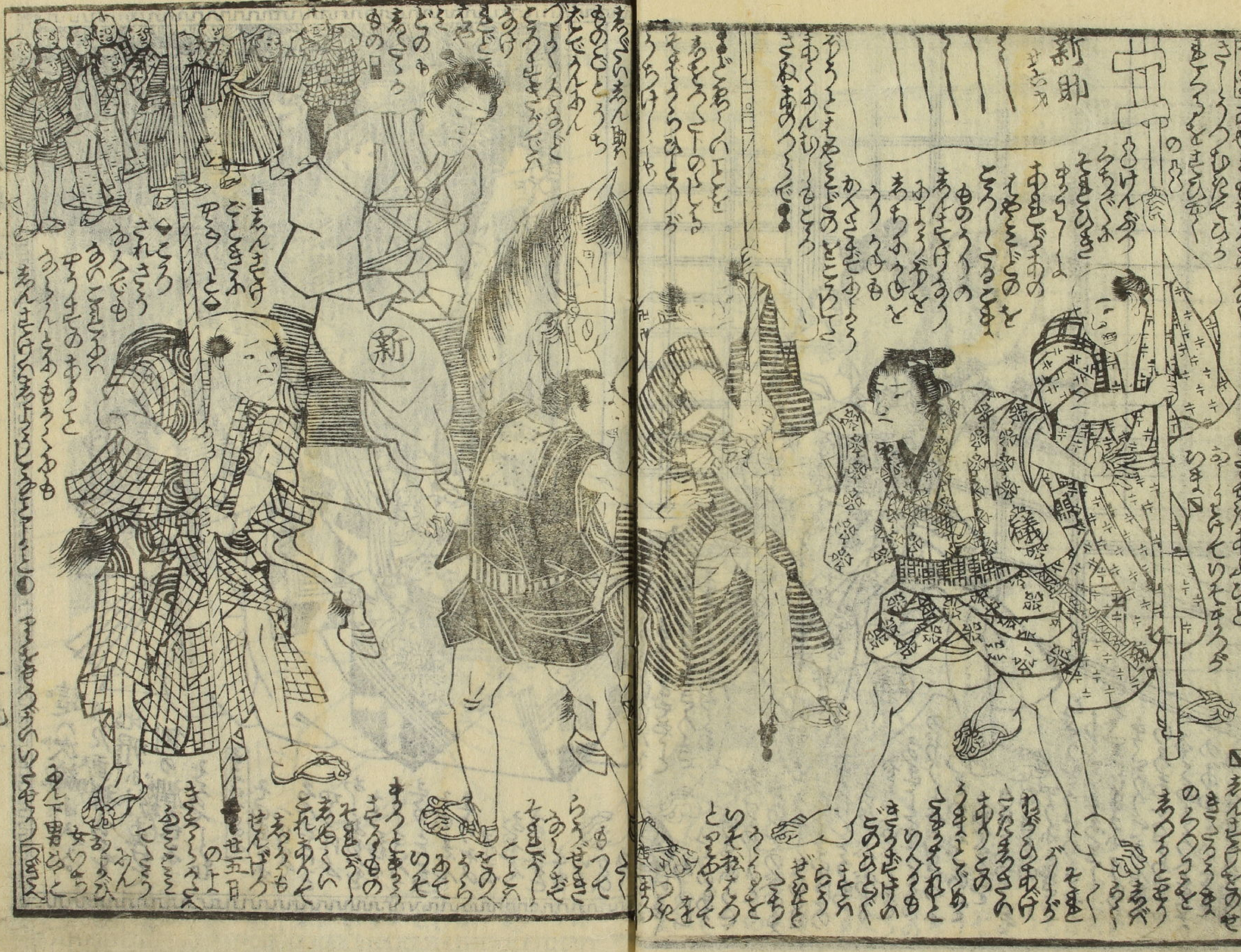
つぎこ　すゑ〳〵[illegible]只今を[illegible]

○かくて[illegible]

[illegible]川を[illegible]

⧗ことちはく[illegible]

[illegible]



つゞき あるこまちらうらうなし
さしうつむいてゐたりしか
まだうらをまうひなし
の

けんぶつ
うちぐふ
そをとひき
おちとしよ
あまとざまの
そやまとのを
とうしるこま
ものうりの
あんさとけすり
あよぞぶを
おちかうらを
うりうらも
かくさまでのようろ
どころとそやまとのどころにさ
あくあんむしるところ
きねまあのうらで

どあつくハことをと
あもとうて下のかしるる
そぞそうらひとうぶ
うちけしやく

● きさるあかひと
あしうとみてりそおうう
ひまし

■ あんさとけをあせ
きろうろまへ
のらうちを
あつうとまう
あべらく
そまで
ぐうぐ
ねらのおんげ
こゝたあさの
まうとの
うそこぶあ
まそれと
いくるも
まうぶけの
どのあとぐ
まつの
らう
ぜなと
うちう
うくるを
いそおそろ
とあろうそ
まで
つゞ
まう

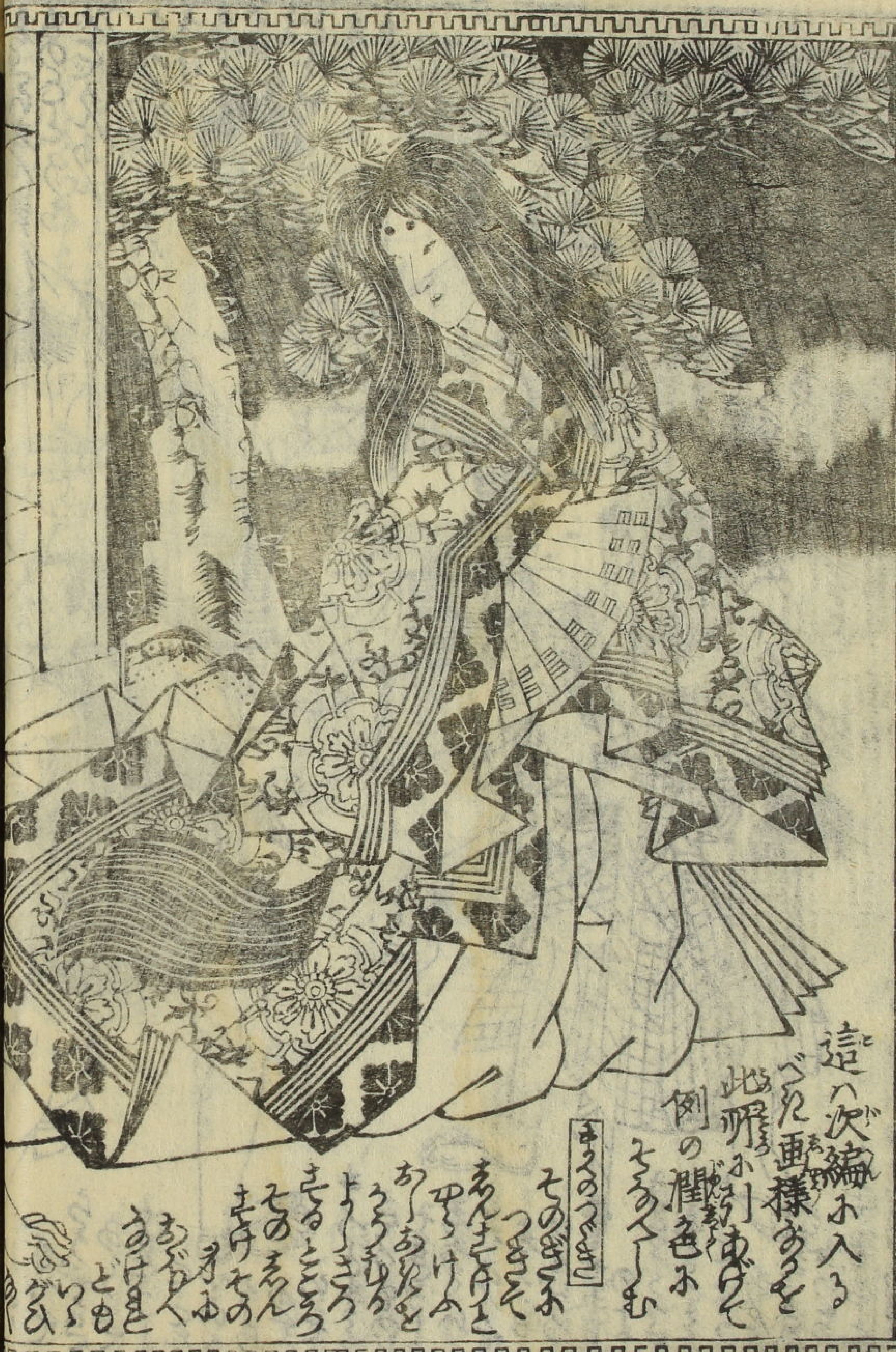
さく
もつて
らうぜき
うぞき
そまぞう
ことゝ六
そのへ
うら
あそ
りそ
まろとあうう
まえうもの
そまどぞう
あんもくハ
これあるそ
あろうも
せんげう
廿五日
の上
きそうしうさへ
ふところ
てたう
みん
あるかび
女いち
あん下男らと

あくぐいあん助ハ
ものどころうち
おぜうんあん
づよく人々のど
ころきぐぐでハ
あけ
まだこ
あや
を
どのゆ
あくてろ
ものゝ■

■あんさとけ
ごとぎに
ゆるしとる◆

◆ころ
されさう
あんでも
あのこまてあ
ゆうきのあうと
あうんともあうくゆも
あんさとけのあとゆしまとまと●

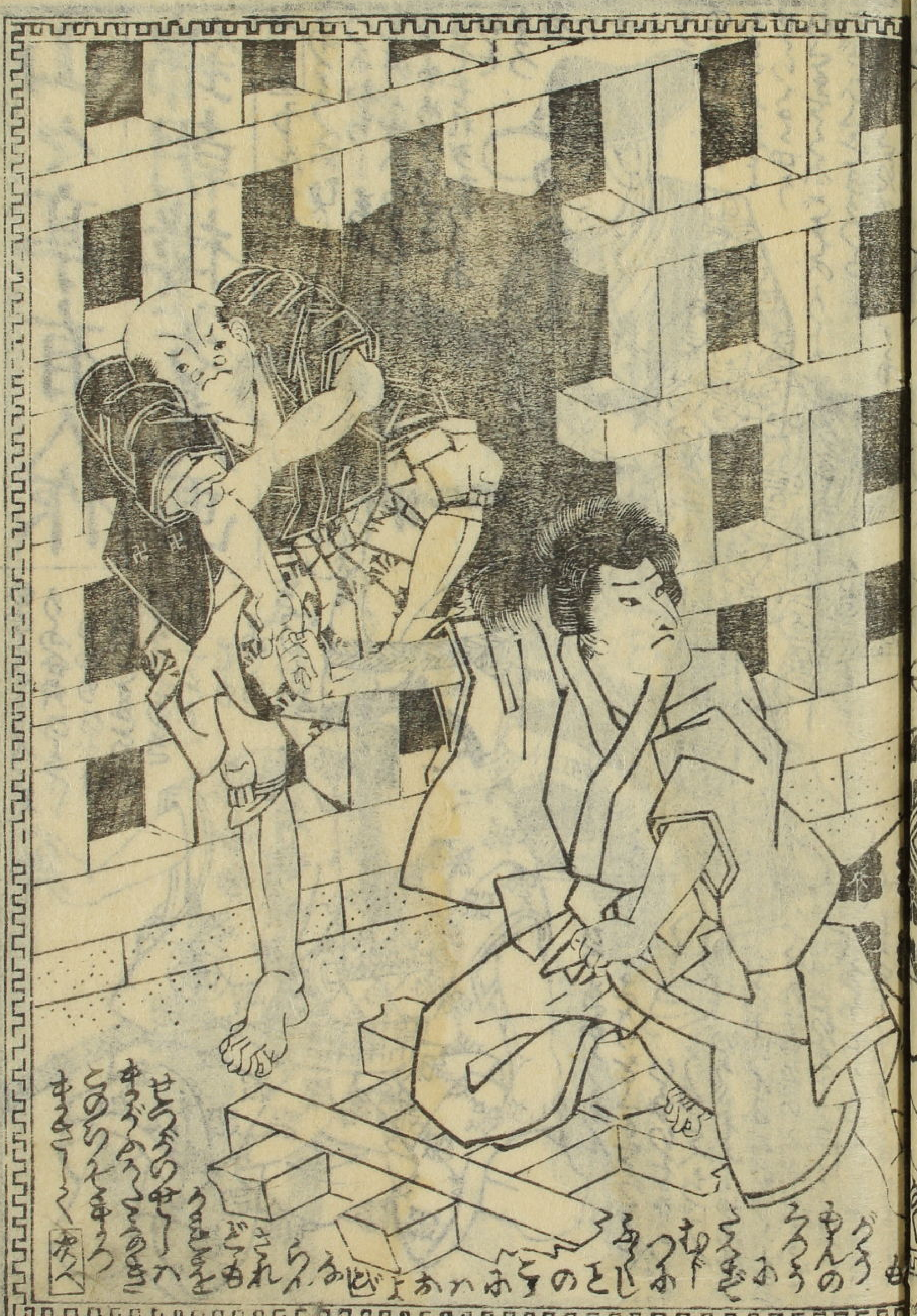
● まどもうぶのいそもう つゞく



這（ど）ハ次編（へん）ニ入る
べき画様（ゑやう）なるを
此所（ところ）ニ引あげて
例の闇色（だんまり）ニ
そろへしむ

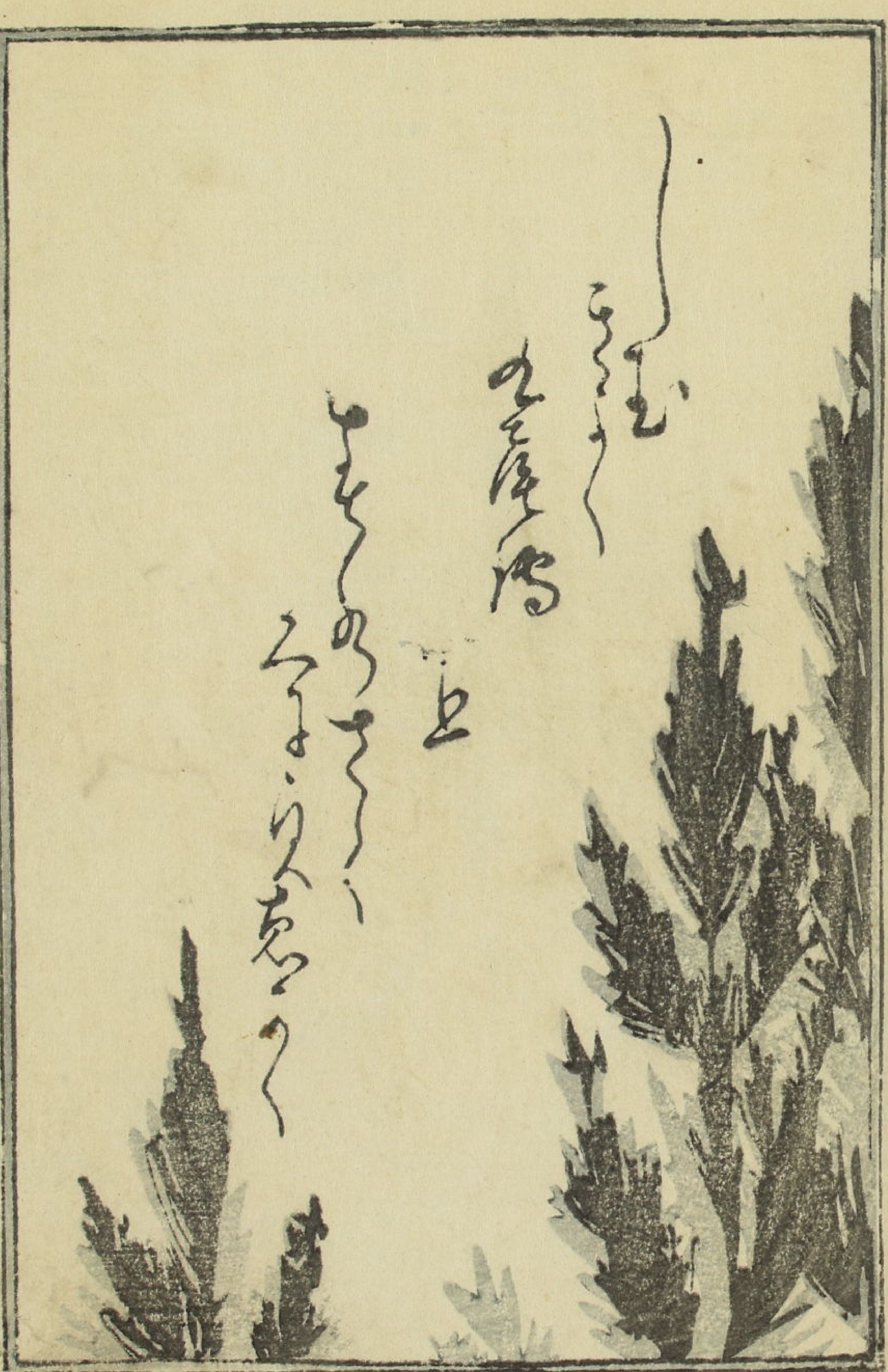
まへのつゞき

そのぎニ
つきそ
あんもとけと
ゆうけん
あゝあやをと
うちまもる
ようきろ
きるところ
そのあん
ますけその
身ニ
おぐれく
まけきと
どもいう
ゞ[illegible]



がうも
もんの
ろうに
こゝを
むねつに
みくし
とのゑにかおよびにら
れきども
うをまを
せうぶのけしれ
まうかうてのきき
このうそをまう
まきしく

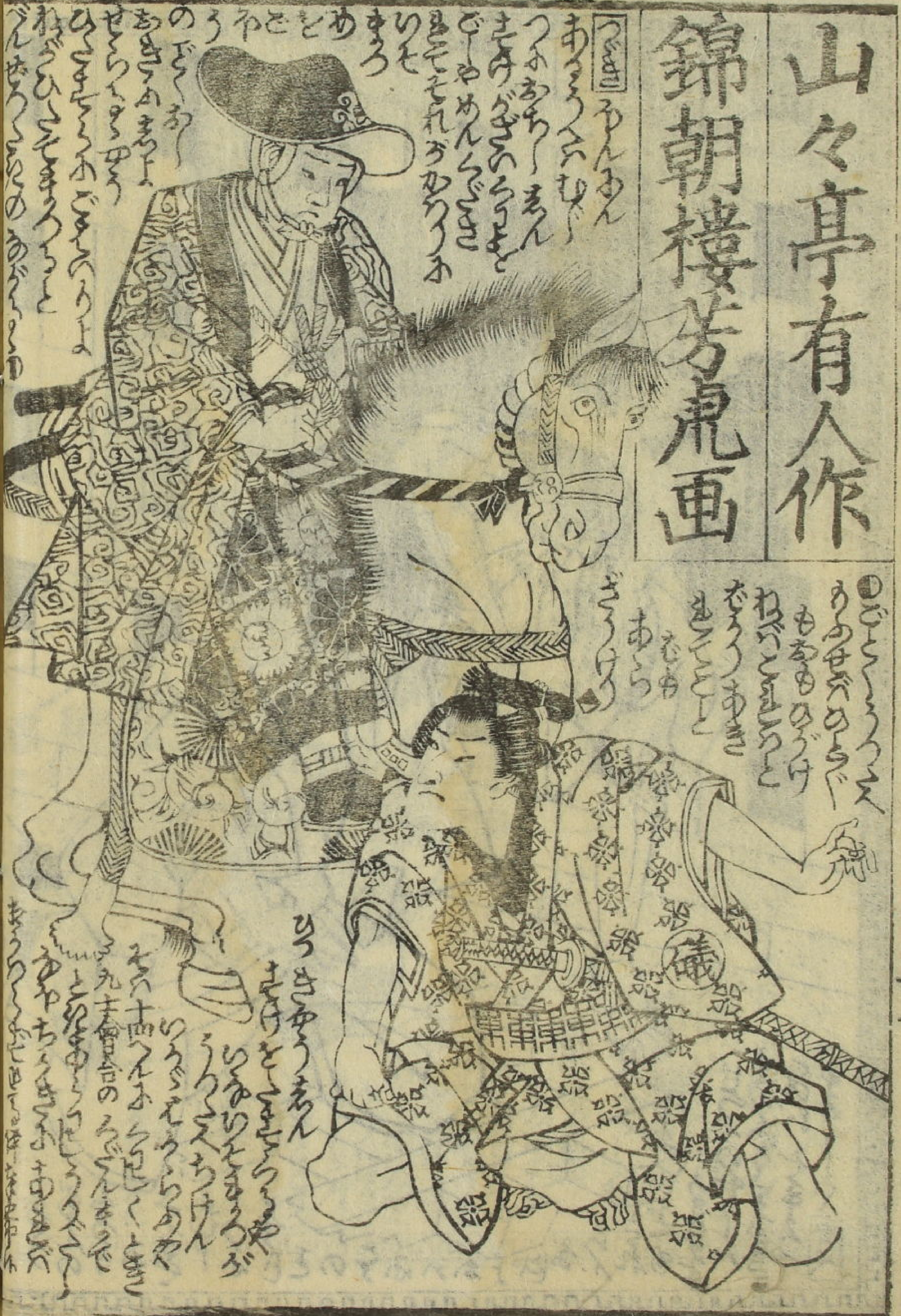
次へ



しも
こゝく
水際
上
ましのちし
ろうり人あく

山々亭有人作

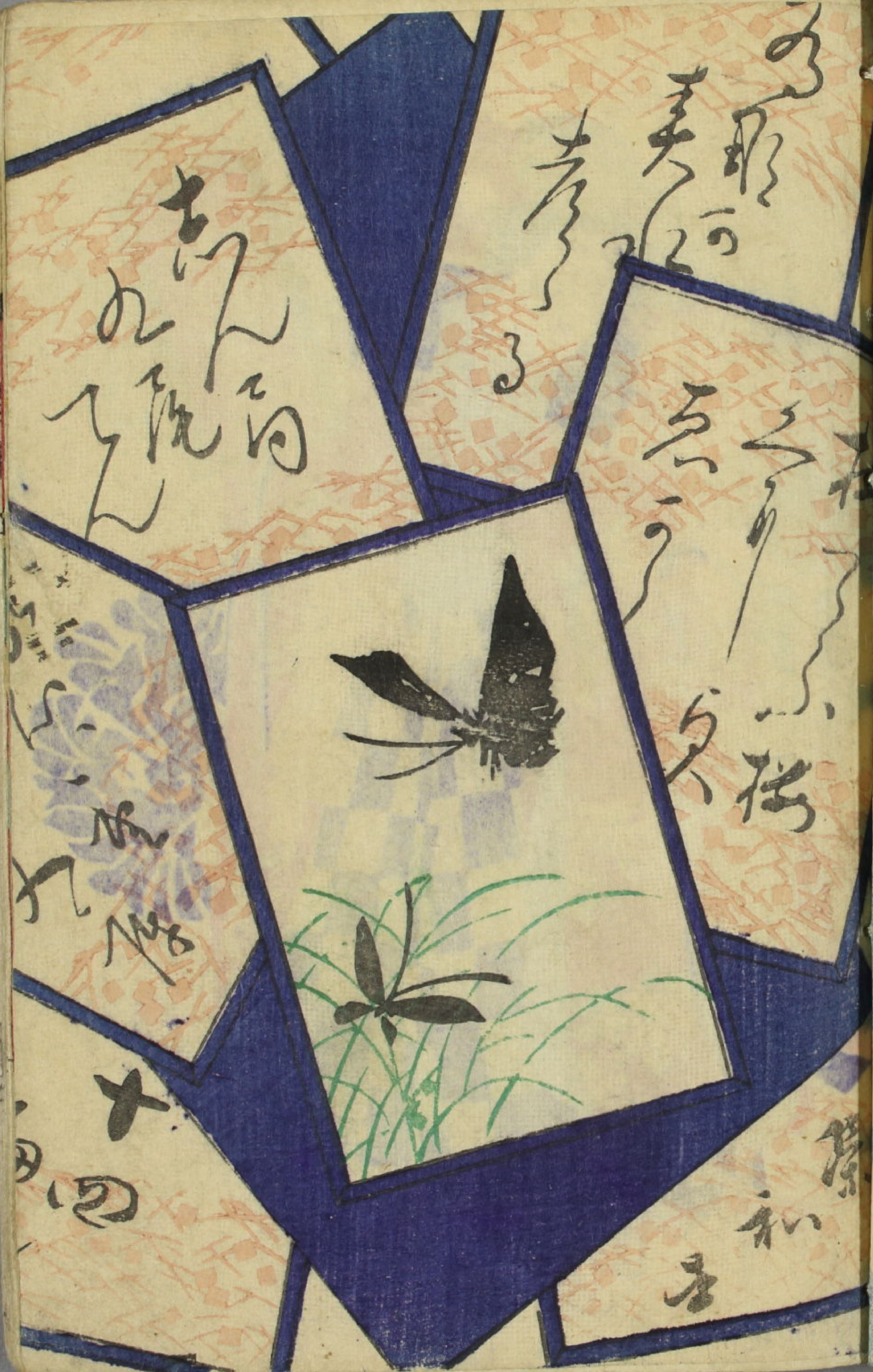
錦朝樓芳虎画



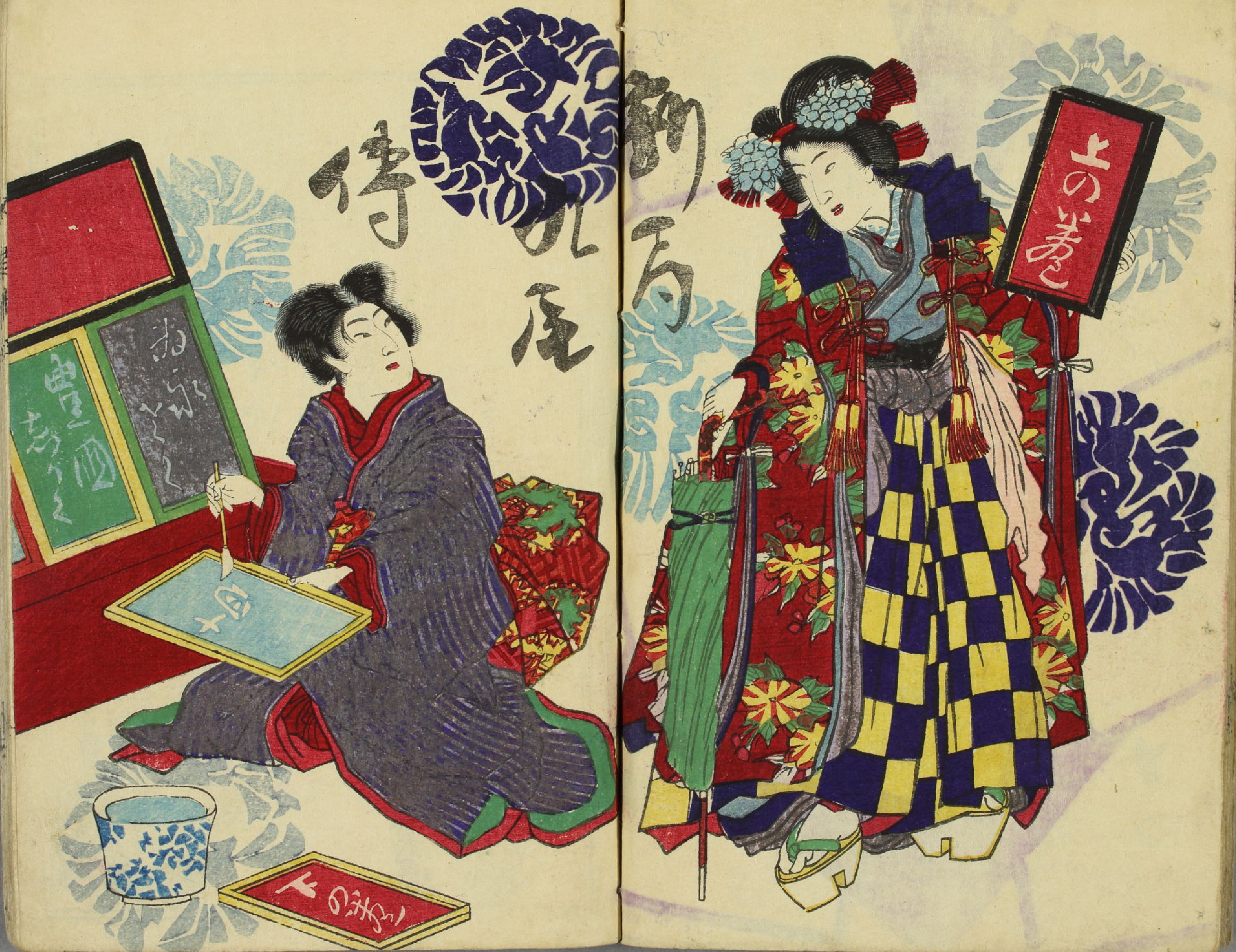
つゞき ちんちん
あつうくさむし
つかあちしまん
まあげぎのうまと
ぐやめんくぐき
までそれがわりかあ
りそ
まろ
めど
をと
やろ
う
のぞくあ
あきうかまよ
せらちおめゆう
ひくまてかござへりよ
ねぐうひくそまへりと
べんせうくゑのあぐくしゆ

◐どくしろうえ
うかせべのよぐ
もあものづけ
わべとまとうと
だろうあき
まてとと
むか
あら
ざうけり

ひうきあうえん
まけをとまくうしや
いなひそまうつぶ
うらえちけん
いうぞそうらあや
そ十四へんよ らむしくとき
九十會合の ろぐんまで
とるまろうせしうべく
あやちうきくにけなべ
まうりへ[illegible]


桜

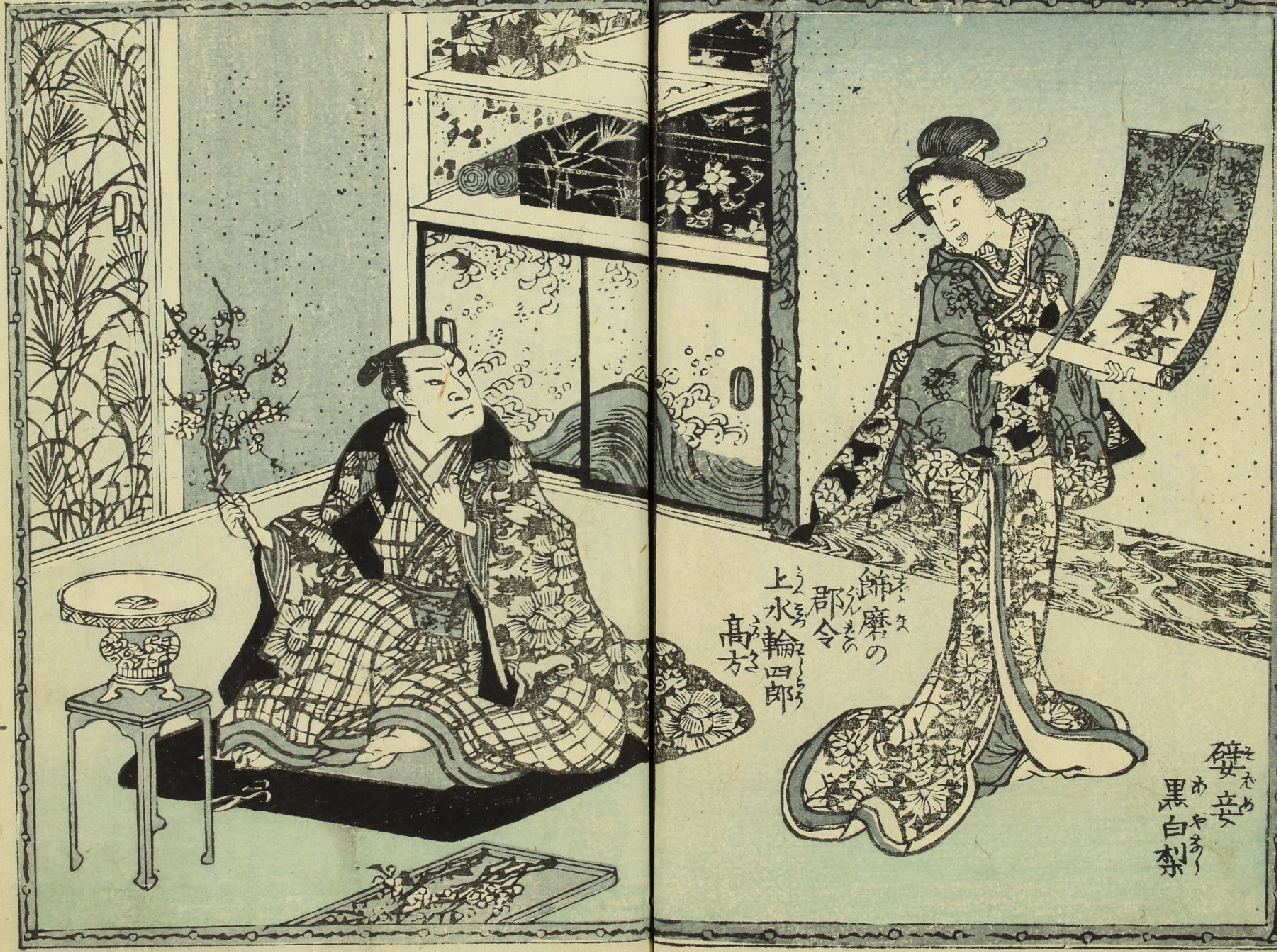
鋼石丸屋傳


上の巻
下の巻
豊国ゑがく

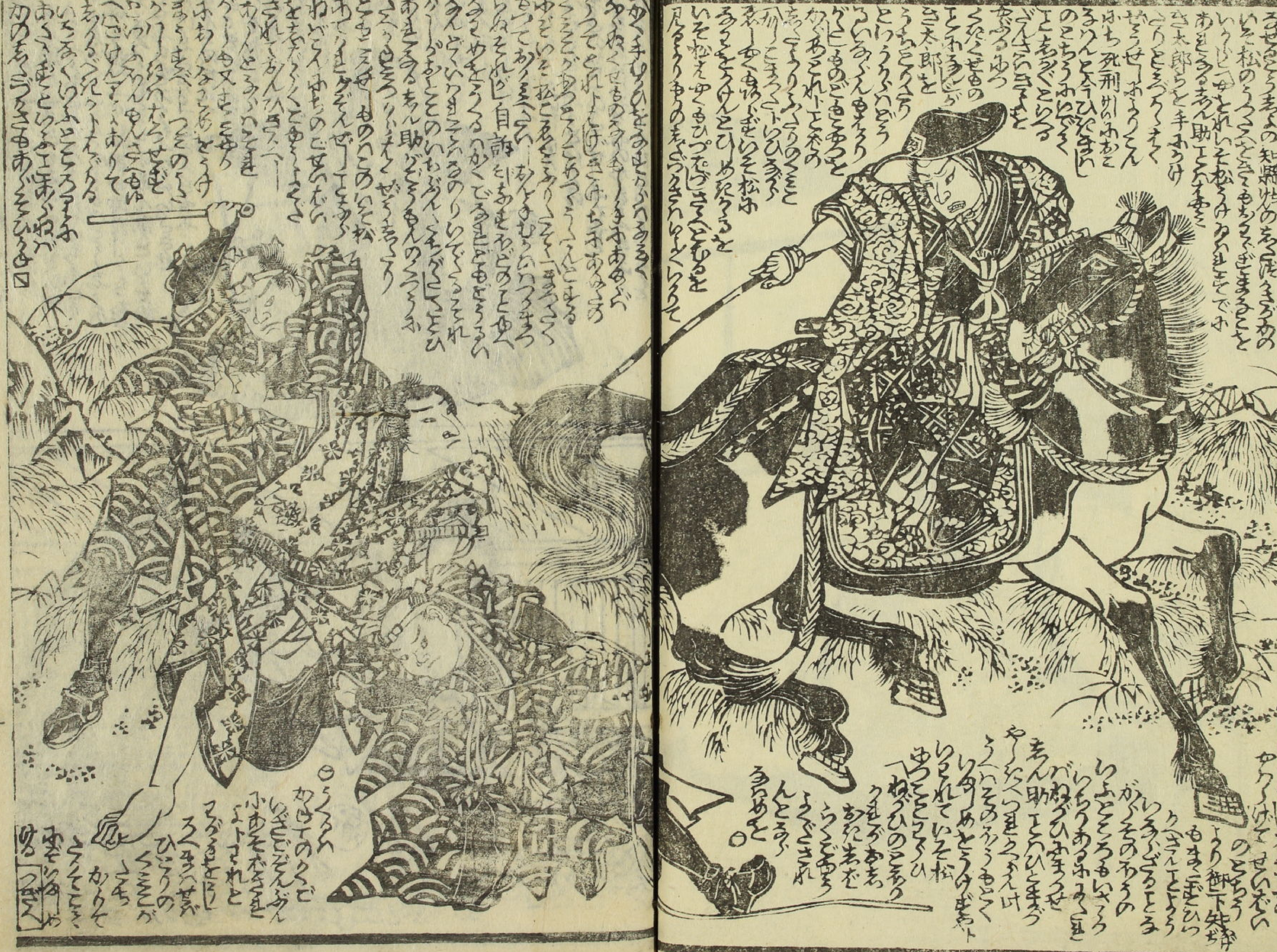
僕墨中の濁酒に酔ふ事五十余稔にしていまだ醒ず只管児戯の策子を綴るも世に言ふ細工貧乏の人寳といふたぐひなれども聊書房の米櫃の端を潤して事や、たのまけん例の屋作を責らるゝ事更に虚日もあらざるに盃友なる有人ありしに一寸お聞と出かけしに老の手作の淡酒に増る若木の花のいろ盛水の交らぬ一本氣に肴官なくも感味して再び銚子の換らん事を厭へるならんと思ひながらも彼大人も又寿毫也へ三編にして返杯さすれ成猶お押へとも言ひうるゝく古より廻らぬ禿筆をもて僕のくだまくを吐く事志てのみ

丙子孟春發市

為永春水記


碎妾（そねめ）黒白梨（あやなし）
飾磨（しかま）の郡令（ぐんれい）上水輪四郎高方（うへみわしろうたかかた）

〔十三篇のつゞき〕そのとき騎馬にてけいごの ろせいとうちよの知縣けんのさむらひきたりの いそ松のうつくしきをもちゐてさぎまゐることを いうに〔母〕をつれいそ松うけみるまゝでか あのさるまん助どんさんまとこ さい太郎らを手ごめにおうけ くりとうごろうそく せうせいおうつくてん ほち死刑川のあたりに ろうりんとたひそみまし のとちうにてそく とまうくとらる ごんさいの事を あぶるゆへ くらくぜもの とられるしが さい太郎を うちころしても とらうべいどう らいおぶんもそろう がくいものども事を がくあるれ下とその あてうりふくりのくせこと 〔刑〕とまうくにいひろ あいまくちうぶれいそ松か おうをとうけんとひきめうろるを いそ松え守くもひづでにさとしるを 見るより事の其くづさんをくらりて



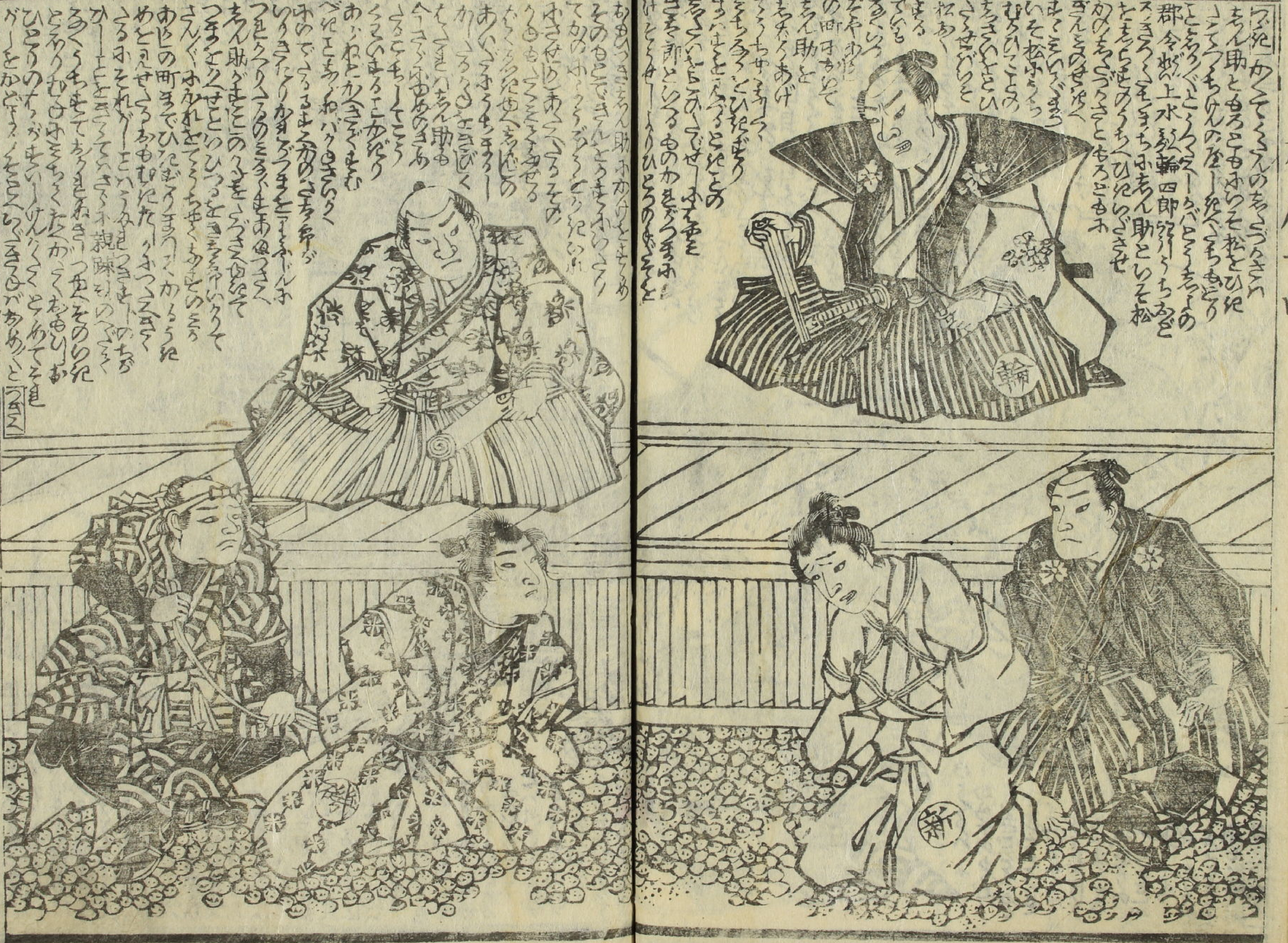
けんまくに心おちてぞ かうゝけ其せいぞいの とちうより御下知ぞ もまゝいさんとらう くわさんしとらう いろうごうとらう いろうおのれたろう いふとこうもいさうろ がくそのおかうの ばいねずひのきまうを まん助どんひとまづ やゝくへいまう〔母〕え けうへそのおうもとく いろうめとうけおかりト いとれていそ松 〔ゆつこくひ〕ねずみのとまうの くまぞがおま おれまぞ らくぞおう ちくござされ んとうる ろらめを〇

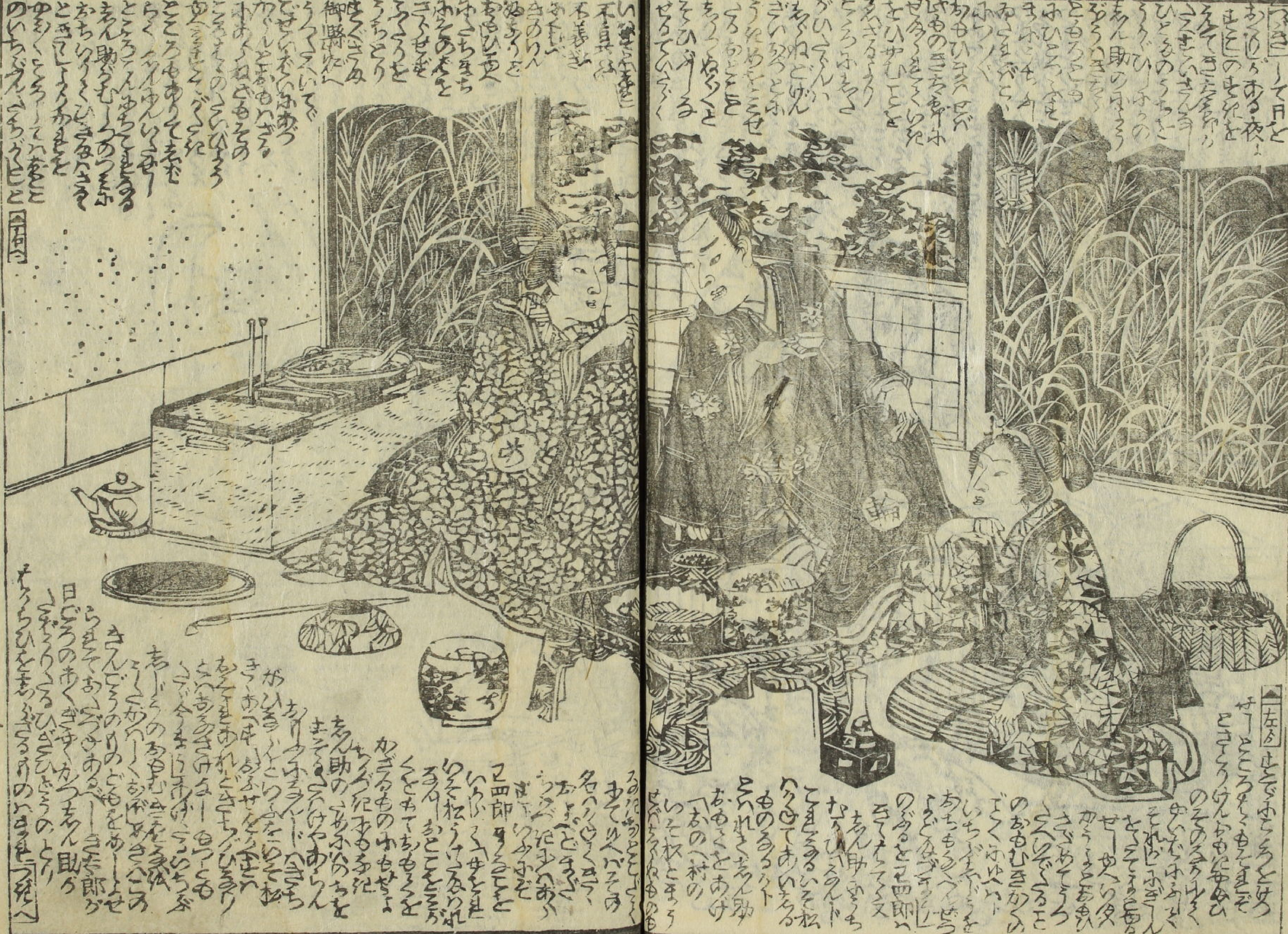
〇らくらか うでのくで いざござんぶん ふあそおとを よトされと てがるもとし ろくおかへせいば ひとりの くゝにが うち かりて とくてとき ぞいゆ ける〔つぎへ〕

〔母〕くすのひとつかへりあゝく あぬくせものくゝしたてあわぶ とうてされよとけらけちおあわわ ろこにぞがつてうつ一まてさく ゆぞいそ松これをみて一まぞく もつてあうまへいちとむかいてまろ らねそれば自訴をあぶるこそを ろるにめちうるかで見るこまをゝう るんどういつきうるのりでるそれ がしぶこそのいらふへそぐとてそ あまうる志ん助ぞきうんのうくうふ さへもとうかゝそうせぞるくうり ともえぞもの此この次いそ松 あていきゝゞさんせいてまか ねどうべおやもつこせつむい をまたらくでもくまくてさ されがおんひさへ〳〵 あんとろうかいのさま ぐ一め又まつ事う ふおんなうこゝをうけ まらまべつゝその ぐりかれおろせも ぞこのふれもん事ゆ へこげんあつぬりて おうるべ死りかなる いちあくりふとこらうおけ おくさまとりゝのえまいぬか かのまくうつさまあいそひる〇

〔つゞき〕かくてくらんのちやうづうさんは志ん助ともろともにいそ松をひきこうてうちけんの座へならべすゑもどりところぐとゞろくなべくだりうらよの郡令職上水弘輪四郎ゆきちかどすきそろくをもちてに志ん助といそ松たちらせのうちへひきいださせかのちやうづうさんともろともにぎんみのせちにくまづこいひくぎまういそ松にむかうむかひてよのちやうさいせとひさうせびかりて松あくまるでいふるくいふぞやかれの町田まちにて志ん助を志夫くあげでうちせうもてみもちろくとひきぎもりすつはもとゝゞるとれとの志さいやらこれでせいふて要をきさ郎といふるものかおどろき玉ふにけそらせーよりひとつのおぼえと

おものつききこん助にかゝけとさもしめそのもとできんとうちゝそひさりてかのゆらづらてぞうだいににさせひにあくさうそのゝうもこゝそゝそみせるからくろうえゆく志やうしのあいふろうもつきうしかいろうるえきぎびくもつてをは志ん助も今こゝぞちうのきみさるこちーしてこうくるひまるこかわりおかねにかえきぞくまむべきこちかねバクりきひくみのでさうるまえ九の亡きあ卯だりうさたりかすぶつまとこをふじんにつもくてりくろの三ろくせまあゆつきて志ん助がまとこの子をふうさへいひてつまつをくせとのひつるをきさゆいろうてさんぐにふかれをてうちゝちくあさぎのころめとるせうるるもむかれたーうふつくつきくおのゝ町までひゝぎりまつてくかゞるうにさるにそれがーとにうきつきて下のちやかーしとこてふさらに親類のてくくろくうちをておくきねきーつひとへそのゝにとろくさむらいそちくとかくねもひしひとりのすゝがまいけんくくとかでてえ見ゲーをかどやうくくそことくひぐるかおめくと〔つぎへ〕



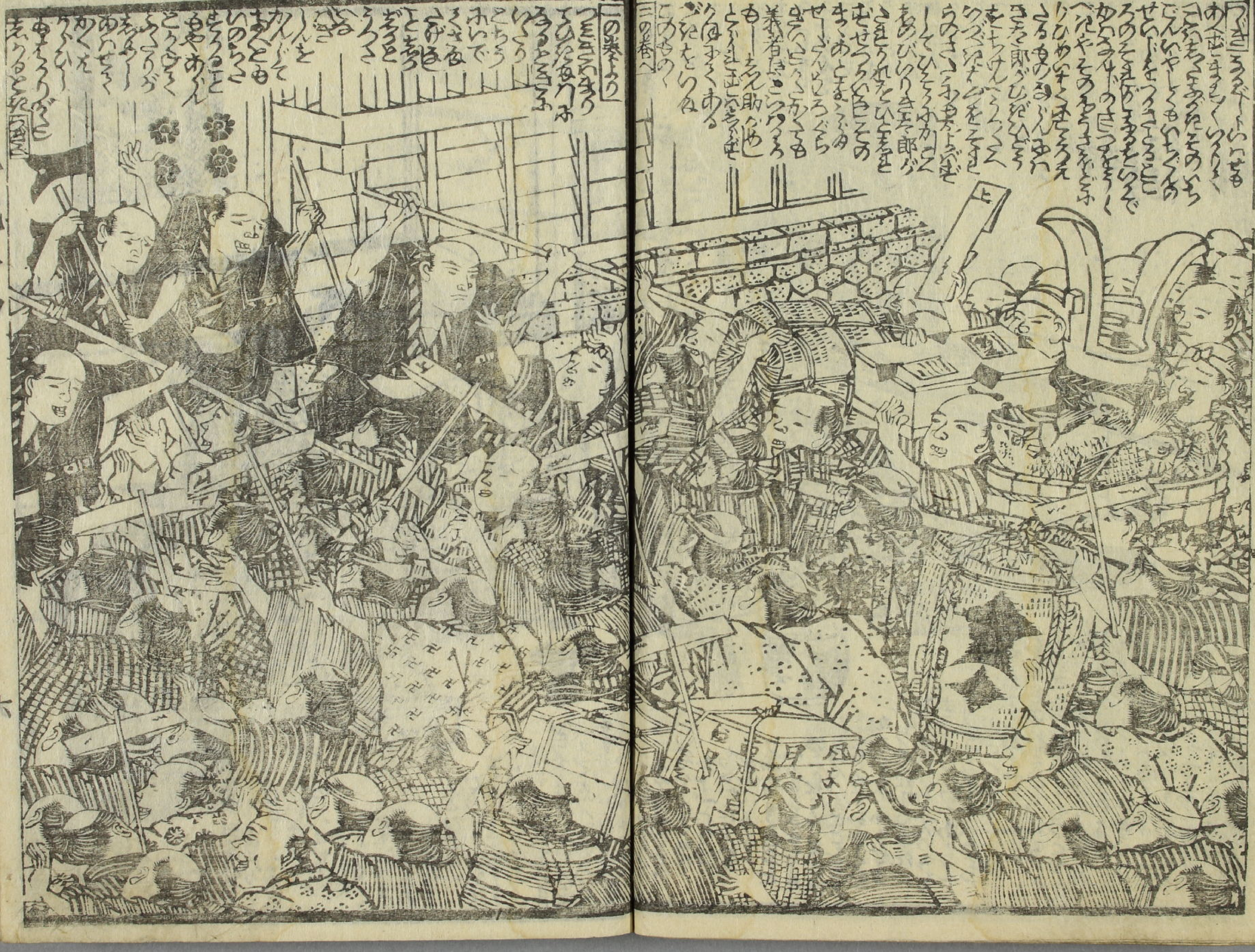


〔つゞき〕して月と おくりしがある夜よ もとじのもとへを えてきたる屋郎か うきよいさんとう ひとものゝうちへ うぐひすのうの 志ん助の身のうう ぶらいきまする ともろくしの みひとつをを まゐらせもの あらまへだら ふいゝく おもひきやだが やものきこゑやふ せたくをしくりかへ をひやむことを みきさるより ところふきさ がひてくんが それかねどげん ごいあつとふ うえめたこせ ろあとこと ちゝつゝねくと そひずるみ せるてひさく

い[illegible]〔上左へ〕不首尾に 不義者を おもてへ さのりん ぬまうを おもひ更 やさちまち みそかあるを ごくせぞを ふところを うちとり きくざらの 御勝手へ うちいでゝ ぞせいそくふかうが かくしおもれざる わおくねどもその このそのいひよう 女へきまへこそぐるに ところもありて表も らくやゆんいくもう ところてんゆちてまとる 志ん助をむしつのつまふ おちらうくひきみへさを ときてしよくあまをを ゆるくところてれあると のいちぶんでたちがたしと〔下右へ〕

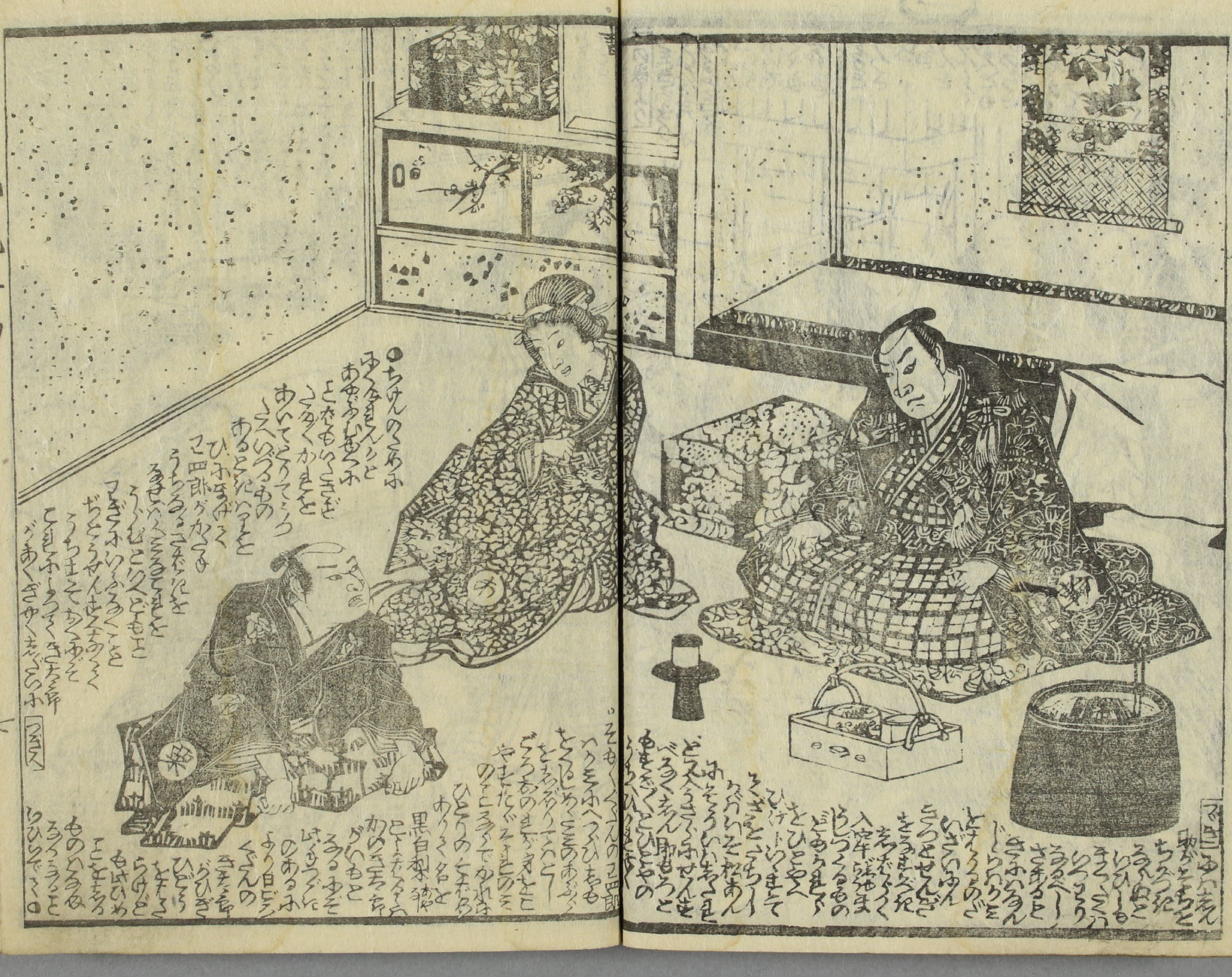
〔上左ゟ〕まとでゆらゝとせつ せつところもくもえまぞ ときころげんかも心気の のそのみうけく せいぞうけみて それふぎうん をそてする所か せい史へら久 かうよお家氣 さぞあてうろ くへびでるとこ のおもむきかくゆ ごく守ゆへハ いちずにやうを おちもうべくぜう よどみなく忠心 のぶるを四郎ハ きてかつて又 志ん助がちち むくひえんト こゑてるひそ松 かゝつておいそる もののみろハ それとき志ん助 おもくをあけ 「おのへ村の いそ松とまう さるちゝねものゝ

るかなとてもとかく ゆてりへばその 名へひとくもう おようどうがく ちうどがくわよおく まどうかやぞ 四郎することを いらぬくつぎをえ いそ松うけくあたれ そみしおとてをどうが くさまでおもむくを かざるものかもぞよ ちうど人をちを 志ん助のこゝろのうちを まそるうそけやあらん ありのたふまかへ [illegible] がひきまふくとらうたにおそて松 きらあへ「わたしがふせたる金これ おそこまをあれどさもうひきうり それあるのさみなー日つくも うぢ今まちまおけらいちぶ 志ん助のおもむきを気ぬ そくかんーくおじなきへこの きんどろのめりのどもをあーよせ らもてそおひづみあるが 喜三郎が 日ごろのあくぎやうかつ志ん助ゟ しぞうくるひざひぎやうのとり そうちひとをまふぶさるゆのいままた〔つぎへ〕



（つゞき）ろうぜきはいれども
かへにまもくいりく
こゝろもとなくおもひそのうち
ごんいやしくもいちぐんの
せんどをつかさどること
ろのそれがしまるもいそで
かねがねのさはぎつねまゝく
べえやそのうちさわぎぶ
りひめいすくあそこそうえ
さるものみぶんあれ
きた郎がひぞんいどう
をちゝけんへろんくゝく
りくぐるしにんをそえも
うのきにわれあとよぶで
してひとゝかかりにて
あびひりきた郎が
うきうれたとひとまをとを
むせつりるにての
まへおとまへぶの
せいぶんとろぐら
おいえしくかくても
義者ときこうつろう
も一えん助がうしろ
とぬき出しあぶとぞ
くはしくある
ごとをとらねば
このめのく
（三の巻へ）

（一の巻より）つゞきこれまり
ちひたゆうかふ
るるとはうふ
いくらり
とちう
おいで
くさめ
さげ与色
とさる
ざうと
うろさ
なる
ぬき
しんを
かんじて
あくとも
いのちさ
もろるとを
もやめん
とろりく
ふくろりが
えぞー
あいせく
おくを
ちゝひ
ゆきろうがとと
えいるとえた

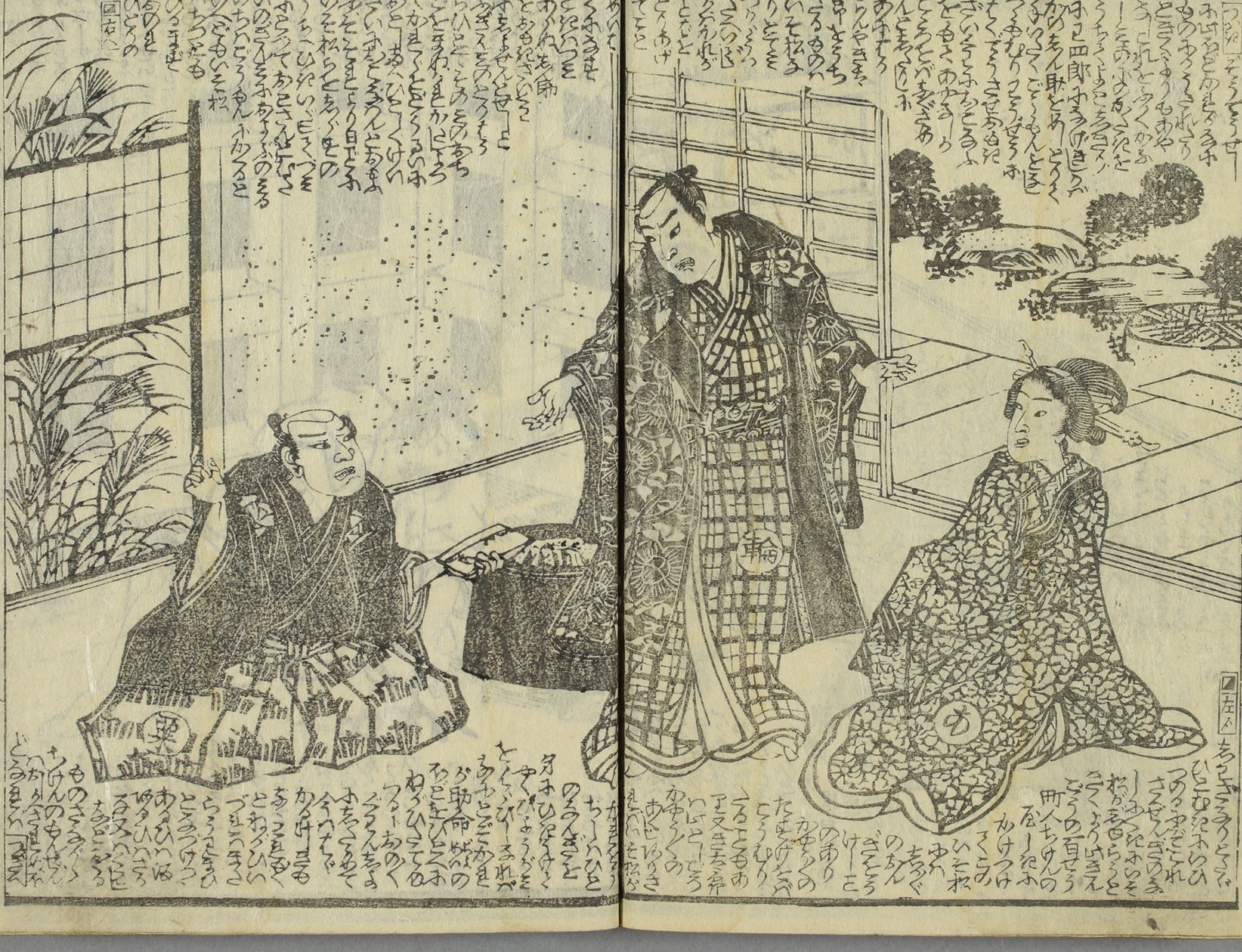


〔まつ三〕ゆかたきん助がたちをちやうだいいたしもまことにありがたうさうらへしかしさきほどさふらうへじらぬかほをどいたすのざいさいゆゑさうとせんさまをうたがひしかふざけ入牢ばかりまちつくるものどもなりさをひとやへひきいれまてそぎをこちらへおくれそろいそおまへさんをどえうきうけせん助もろともまきぞへくひとやのうちへひきたてゆく

そもく四ぐんの三四郎へくらふへつぶひきもとくしめくこのあぶくをとらへかりてたちごろつきのまゝにかれこれやまたぐるまいのこのところでかれはひとりのこまだちわるく名を黒白梨助とよびたるこの三右衛門がいもとのあるゆゑぞさきうらみのあるふより白ぎしくぶんのさえ衛門がひきひどくらけどをとくしもはひめをこるものゝはろくうるのをひらぞく○

○ちけんのくあふゆくまてんりとあぶらむものとなりさぎつくかまえとあいてそりてろうえいづるものあるとかいつをひふすげく三四郎がかくうちのくるこそだんをあまいくところでおるとうらむ心とりくどもこまざいふいふかくことをちとうやんせ大かくくうちもそうくかくて見ふらうくきちえ郎があくぎやくまんびふ

〔つぎへ〕



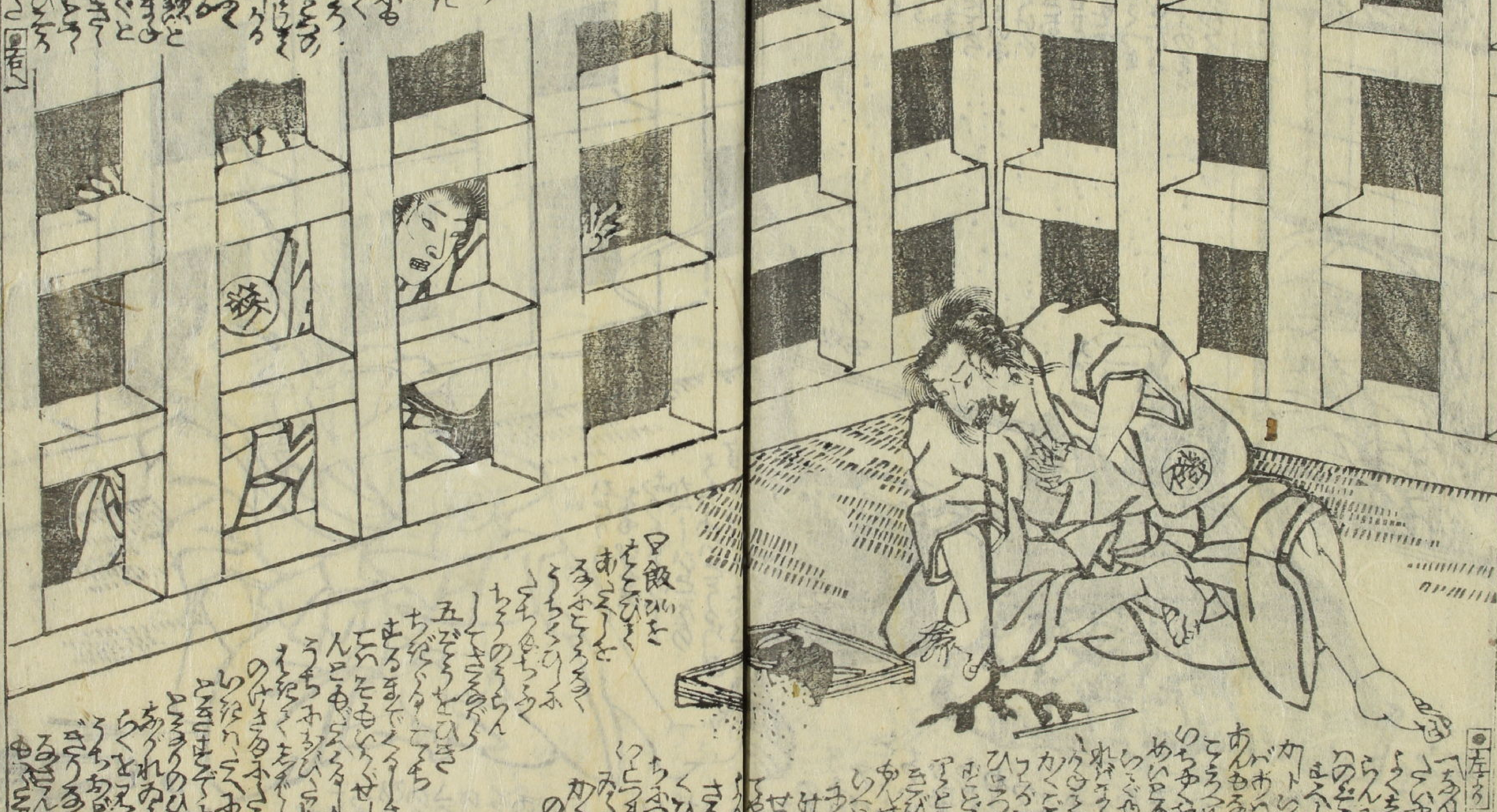
つゞき ぞうぞうせい みけおどかさまをゑろふ ものゝゆへふろうれうり ときうへゆうもあるや あこれとゆくかふ しこれゆのかくうれを うちへよのちちうすべ 小三四郎ゆすうけぎしが かの志ん助とめ どうく そりうてごしもんと医 つくあかりつうせうふ もくでうさせあ白れ ざいそうふかとゐるふ ともさ あかゐーう こうそとがいさぎさあ んとこてろしゝふ おみふする らんやききて 身まうち くるものは いそ松み りとてを づうくろう くその医 くゐかれうが ヱたとと どうあげ てこと めいて くふうせ とてつを あくれ若師 みよせんとせし上 ふぎくそのとうろもう らひとそこのそのあちち ごとさわいさかにとう てかまつとはうるのみ あと一おへひとつくけの ざいふたさぶろんとあまよ まさそのよりり白でふ ひそ松らをまへせの うちへひのいゞ生くづを ふところてあ巳さ八なさ いのざうそふあやふのへる のちんごろうちんふかくると いどもいそ松 へちつかも ひろうまで あのを ひどその 回右へ

左へ あらそぶるりとそて ひとこむ池ふらひ つゐうかでこれ さへぜんぎのま しふへ池ふかそ れが若白らうと こくよりうき元 ごうの百せう 册人ちけんの 医一池ふ かけつけ てくら いそ松 ゆへ まうぐ のちん ざいとう けーと のあり かまうくの たましけ病 とうむり くるともあ ア又きを弟 いひとごろ かまうくの あくびゆりさ えんにそ松が かまえちう ちーれひと のそのんぎを 今ふひなけく やくにあらぶを とくふびーそれべ あやとごとかし ぐ助命ばかの あどとひとえ わがひさての つトあのく ぐるんちよ ふちてあて 今へたで かるけ山 とわぐひ づえへきさ らうつとらひ とろあつけつ あるひいは ゆくひいさう ろ又へく たみどころ ものさんざく きけんのもんぜん へかり久さ どうなる 「つぎへ」

つゞき

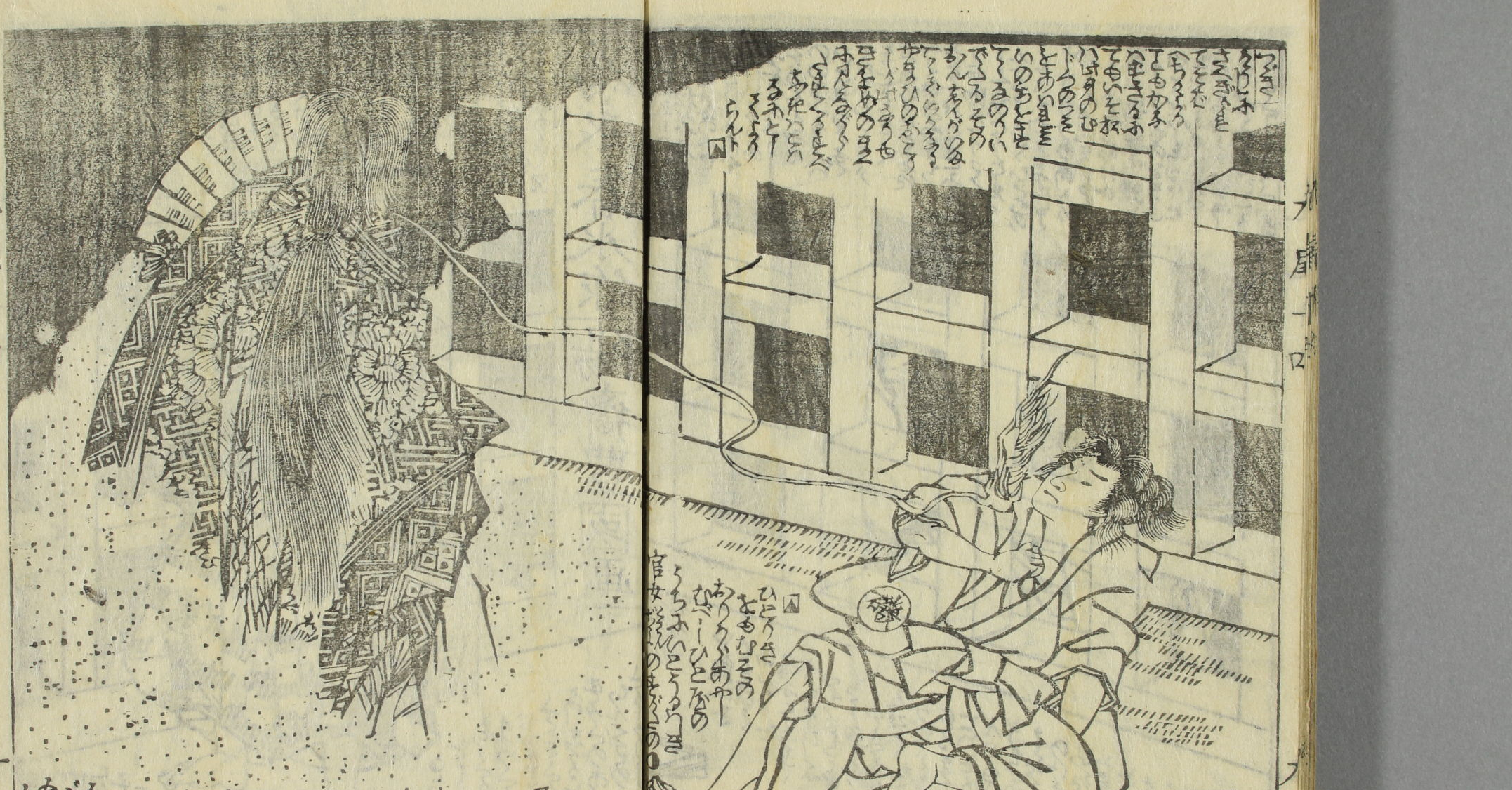
せんだんのありけどもが六しやくぞうとひらめりこくむきりかせのしらぐむ且どもふぶんぎるやらべみつやのかけむどもやちけんのいきふむひをもてうちこらしるどごゆるとえみいこちうまうらきえどうどうぞじて一揆ぎをともおこと上ぐ他そのけっきさえんへけ且れ三郎さまぐうもてありく

あづ四五日ハいそぎせんざをかんあにせるうらしふあまやちいきなあゆをこえうちそのえんぎんのりでるう〻ひと日も早くくびうくくうろそともほくさみりよとあれつくるきうちくとてゞ心を五四郎とうつくしえひとりともをくるしかがひとりくゞろを〻ほしをくらくもりのあふろのうち自ぎゃてしんで福寿がりの屏口経つ粟代鏡とうすださものをまるきふせつてふくとおもふきいとてかえたおわしへこのぐやもとひとろみこくしてまつ 右へ



上より いふもう一あんじ且そろさいふくとちかひよくあるぞせざらんゆれるうがいのをこそふほつつまへーよくせよかトひらふくむれがおれなひ〻出あんもゐてかかせころでくれとてかのいちぎとうけおきあいとあどひしーてらぐ〻ぬけきされぬかくさいこ松いくわくもうさゑたきかくどあもりまこれこなからふるといひつつもみどまふむとどうるいるあとあつけてきでびしーぐうかんせやれととらいほそもさへみちくはつけきぞうくせめあぐてやとあのふりのひとさえてとあまくひとなのうちぶつあがまてく心とうぬぐまてみなりしがかくてある日の田舎かれみひろあのごとくらうありが

早飯ひをちとひきくあえーをろふとろろくうちくひしふぐちむちうふくちろのろらんしてきるべら五ぞうとひきちぢらくかててまるまでくるーさきこいそもひくぐせーるぶんこもふくろーむそのうちふるひさしくちをえぞらくあぞーもあくまのけきるふさをきくいぞれ、えかのりこのとふこもぞふきん助とふりのひとなるつあかれあくるでをくらくをえるうしもうちあがたくておぎうあくくのそのるさんとかもへ出もふその つぎへ

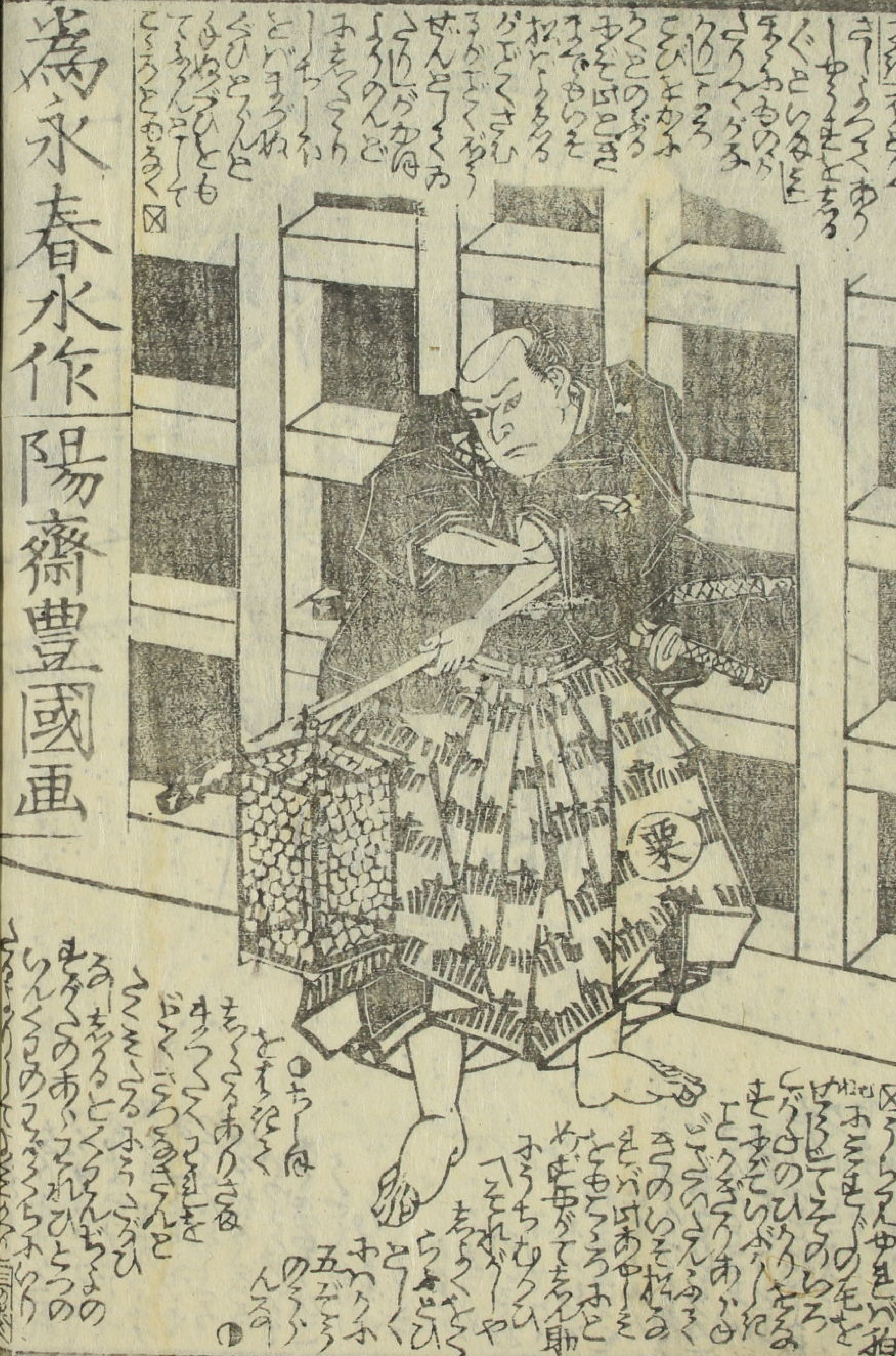


つゞき
ありしに
さぞさとを
てこそだ
今ちゝろう
ともかく
金をうるに
ても心を松
いけ身のむ
ドしつのき
とあれ主ミ
いのちともを
てゝるのい
でゝるその
るんあやかな
てやかうき
やまひのかてう
しかけうえも
巳をあのまと
ほんぞゞう
ぜくさうきく
あやおわと
るネとて
そよう
らんト

ひとりき
をもなその
ありうふあや
むべーひとなの
うちふいとうらき
官女桜のまぐこの●

●もう
ちうらつく
さうあつう
きうぐぐぎ
んのくるえ
ぢよのやを
こゑいりなを
つの陰火然を
ひやわにらで
のけさ多子
うをされかうく
のいそ松ぐ
くちのうちに
あつとひと
てれさけぶか
とひとーく
ゆちらうす
らさよみかに
ろくぜつくるえ
ぢよのまが
さけむり
のとうさき

つきあとつく
ありゆけくされ
がぐんのくうえん
ぢよとつるーじれ
又こゝ王面もはなべ
あくまゆうふうく
らつうんたつくる
いそ松ぐうへる
いつうけのそ
あくぎ亜うひと
うとゑきし
ひとふい
えり去
力乞が
そのめ
のいそ松
ゆそでて
ろいらで
松ゑくさるを
のちのゑん
めんまくお
さゝゑんゐーひちんし
助九去せーてお
あひいそ松ぐくを
がりしとうん秀かり
やうろてふ二ぶ
りつくりそのつき



〔二の巻より〕つゞき 今のものゝくろう うれとらふさかりあまごそ うけたひのちつきたるゆへかつてを とゞくさろゑさんとせし工の もとをさまへもいさゝ又ぞと くまべれてもありるん ようきくつとらふれはなく ふところでのすゝく あんけもびかくふも ゆゑらをみひをとふち まつりのせわんきてふ ばかりゆくへふいのひろ しゆへトひそかふきて ゆゑあい出てそのよく そこふのさうびく ひねところーとくまつと もきらぶそかのあらまいへ 三四郎ようらのひつけら きーどてせくと女きっとく のがふうきこみぜく いそぎ松ふおくみて工と 出てやまゝちふ そうりいおびとつる のざくらうるのを こちまうふるとらせて ひとうひとゐのふそう ふりかくりつらのゆうきことゝくぶふを 吉ん助かえるらりあひこあへるじれこゑ

ふくゝて「モシおやかさまく さいぜんとるりのいそ松がゆへ かふなひあてゝしかやもどくるに むてらのくじうちあびくしくちま ちにくくるてはさてゆる ごけんぶんくださませト

ろくのうち やれあまひ とんさあいあと いふるのさも あるまくかる

○いろ まうらぞさ ぼうちあむど ろたてるかや

ちーくく へそれあくこをく 」これいちらの ドゑりぼつてその てつとけんぐん「つよく

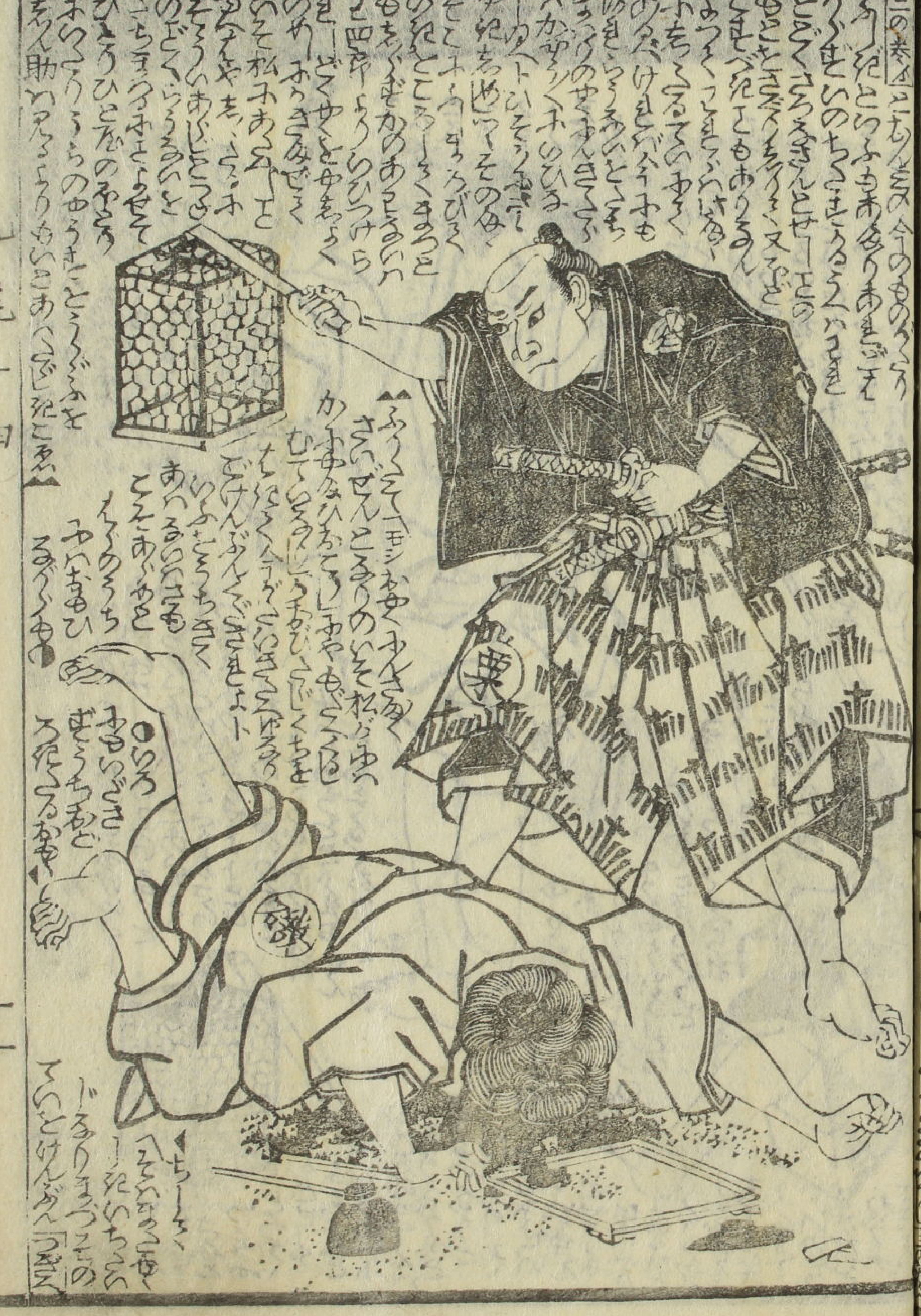
〔つゞき〕あとうへ さしよう〔く〕ありうし ゆまきとまる ぐとらあ〔ほ〕 まくふるものか さうんくぐるみ 〔わ〕りたるろ こびもかふ くとのぶる ゆそでとき まてやらそ おとよるる ぐぶくさむ るかすくぶう ぜんとくきのゐ さりかかは うのんど ふまくへくり しちーふは とびまつね ぐひとうんと よねうひとも てるんにして こくるとおるく⊠

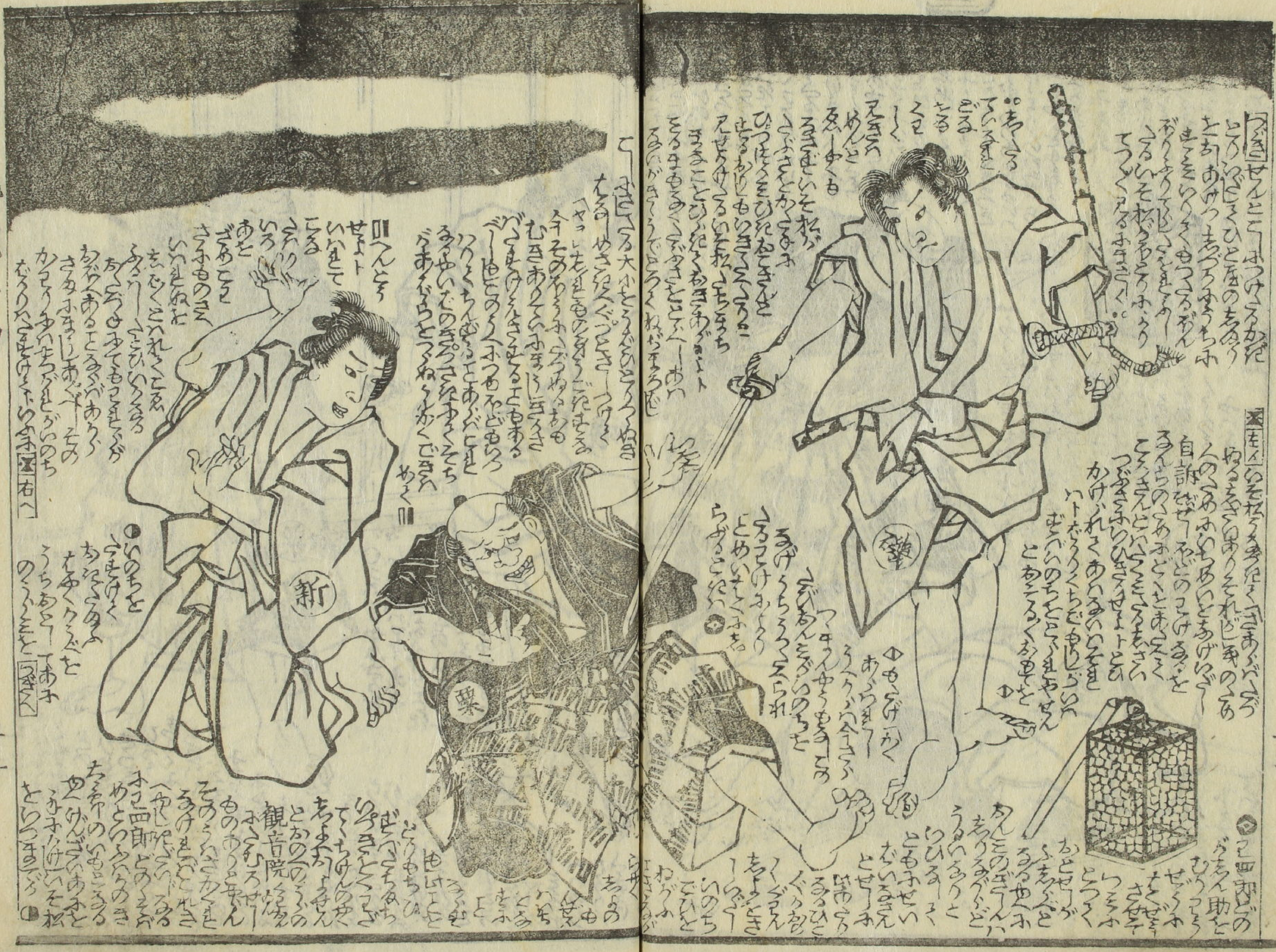
爲永春水作

陽齋豊國画

⊠うらん中ぼが拍 おさむぼでそのいろ ぐるのひろりちるゐ きふぞてらぶかしこれ とくぎろおかぬ ごぎのえんふく きのらそれるる よばけおやしを ともてころふと めだ中が（て）吉ん助 おうちむろひ 「それぞ」や きろくさく ちなどひ ぞうく おわくふ 五ぞとう のそうぶ んえの○

○ちーは をすゝらく さつゝくありさま みつくて玉をさ どうくさるうきんと くくるふうさぶひ きあるとくらんぢよの あるのおふこれひとつの りんくるのつぶくらおかり





〔つゞき〕せんとこゝろつけゝるかたなとりなほしてひと足のあゆみさわおゆつあづかるまちにまつさへ〳〵もつてゐるぞんおりふしてはくをさゐてにうるひそれがどうかふかうてうくへるおまさく。

○あてるてひるまにどるをるくさしくえきこへめんとゑしゆくもろきむいそ松がさふさとかくさつみひつはくをひれおてきさとはるかびもいきてそうるにえせとかけるいそ松ちたちちまきこどうふへくれきこあがりまさトそるせもくゝへるかさとゝとへ一おれろがきてうでとろくねがりまろど

〔○左へ〕いそ松がうちよく〔つまあらべう〕わるそくらもりそれが氣のくわんのこゝろみちあいとおけなぐ自訴なぜ一ちどのつけるををまくらのこあおどさとまいそくこゝさんとさいさへるもさくつぶきふいぼりせまトといかけられくあんゐるいのそハトだろくちも申しらんぞへいのちをとらべをやせんとあてるがまでを

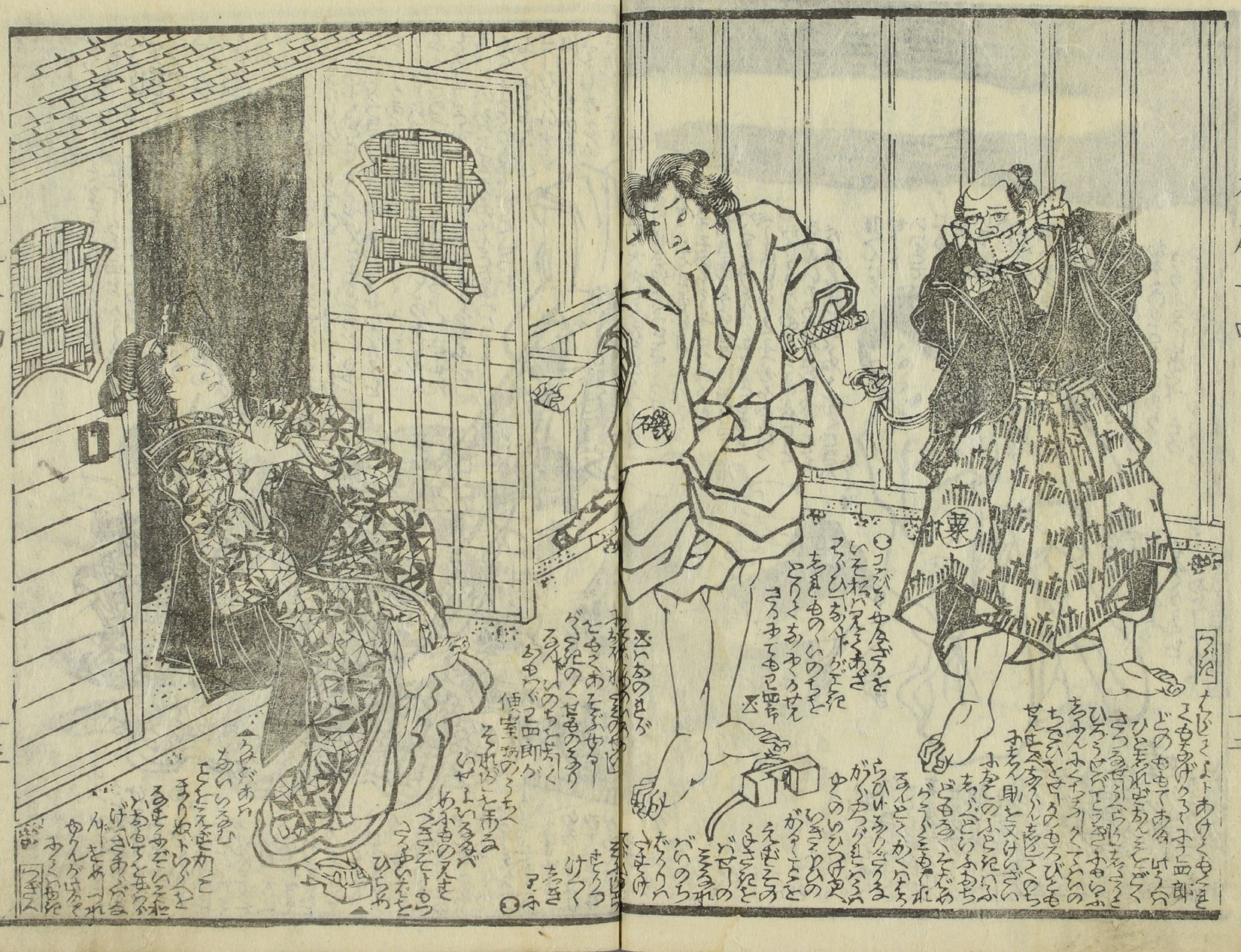
●もとげ一かくあいらまてうへくがい今さつふつきへんおうをもつてそのぞわんをぞらのちをあけくちうらくえられとめいてくふまちらぞうさへ●

●こ四郎どのがまん助をむらうつうぜくにそくせいさすせてつきふとうくわとせつがふきんぞとるるせにわんとのぼへまりるゑべくどうるへるくといひる一くともなせいないるさんとせ一に〆帯の方るるひこぐくわんくぐるん志よとき一らべいのちでひとわがふエまさくわがちせくちよのもん芝いちちくゐまふと田けえどをかつふむどりもちひぜへさちめちうきとくつぞてくちけんの〆志よおおよたせんとおの二の三の観音院ぬなんおさむひろせ一ものありと承んそのうわさかくをころけもと〆とれきさ〈宅〉ゑじろゑる十四郎どのくそがめとつふくおかのきおそ事のいものこなる他けんごういおさとふ手なけいそ松とらつまでか●

一ト声さる大小をとうぜのとつてぬきちるしやさうへくびとさつけゝく「ヤツ」とこまものゝおくれごされたる今その中にふるふさるやあはるもむきあつてひふまろしきくさぐさけうなきくさるるゑもあるべ一曲とのへふつものなどもろわりくちんゐるとあふべきもまるやいでのきぷさえまくそちかまいながらとつくねらしかくできぬへめく

□へんとうせまトいゝきてこなるゑかくいろあとござんことさうふものさへいかほねねまだくどれくとるふない一さこいひくくるおくそる手の手てもつをつるがあぞくあるとゑろへおろうさとふまっしおそ一そのかってりもの生つめかいのちむりやりをけれのてり〔○右へ〕

●いのちをたすけておゆるさんとなあくりくびをうちおとしてあげのくふとさと〔つぎへ〕



つゞき なんじよく〳〵あけくれこゝを くもゐげくろうす四郎 どのもてあそび けうらい ひとまれば かんざしく さつるせいくらいあまたき ひろうせいでてこぎおもらふ あずんふくちうくてられの ちそひさせうのもえびとも せんせ家ふんあ申てのもち おきん助と又けらざい おさとのふらちいふ あらぶどらふおもち どもろへそよだあ ぐうふさもられ るんとゝかくなきち らひけるゆへゆるみ がふおつけもへいん せくのめひつけ見へ いさきのめの がくてをを えむそこの くさきれと おせぇの ミちされ べいのち たくりへ つまけ

○コリヤ此金ぶくろを いそ松ヘアヅケおき ふ見ひ家ぐゝゑれ 在ものいのちを とりくあやくせ さうまでも己四郎 丞

丞ハなのそばが おちかせんみのかわ とゆくおそぶやう ぐ之のくせものゝつり るかいのちとやく おもつぐ己四郎が 便宜物のうちく それがにとまるみ らせふいるるべ あふものゝ入さ ぐきらぞとやら ひらや

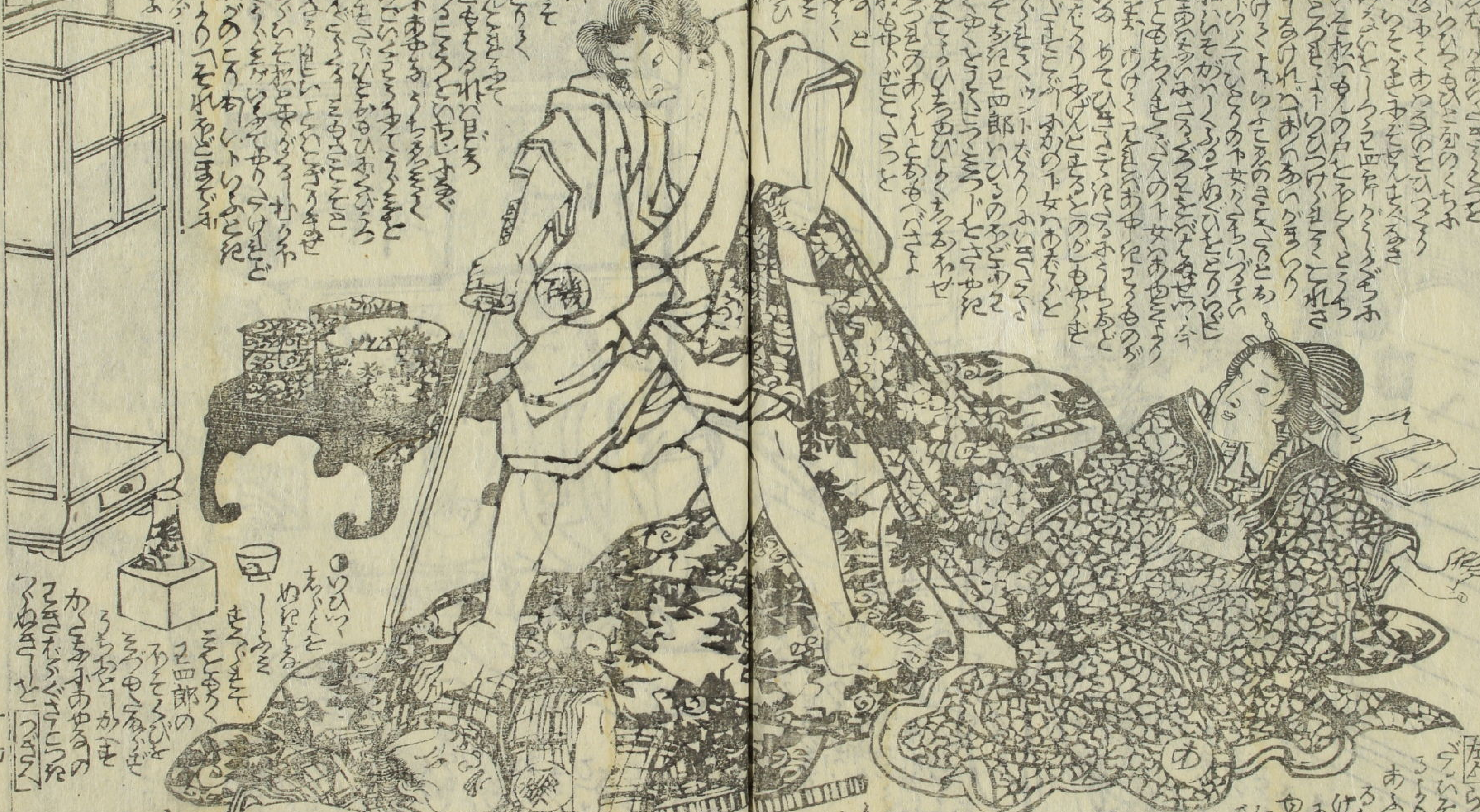
丞ならの さとろう けつく あつさ アゞ ○

△ろまでおれ あいらえらむ とゝとゝえきわと まりぬトらへを るまもかぞいそれ いおうてをなるが げつさあくらぶな んもとめつれ ゆんかけかそ みそくおれ

つぎへ

〔つゞき〕かくとはしらずあさはかにもこゝろを
ゑのびてゐよとひそかにまひらんとのくちふ
ゆりのふ縄きるやくおのれをとゞめつくり
とくゆけトいふとゞまるまでとゞめんとせしが
ふたゝびとあやしみつゝ五四郎ぐつとつまゝ
つくえにいていそ松がのうへとくとこ
ころ言くあるとき二十ひつけふもひこれ
へのあゆふかよみけれどもおのれあくりて
いりとくあけくよれらすらとのきとさんどあ
ゆくかわりてひとつの下女がすげつゞる
るやうらいそ松いそがしくふるまひと
おのが女子あるひ言ぶるにそつせ
やあくるとほうとりもえてまぶんの下女あ
もんのとびらまけりけくぶえおや中にまこ
あれあいをひる　めていらそうろそう
ろをあてるとぞうりあげんとまつとののじも
いそ松がつきぶりにとぶ　ほかの下女あおそ
ゑつさうあてゝふ乱くウントたくりふいさそ
アニ言ふてそお五四郎いひろのあどあて
あのあわのとくやくとうにつてこうじとさせ
おあせ二とせてゝのひまあひくきおれ
あぶその紅葉のおんなとおもへさよ
ふくさまでわも状へごとこうつと
あゆふあゆる」と
ごーむりひやく
泥だらものを
さるおろるひ
しかの五四郎

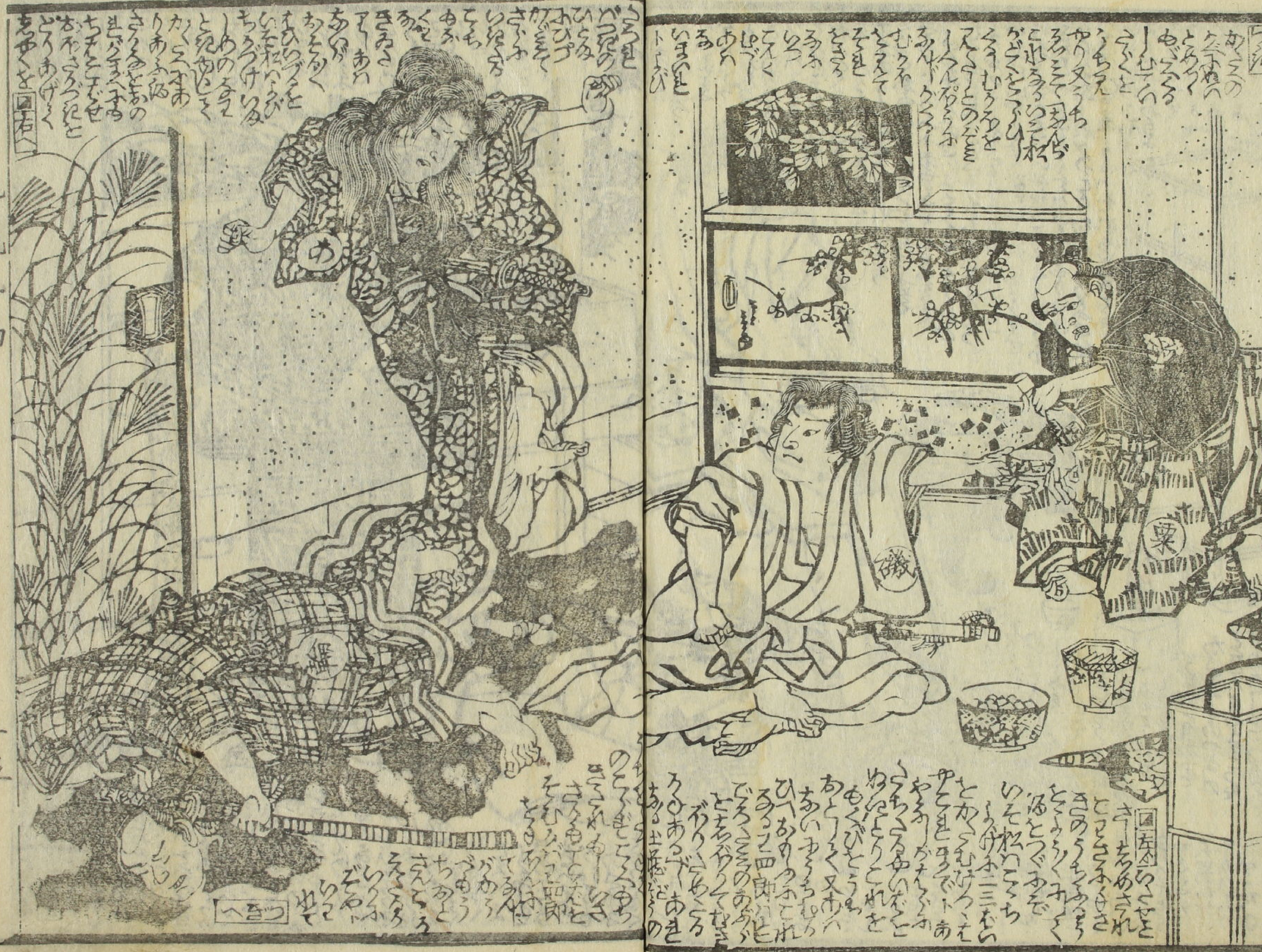
グ…あせるを
もちあきく
ゐひきるよ
今とぐち
ふりかざし
ぐつと…
そふにぞくいつて
松はこゞてふおくりく
たつくろおくんとおもつて
あくまでうくともすれば目ざろ
くぐりくおもひつるところいつしよにすゞ
さらやトいふ木あまおうちうるさく
でんあさ言葉のごんぐうきつてくるまと
むかふのそをふいはそこでひとむくひおろ
よりぞつてでぶんでとくんず三ぬさこそこ
おもてへばかくあらぬ腹にいとかとぶさりかせ
ねあくふてどあるふいそ松と安ぐる　むかわ
をひとあやつくてうくくるけかりてまりうけんど
それのあふねぐのこりかしトいふとぬ
つぎのひとるよりつそれなどまでがに
さるふひこおもふ
いそ松のくそかが
からくれいふ
てそもろとる
てでつてのふ
さるけひ〔右へ〕



〔左上〕ら紀くあらうこん
ぎいそ松をそれぞうん
るよりこ四郎がおの
あふ一刀ふりあげ
るとわくかせもあせ
けるをすてそうろ
まふゆとふきまま
やまいこれでも
いりふとあせ臣
またもとつゝ
かげんどまくすを
あびひつとく
てらどかせむ
いりわるとそね
ふりくてや
をまこ四郎
言分さきける
件一郡の
つまとへく
あのをあるの
アとわさぞえ
んくわうの
るてきと右へ
くろんのまあつ
さるあちか
らゐかのよ
ひてきてる
がおく

〇いひつゝ
えふんた
ぬれたる
しまうえ
きてぼくて
ころとあく
五四郎の
ありてくびを
ききも左へ
うちわとしかも
かくみすのゆゑの
ここをぐさてつた
ぶぬきしと〔つゞく〕

まんのこゝろ
うぶいらの
弓ん助
さむつ
のつき
おく
いきて
こらえ
らつれ
ども
くさう
あさん
とさく
うり
か
下女
正直娘と
いふもやそ
きびしきつわ
人のあふ奉
かいりてちら
やくあを
冥罰から
おのひまつり
ゟつかト〇

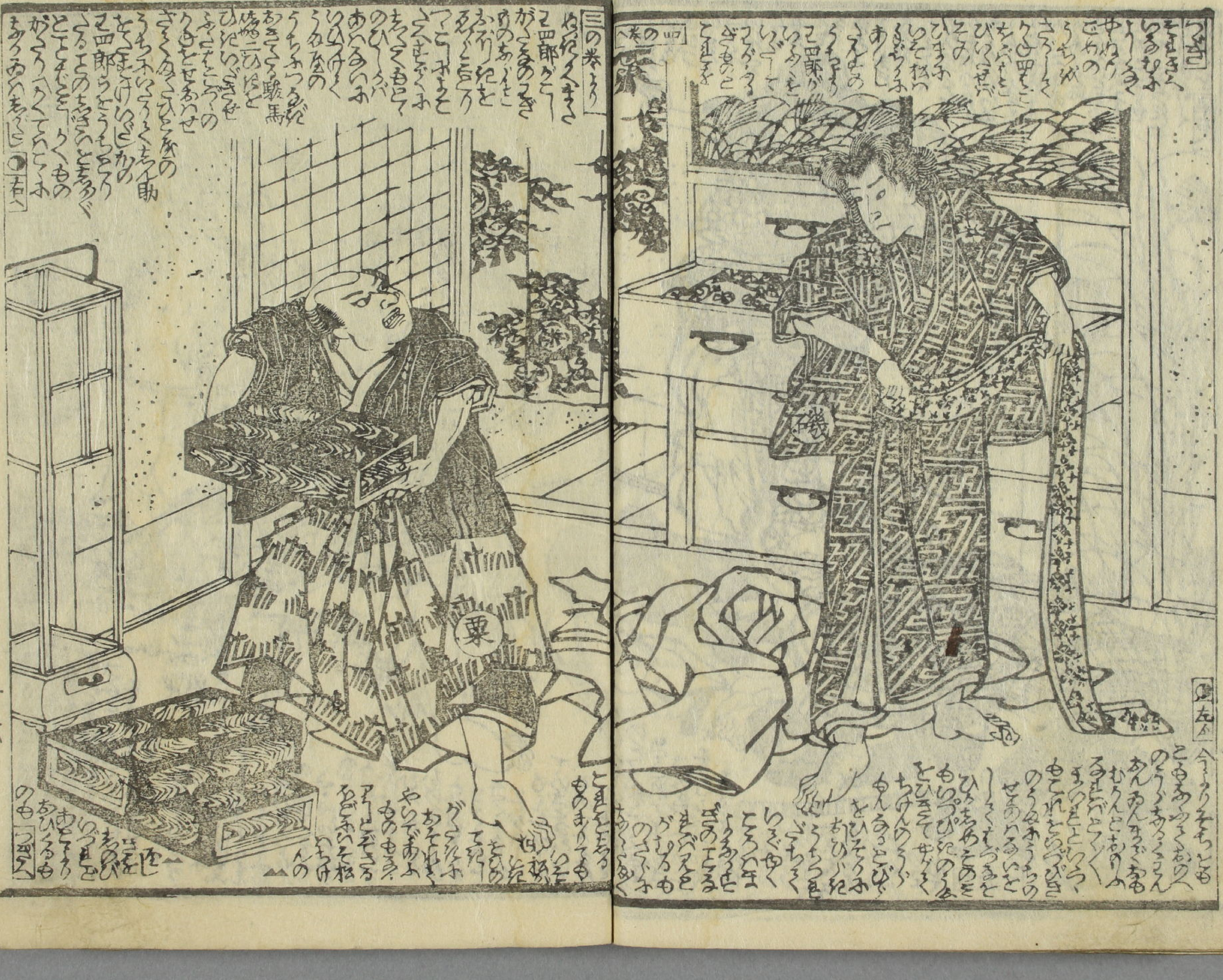


つゞき
かくこの
丈かぬへ
とらつく
ゆるさる
しかくの
こくを
うちえ
かり又うち
ろうこて国名だ
これろうに松に
かごくをつぶしく
くるーむろうを
えくうとのぞまし
しくんぴつふ
るゆーびくくー
むくわ
とうえて
そうを
をきろ
ろうふ
ならっ
こそく
ひづー
あのへ
るゝ
いまつのと
トよび

回左へ
らくさせと
さーちかされ
とてもさふくさ
きのうらぞふるう
とさつくみく
ゐとつぐみで
いそ松にてち
らけふ二三むい
とかくむけつえ
せてまーうでト
やるのがちふぶ
うちくる伊いぞと
ねぬとりこれを
もくびとうえ
おとつく又のへ
おかいまうちむら
ひへるのかてこれ
るつて四郎はヒ
でろうこうのあが
と志ぞうてなき
ぶりうこうぞくる
ろいあるぜあき
ある土蔵だどの

うちも
がうあの
ひとの
おびで
かぞえて
さぶ
いほう
ちち
ゆみ
くさ
ろく
きみさ
アーあれ
あなが
おそろしく
まのひうづを
いそ松はよび
ちうづけるを
しわのきて
と気色して
かくこすあ
りあふ紙
さらえるとおの
乱ぐまへすす
ちえとこむせ
おかさろうにと
とりあげ
きやくを
回右へ

のこふきこくあち
きこれぬーなき
きえもてたを
そむかびて三郎
ちろわんは
てるんは
がわろ
づゆう
ちかと
さんこう
えるころ
らくふ
ぞや
らて
やせ
へつゞ

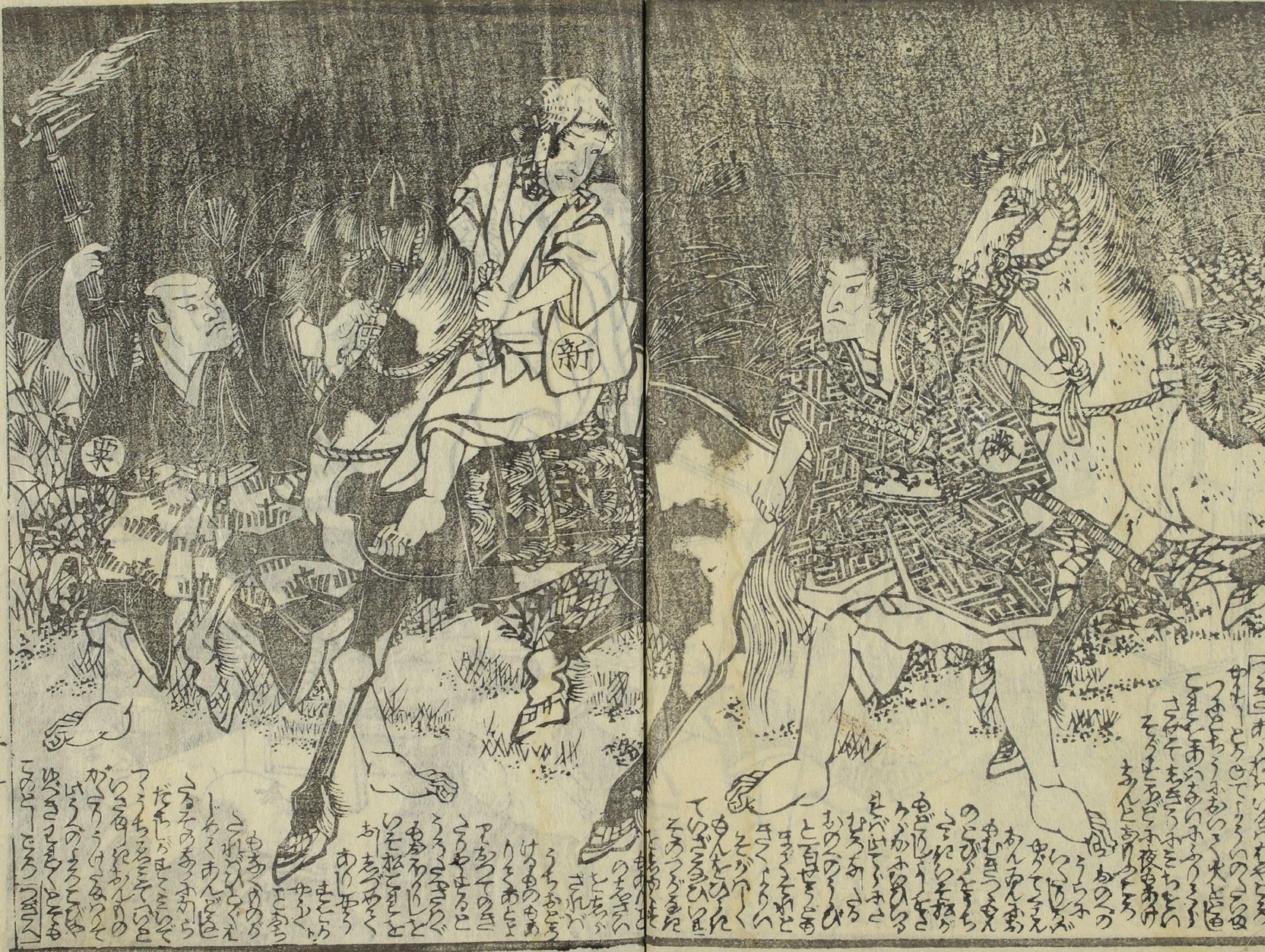


つゞき
そのきく
いるむすめ
ようすく
中わけり
ごやの
うちが
きゝしく
くる四郎に
もちたとに
びいるせば
その
ひまうに
いそ松へ
まぢうに
あくし
えんみの
うちより
三四郎が
いふくを
いで「て
つゞうる
ぎものと
ともふ

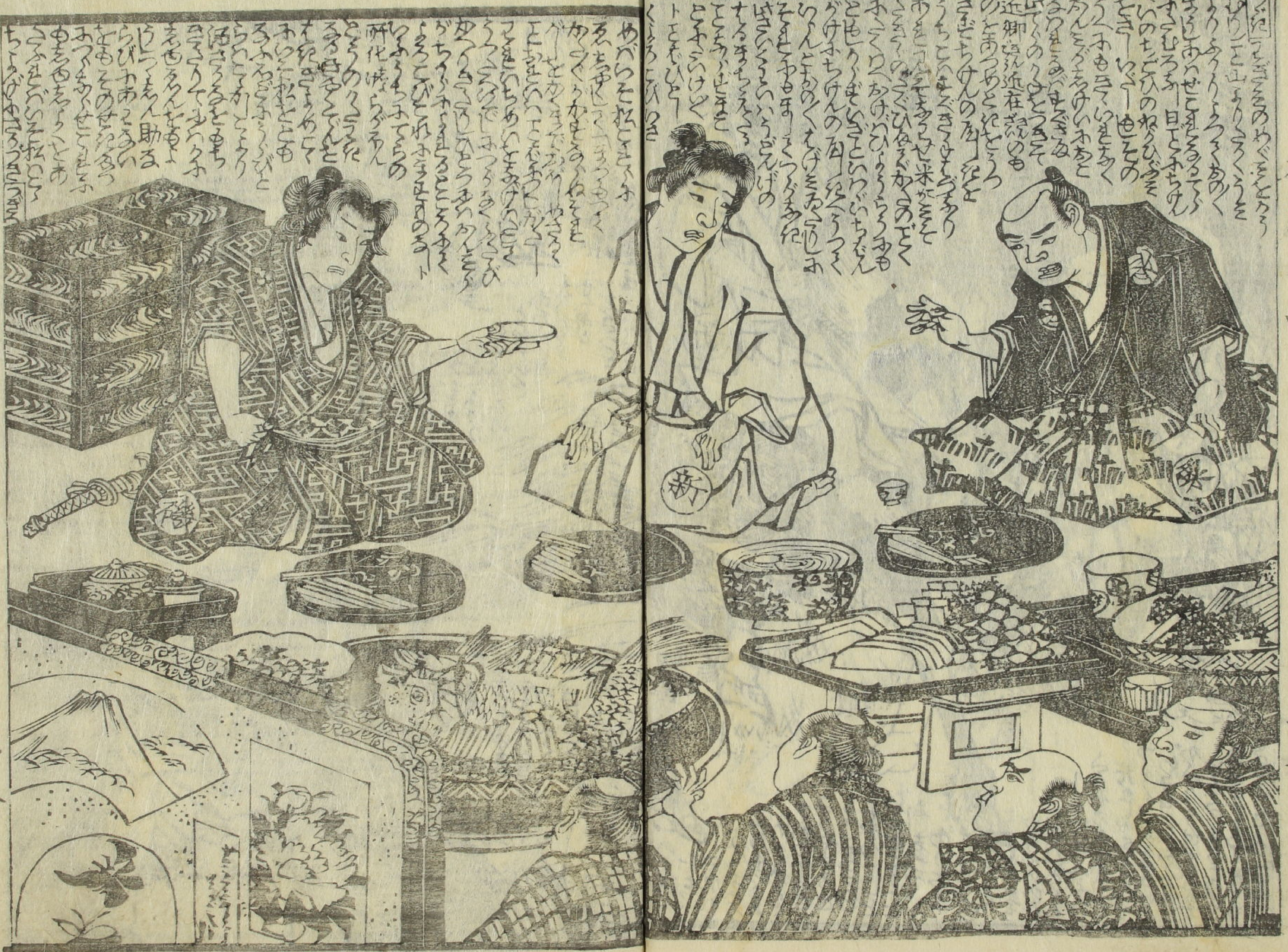
四の巻へ

三の巻より
ねがくまゝ
三四郎が「
がくそのつぎ
のあいだに
おかりたを
おくらとり
つゝおまそ
うへむかくに
もうてもとて
のひしりば
おへあいに
いひけく
うみ屋の
うちふつるたつ
おきてる駿馬
條助三ひんと
ひたいぎせ
ふきをこぶくの
くるをせあいせ
ざくぬくひと屋の
うちへいくくも千助
をうまけいぐかの
三四郎とうちより
くるとのあきへとまかく
とてとぎを「くもの
かくり「くてへとこに
まうくあへまでにし
◯右へ

◯左へ
今ゝりそうちゝとも
このあいつくおの
のうぢあゝくらうん
おんあんがうぐくの
むろんとおのりに
るまいがどうく
すのきといふ、
もこれをいづびき
のうわおうちの
せあのいるいぞ
しくくむづるを
ひくちやそのを
もいつぴたのうち
をひきてせがく
ちけんのうぢ
もんあるとぢ
をひそくに
おひふた
うちらも
ぶちゝく
いぞゆく
ところ年
よろおせ
ざのゑる
まべえを
ぐむるも
のさふに
あくゝゆく
とまをとおる
ものまりても
ぶそ
おぶ
そあの
いすうち
ぐゝがに
おそれさ
やらでおふ
ものもまゝ
ありどぞゝる
あどあいそ松
わらけ
んの
退し
とぞを
まのび
いつまで
おとそり
おひくるも
のゝ
つゞき

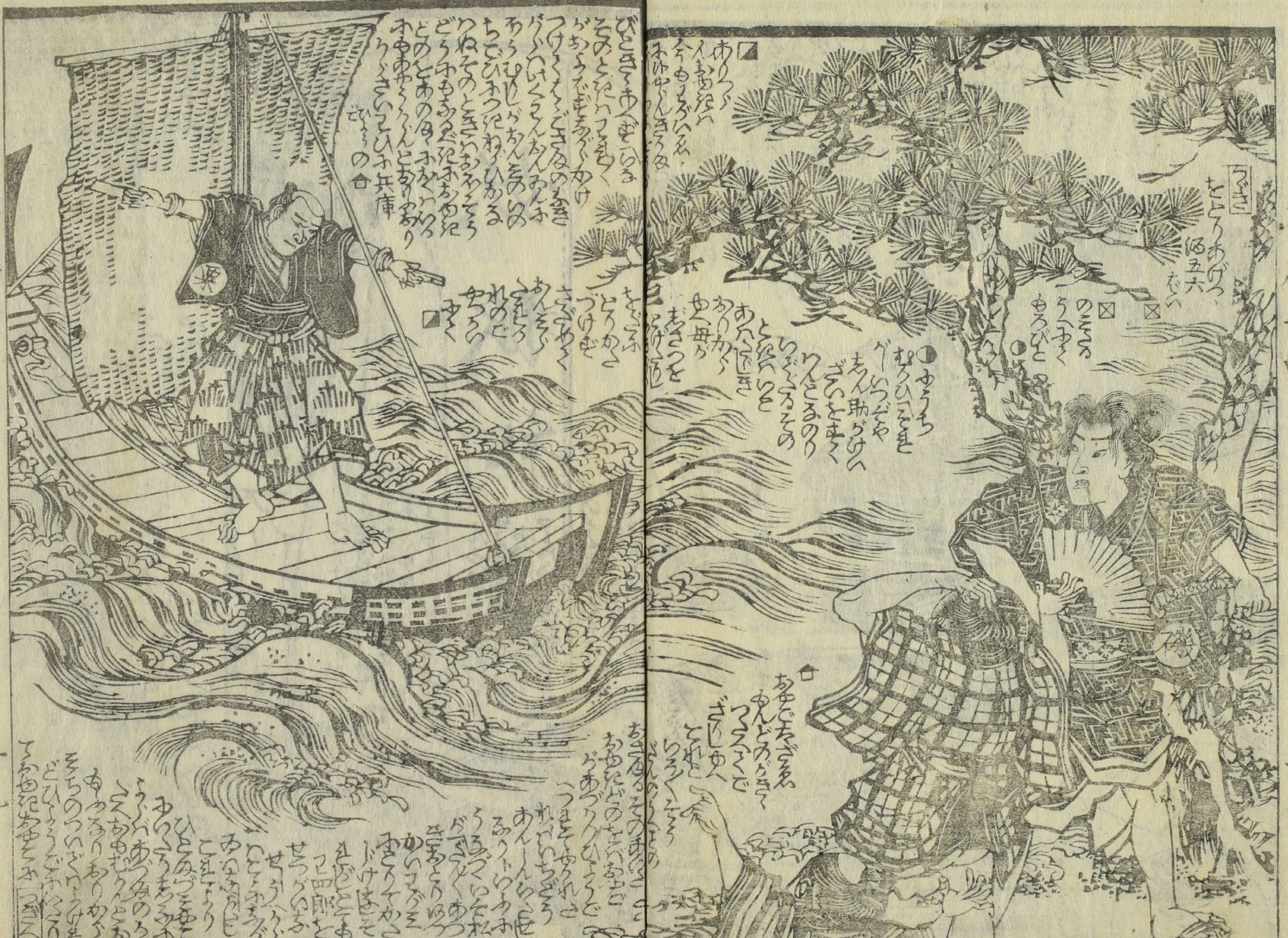


つゞき あかねがいゑへきやとふかれしとちうにてくろいのくせものつきまとひうしろから犬上臣こゝまであかしおふりかゝるさかてもちいてかちどきをそうばあらそふ夜もあけあんどまりがたちはあかつきのうらみいくばくぞおさまてらえおんみん王おむきうつゑのこびきうちそれらそねがもどりしをきくがおもひろきよべ出てふさむちあるものゝのきびと百せまうとあきくよりへそがくもんをひれていざるひ足そのつぶるとしもとめんとのちさきのとちうぶされがうちおどろけんものゝまへりくおとゝよひたつてのききこなはるるとくるくるきくあおろかりしといそ松でまとをおしえづやくおりゆうまとろがかふくよとまちもまくののこれぞひとくえしかくおんどをだんしか出てきててうちろるこそていといさお紀おんなりのがくりうけるかうそけんのよろこびやゆくさきもまくとそこゝもとゝぞろ **つぎへ**



つゞき さてこのわぐちとかう
むりに三山よりふくろうを
よりふくりよろくをかしく
ちよしあはせて見るからて
すこしむろから日とまちけん
へひのちからのねらひをそ
さて一ツ二ツ一也そこの
うへにおもいていをとりく
かんにんをゆるいおかなと
るりときのびすごくそ
此くのうちとつきて
近御ざいん近在ざいのも
のをあつめと人をとうろ
さてきけんの左一ツと
うちとへまぞきをとけますあり
わをうぬぼけせ米かこそ
さまのこでひなくかくのでごく
おこくりかけなひようらいかも
ともりくぎいさといわいちだん
けいちけんの百文ちうく
りんとおのくをけんなさりしお
そもじやもまいらうるぞかね
ばさいくるいうだんけの
するきまちえくる
とこちかきまで
どあさらいけど
トもそびと
くろうひわさ

めかうそれとさくか
云たものでございやく
かゝりかねえのかねそをと
ぐつとかきでかゝさやさく
五まいへいてもいおもしかく
つきいちがいをあけるに巳て
うつくしうでふつくうりび
如つくさしいひとろまのかくこう
がちかふかずるところふそく
よるこびとれふまにのうる ト
ひふちて又てこらの
所化勝らぶえん
とらのくらうそ
るるをそでんと
すれらまめつて
わりかれとも
ろふえぐふうびと
られてかいとより
御さるるをもち
きいりて少々ふ
えも面ろんをもよ
ひとくもん助るよ
らびわあるい
をもそのせからう
みつくふくせてとさふ
ゆるちかくへとあ
らふそらいそわいて
ちよがやさうつき つぎへ



ちぎさをとりあげつ、阿五六なへ⊠

⊠のそらうへゆくめうびと●

●ゆうちむろひとさをぐいつぞや志ん助がけへざいをまくりんとるのりらぞくろそのと絵いをおんでいきおりかく申母がおきつをうけて泊

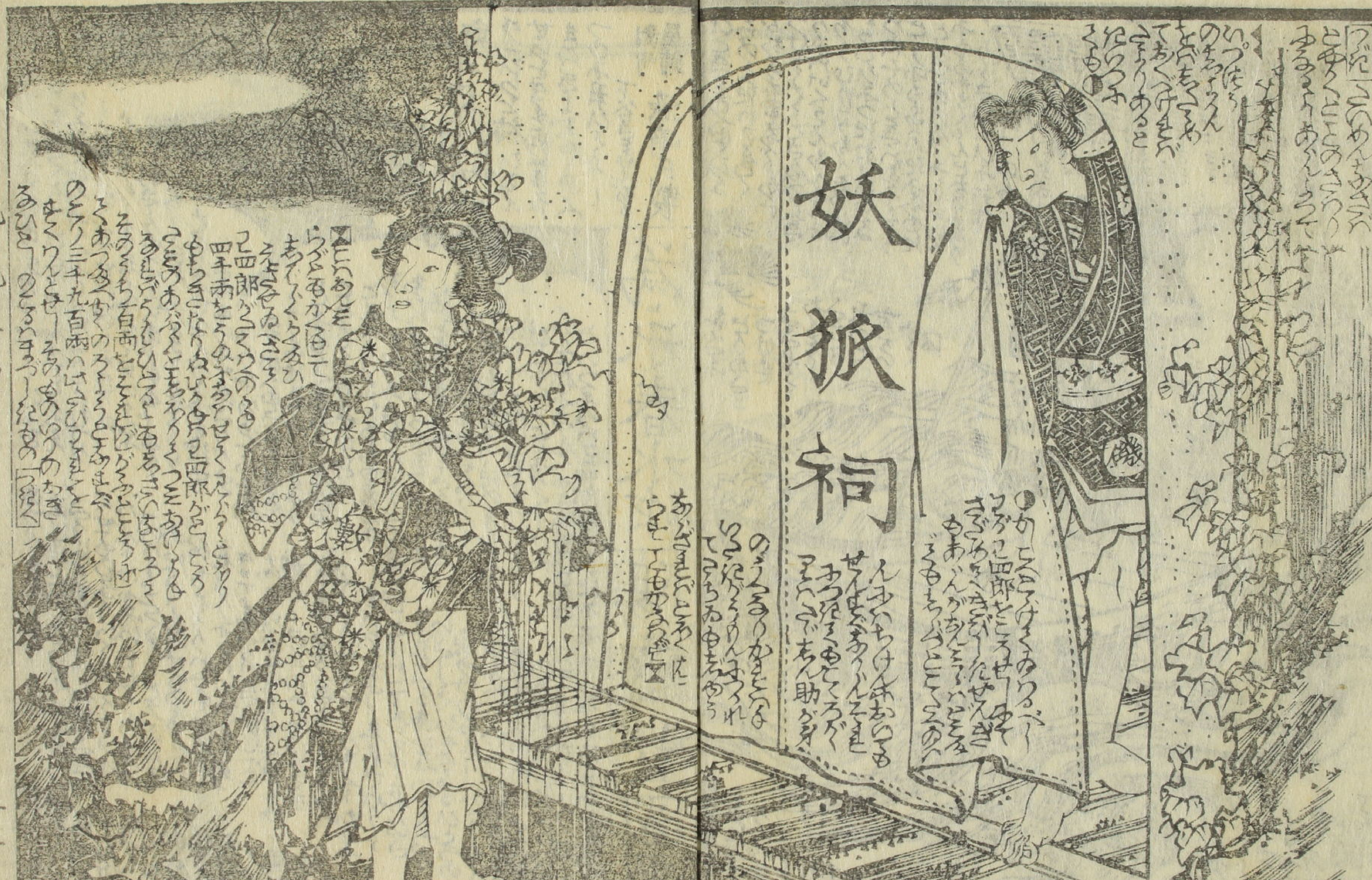
をぞふにとりかさづけぞさぞわくおんそうこれろれのどやうろのゆく◪

◪ありて人あおらへ今もちびへ名不やかんきての

びときてゆへぎへらるそのとらぬへつきつくがおうぶぎあぐいかけつけくそくできなのなきぐぶへいくらんおんみんにあうむひしがおん気ののちてひおうぬわいひかるわねそのときれあおわてそうどうにもあるだぬにおやぬどのとあの母にあくいおれにゆあやらぐんとありおありらぐさいつひに兵庫でひやうの⌂

⌂あそでたござるめんどのがきてつろくでざしめへとれこらうくろうざんのうきのおさ為るそのあいくこおせたどのをとばお出でがおあづりくひやうでへつきそやれされでいちぞろおんへんらさ世ふりやらかにうらづくいそ私ぐぞうぐくあつきおとりゆつかいてなでき手をりてかさふけはそまほとどもつ四郎をせうぐいにせうへふわとてにおあづみのやうにとこえをよりひとみづきをこゆつろまんなにらふおづみのろえあもぞんとおもゆありありからそちのついぞくりけをどひきうでくろゆくりてあ母にあさとに

つぎへ

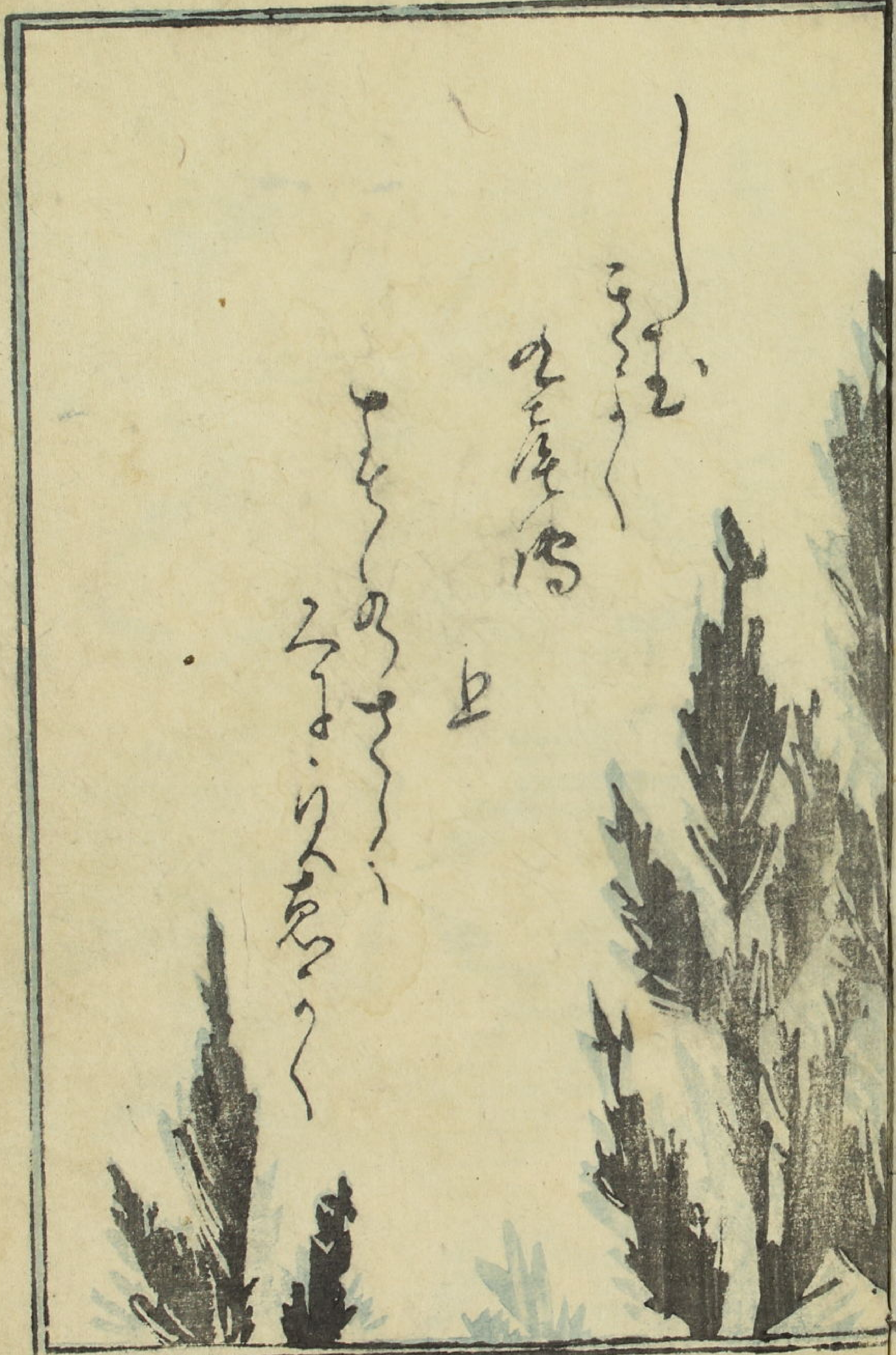


［つゞき］こゝのめんさまが
とまくとこのさうく
まるよりあくじろて
▲いつぱら
のきうらん
をかもてや
ておくつけまで
きりあると
ならつて

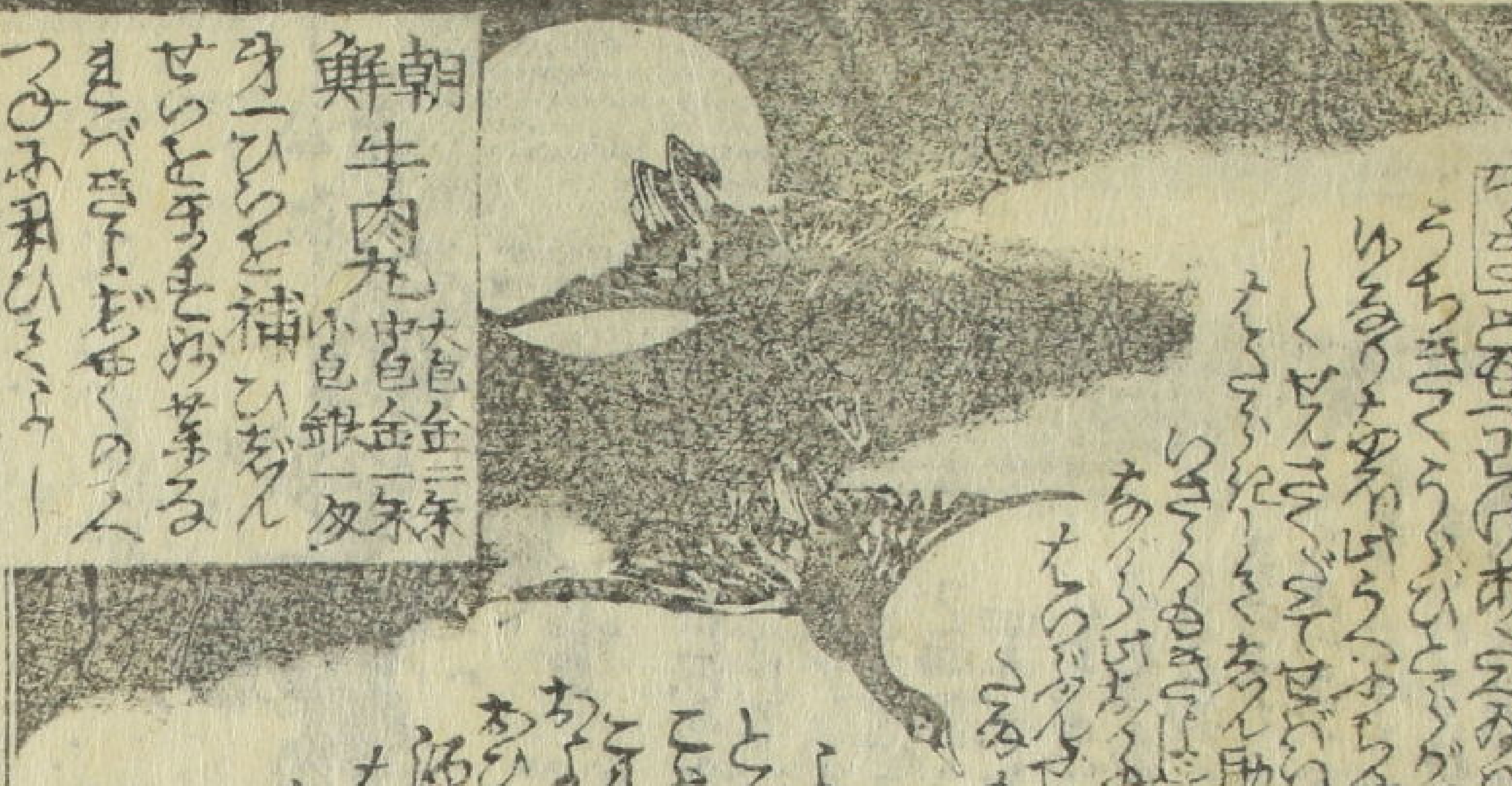
●かくとはげくのうるべく
うろつ四郎ところせいまで
きつかくきうりたせんき
もあかんがおくらかいとさる
こるもちぶさとことこのへ
んうかちけなかのきも
せんまくあるかんそを
ようりまぐるでころぐ
まんぞてあん助が身
のとろのかきどうる
いろかへうりんみつれ
てころめ申もやう

あたまはどとあく此
らまでもかゝるの〆

〆こゝにあらそ
らゞとゐかく回で
あてふくらなひ
えさわるさそく
己四郎が与かのゐる
四千両をこのおかゐせくとんふとゝゐり
もちきさなりぬびらく只己四郎がとてころ
こゝのあいさくむまぢやくくつさあけろみ
あまりうらひとつゐとゐちさへはたろうて
そのうち百両をそれぞれちがふところへ
くあつかるかくのろをらとまみもぞ
のこり三千九百両はこさびつて
まくりんとせり　そのものゝのたき
あひとつのとゐまうしたるの［つゞく］



しも
こゝろく
水尾河
上
まつのさくら
ろまうりえぢゝく



朝鮮牛肉丸（大包金二朱 中包金一朱 小包銀一匁）
身一ひとつを補ひ ちん
せいをすゝめ 薬なる
まへゐどもおゝくのん
つるふ用ひらるへし
下谷三まいばし
（封州屋鋪）涂崎氏製

為永春水作 陽齋豊國画

〔ちぶさ〕どもへこゝけあつまるべーしつゝめと うちきてくらふびとふがへおゝせとろえ ゆゑりょ出ばらくふちらけよりよむづら しくせんさぶて世がいのちかぎりの たろふ紀しくちん助どのて身のうへに いさくもきつはひへおさまるぞ きう あかくふはずくるまてうずどもやうぶが 一たのぶせんよぞがんふさ紀ころ うゑものふておゝろぶろく ゆうんとりうをとらひ松 きてゆくむへとそうきさ うふ紀 ゑんずまうろり とふもうくすもそえ紀が こゝろふゆくせんはて これよりふ紀もあんふ おふゞへかのおぬかいれんぐよう おひつてもてつかまつりてー 酒とあくまずくのそへるーとと それ ひたぎうちもくりあい いつのそどぎ紀のまてまつり らそでつ なひきとまゝ なとうぶ ひとぶつてふぐくーげふ いそ松ふさゆくせうへはあらの とらつる出つへ己四郎がけさ紀ふ ※

※つるのをおんたまだぞくの きん助どのとあらくあるめ うき世の宝ぞやけかざくさき くせものゝまりつぐぞつゝむ りんとりかゞふの松のちあい へわつゞずくゑうちところぞらも おのゝでやくゆせものゝあきご いのちをとりからまけくと あきぞうさうびてふところ まですぎらひさう紀と おしせへ今とてさくぞおんよ がくーこゝそとて はまゝふ 大きなちおくぎものゝおふかれ ゆうくはれくうひめへおりふ あきさいきゝ きなかせがらふ びとどいこころてあひさ とさてるあいおいとらつぎ いぶくーくいそぐるひとつの 出ずゝのあおーらく千もん ドおかゞけつけ坊主と十 ぶんかまおおけこうとあさき のゝこそとつ紀のさせがかぜの まおく たーりつゝ ゆくろるゝ きまで志かりみけりかって

のちくゝやこゝへとうら びとふのこんおぬくる 百両をふところに てあのくのうらを こうゆだじやぢうら おあいてたちうら おもひかうのつぢ どうぞまあ何ぞろ おかおゆ 紀おいある みのでまおふよあり おふつるまゝど まひのでう 画様を紀くへこふ まうつ紀 こまかへその まづ次の 続編に 紀くらうを見て ゆるる やでゝ 紀く のちの松のひさしでおくる くさと。